宮城県岩沼市文化財調査報告書第６集

鵜　ヶ　崎　城　跡

―第４地点発掘調査報告書―

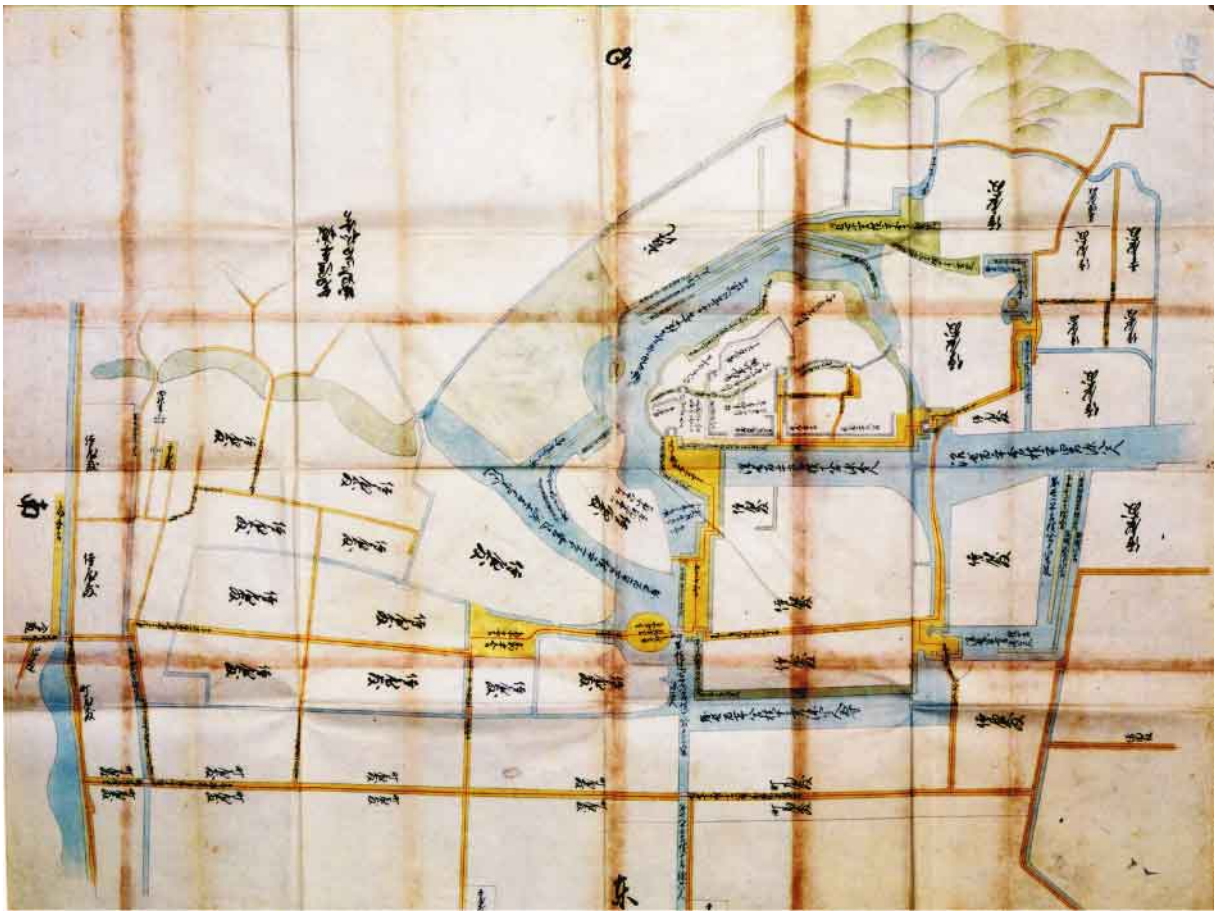
2005年８月

岩 沼 市 教 育 委 員 会

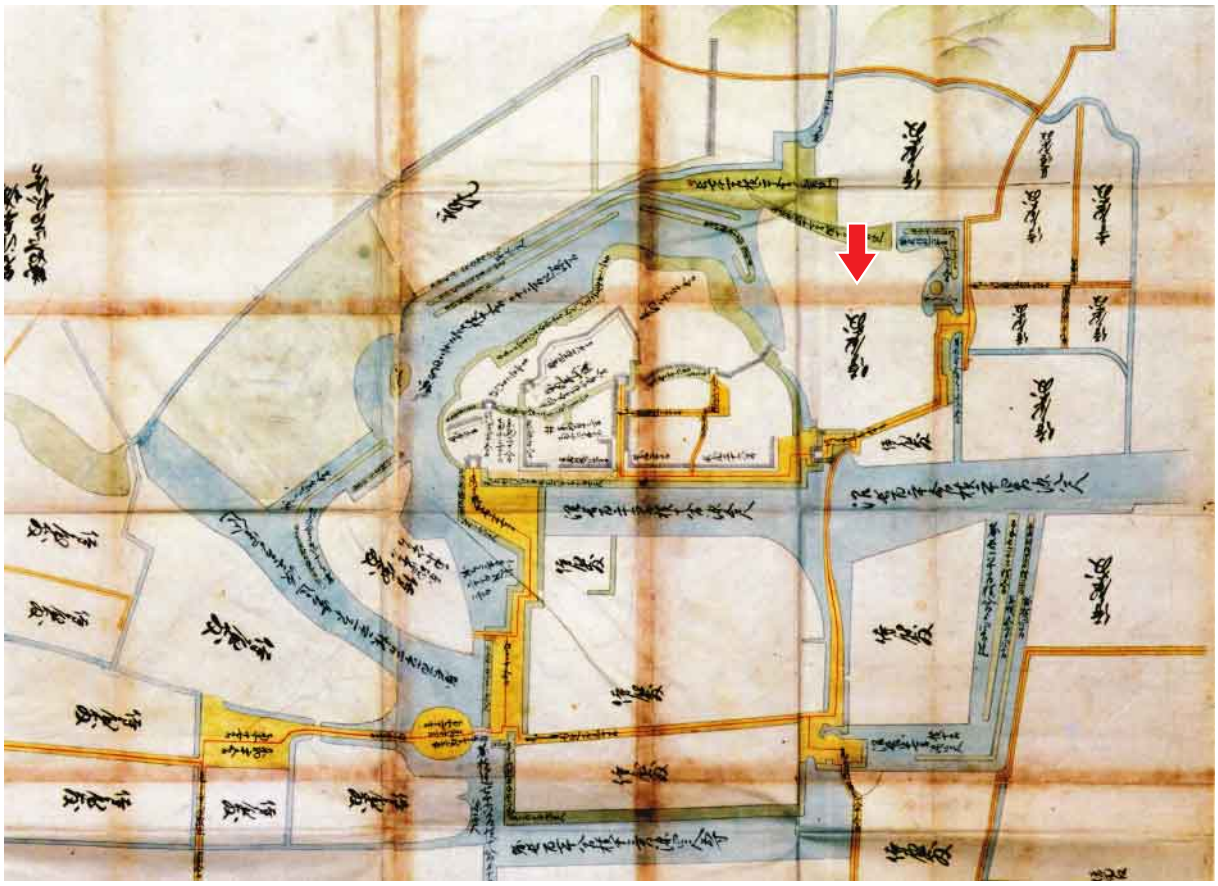
鵜　ヶ　崎　城　跡

―第４地点発掘調査報告書―

SX02土塁断面



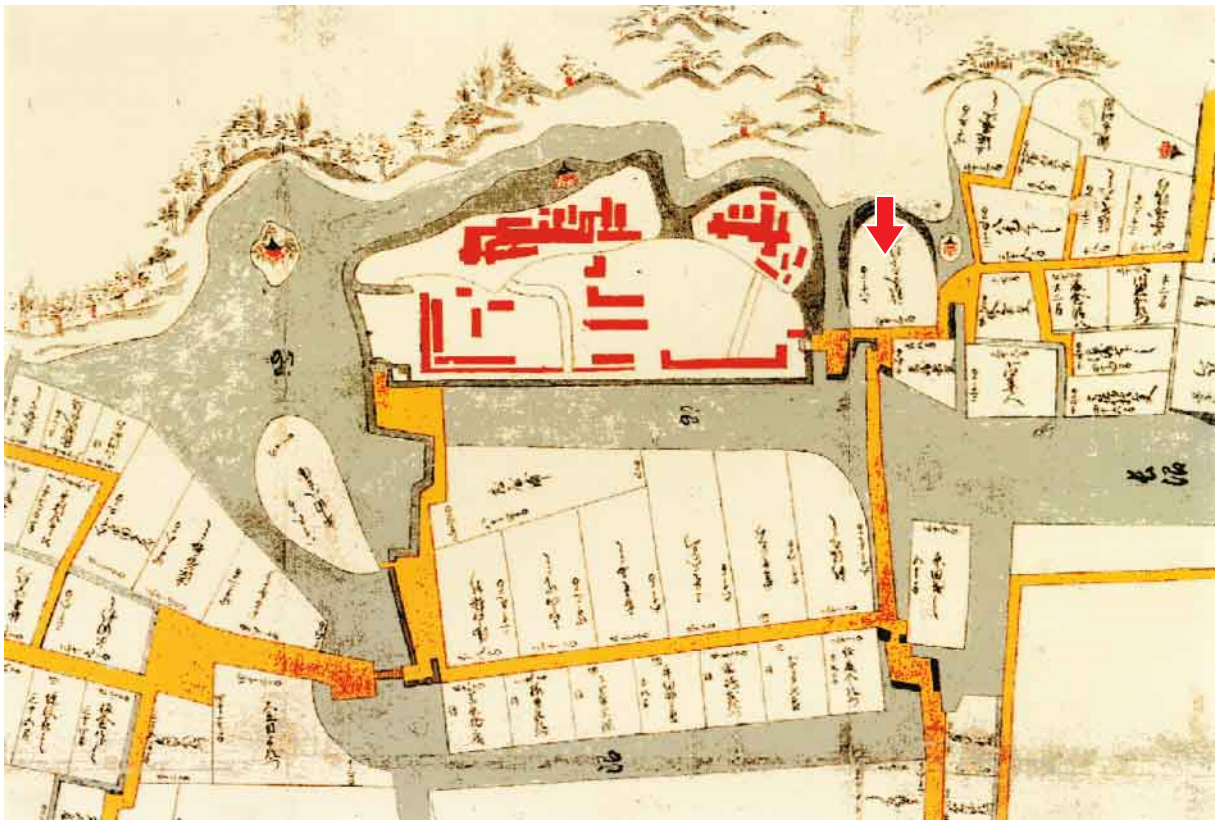
『岩沼平城御廻切絵図』（仙台市博物館所蔵）



同絵図本丸付近（↓が調査地点）

巻頭２

名取郡岩沼郷館并館下絵図（宮城県図書館所蔵）
（↓が調査地点）



『岩沼之絵図』（一関市博物館所蔵）
（↓が調査地点）

例　言

1．本書は宮城県岩沼市栄町１丁目４番地２号他に所在する「鵜ヶ崎城跡」第４地点発掘調査報告書である。

2．本発掘調査は、宅地造成工事に伴う事前の記録保存を目的として実施されたものである。調査に係わる費用は全て事業者負担によって行なっている。

3．調査に際しては、事業者である小野澄子氏、平間道章氏に御理解・御協力を頂いた。記して感謝申し上げます。

4．発掘調査は2004(平成16)年10月12日から12月24日にかけて実施し、岩沼市教育委員会生涯学習課が調査を担当した。調査対象面積は1,254㎡である。

5．出土品整理及び報告書作成については、2005年３月22日から６月30日まで、岩沼市文化財展示室にて行なった。

6．本書の第２図は国土地理院発行の1/50,000の地形図「岩沼」を複製して使用した。また第３図は岩沼市発行の1/2,500の国土基本図を複製して使用した。

7．本書の遺構番号は、遺構の種別に関わらず、現地調査時に付したものを使用した。遺構記号は以下の通りである。

ＳＢ；掘立柱建物跡　ＳＡ；塀跡・柱列　ＳＫ；土坑　Ｐ；柱穴

ＳＸ；土塁、遺物包含層、整地遺構、不明遺構

8．本書の執筆・編集は、生涯学習課内での協議の上、川又が担当した。

9．本書に掲載した写真は、遺構を相原・菊地・川又が、遺物は川又が撮影した。

10 本書に関わる出土品及び記録図面等は岩沼市教育委員会生涯学習課にて保管してある。

11 発掘調査及び資料整理に際し、次の諸氏・諸機関より御協力・御教示を賜った。記して感謝申し上げます(順不同・敬称略)

相沢清利　相原淳一　安達訓仁　大場司　菊地逸夫　小泉博明　後藤秀一　佐藤則之　佐藤憲幸　佐藤洋　篠原信彦　須田良平　須田富士子　須藤隆　田中則和　土橋尚起　柳澤和明　吉井宏　東北大学理学部　仙台市教育委員会　宮城県教育庁文化財保護課　仙台市博物館　宮城県図書館　一関市博物館　東海興業株式会社

12 本書では、調査中に検出された「テフラ層」について、東北大学理学部地球物質学科の大場司氏より玉稿を賜り、掲載させていただいた。記して感謝申し上げます。

13 本書における遺構・遺物挿図等の指示は次の通りである。

（1）遺構実測図の水糸高は海抜を示す。

（2）縮尺は図に示すとおりである。

（3）遺物観察表の法量における単位は「㎝」である。

（4）土層の色調は「新版標準土色帖」(小川・竹原：1973)に拠った。

（5）図中で使用したスクリーントーンについては各図の凡例に基づくが、断面図に用いた斜線のスクリーントーンについては地山面を表現するものである。

調　査　要　綱

遺 跡 名　　鵜ヶ崎城跡（宮城県遺跡登録番号：15023）
所 在 地　　岩沼市栄町１丁目
調査主体　　岩沼市教育委員会
調査協力　　宮城県教育庁文化財保護課
調査面積　　1,254㎡
調査期間　　平成16年10月12日～12月24日
調 査 員　　岩沼市教育委員会生涯学習課
　　星　　誠　川又隆央
　　宮城県教育庁文化財保護課
　　相原淳一　菊地逸夫

調査体制

平成15年度（確認調査）	教育長	影山一郎	
生涯学習課	課　長	八木　誠	主幹兼係長　鎌田幸男
	主　査	星　　誠	嘱託　川又隆央　小泉博明
平成16年度（本調査）	教育長	影山一郎	
生涯学習課	課　長	八木　誠	主幹兼係長　木野潤一
	主　査	星　　誠	技師　川又隆央

〈発掘調査参加者〉（五十音順）
板橋順子、大友栄治、小竹吉弘、今野耕悦、今野優、菅原孝子、高橋靖男、洞口孝雄
村上啓子、山田俊博、山家新一、我妻光雄

〈資料整理参加者〉（五十音順）
板橋順子、菅原孝子

目　　次

第Ⅰ章　遺跡概観 …… 1
　1．位置と地理的環境 …… 1
　2．周辺の遺跡と歴史的環境 …… 2
　3．鵜ヶ崎城の変遷とこれまでの成果について …… 8
第Ⅱ章　調査の概要 …… 12
　1．調査に至る経緯 …… 12
　2．調査の経過と方法 …… 13
　3．層序 …… 14
第Ⅲ章　発見された遺構と遺物 …… 15
　1．縄文時代 …… 15
　　A．遺物包含層 …… 15
　　B．ピット群 …… 31
　　C．東側平場内谷地形 …… 31
　2．弥生時代 …… 33
　　A．竪穴住居跡 …… 33
　　B．遺物包含層 …… 34
　　C．遺構外出土遺物 …… 35
　3．中世～近世 …… 35
　　A．土塁 …… 36
　　B．大型土坑 …… 45
　　C．掘立柱建物跡 …… 51
　　D．柱列 …… 53
　　E．溝状遺構 …… 54
　　F．土坑 …… 58
　　G．遺構外出土遺物 …… 61
第Ⅳ章　考察 …… 63
　1．遺物について …… 63
　2．遺構について …… 68
遺物観察表 …… 74
付編　岩沼市鵜ヶ崎城跡にみられる「テフラ層」について …… 79
写真図版
抄録

挿 図 目 次

第１図　岩沼市の位置と地形分類 …… 2
第２図　遺跡分布図 …… 3
第３図　鵜ヶ崎城跡内調査地点 …… 9
第４図　第２地点全体図 …… 9
第５図　第３地点全体図 …… 9
第６図　第１地点出土遺物 …… 9
第７図　調査区設定図 …… 12
第８図　グリッド設定図 …… 13
第９図　基本土層模式図 …… 14
第10図　ＳＸ０１遺物包含層 …… 16
第11図　ＳＸ０１出土遺物（１） …… 18
第12図　ＳＸ０１出土遺物（２） …… 20
第13図　ＳＸ０１出土遺物（３） …… 22
第14図　ＳＸ０１出土遺物（４） …… 24
第15図　ＳＸ０１出土遺物（５） …… 25
第16図　ＳＸ０１出土遺物（６） …… 26
第17図　ＳＸ０１出土遺物（７） …… 27
第18図　ＳＸ０１出土遺物（８） …… 29
第19図　ＳＸ０２土塁下のピット群 …… 30
第20図　東側平場内谷地形 …… 32
第21図　谷地形トレンチ出土遺物 …… 33
第22図　ＳＩ０１住居跡 …… 34
第23図　ＳＩ０１住居跡出土遺物 …… 34
第24図　弥生時代の遺物 …… 35
第25図　遺構全体図（１） …… 37
第26図　遺構全体図（２） …… 39
第27図　ＳＸ０２土塁全測図 …… 41
第28図　ＳＸ０２土塁断面図 …… 42
第29図　ＳＸ０２土塁下部の遺構群 …… 46
第30図　北側平場遺構配置図（整地層下部） …… 47
第31図　ＳＫ０６・０７・０８土坑、ＳＸ０６・０７・０８大型土坑 …… 49
第32図　ＳＡ０４柱列、ＳＢ０７・０８掘立柱建物跡 …… 52
第33図　南西平場遺構配置図 …… 55
第34図　北側平場遺構配置図（整地層上面） …… 57
第35図　ＳＫ１０・１１土坑 …… 60
第36図　中・近世の遺物 …… 62
第37図　土塁変遷模式図 …… 70

写 真 図 版

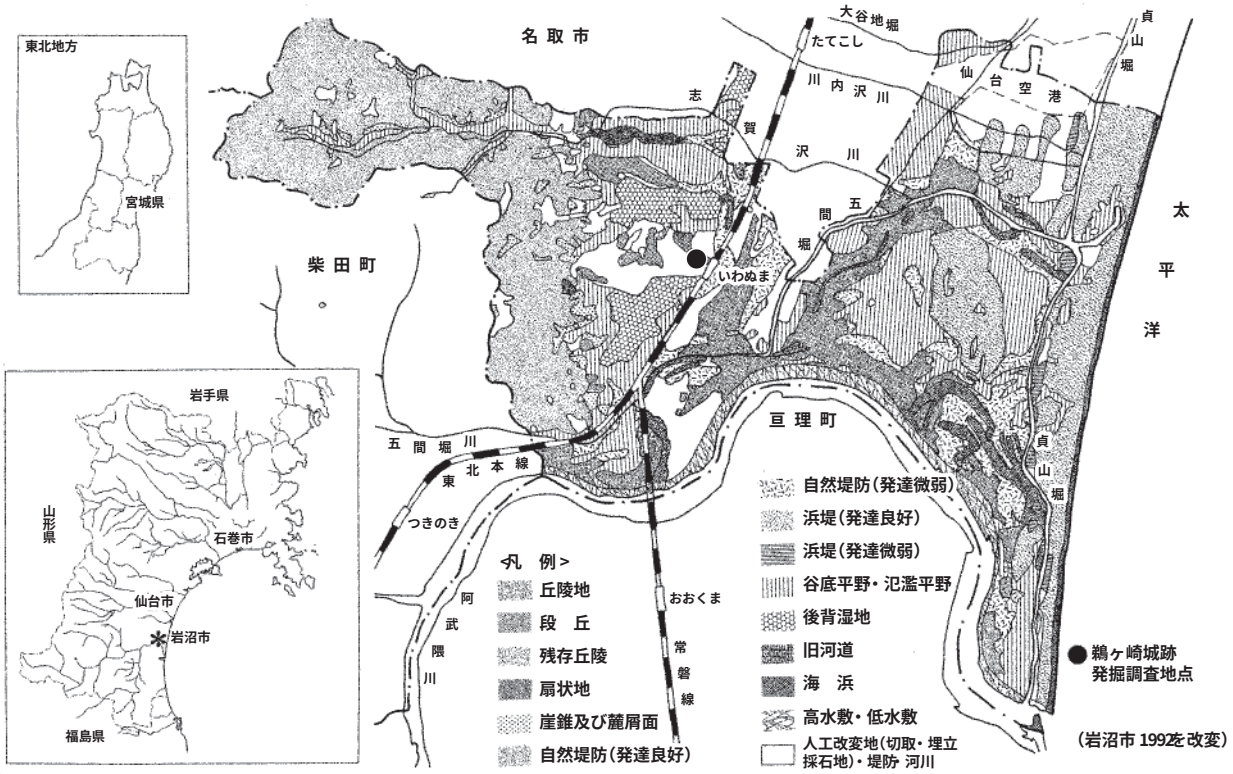
図版１　遺構
図版２　遺構
図版３　遺構
図版４　遺構
図版５　遺構
図版６　遺物（縄文土器）
図版７　遺物（縄文土器）
図版８　遺物（縄文土器）
図版９　遺物（縄文土器）
図版10　遺物（縄文土器・石器）
図版11　遺物（弥生土器・石器、中近世遺物）

第Ⅰ章　遺跡の概観

１．位置と地理的環境（第１図）

鵜ヶ崎城跡は岩沼市栄町１丁目に位置する。岩沼市は宮城県の南東部に位置し、東は太平洋を臨み、北は名取市、南は阿武隈川を隔てて亘理町と、西は奥羽山脈から派生した陸前丘陵に含まれる高館丘陵で村田町・柴田町と市域を接する。市域の南端を東流する阿武隈川は福島県と栃木県の境の旭岳に端を発し、福島県内を北流して宮城県へと至る大河川であり、その全長は国内６位の 239km、流域面積は 5400km²を測る。当市はこの阿武隈川が太平洋に注ぐ河口部北岸に位置している。また、当市は古来より浜街道と東街道が合する地点であるが、現在でも国道４号線と同６号線、JR東北本線と同常磐線の合流地点となっており、交通要衝の地として知られている。

市域を地質学的に大別すると、西側の山地と東側の広大な沖積地に分けられる。山地は南北に延びる高館丘陵（標高 200～ 300m）・岩沼丘陵（標高 10～ 100m）と、これから東へ舌状に張り出す標高 10～ 30mほどの小規模な段丘面から成る。山地の東側に展開する広大な沖積地は名取平野と通称され、岩沼丘陵の東縁から太平洋までの間に 7～ 8kmの幅をもって発達する。この名取平野は阿武隈川をはじめとし、五間堀川・志賀沢川などの中小河川の堆積作用によって形成され、その沿岸には自然堤防が顕著に発達している。本遺跡地は、この岩沼丘陵より松ヶ丘・土ヶ崎方面に派生する低位丘陵の最東端に占地している。現地表面の海抜は 12.26m前後を測る。



第１図　岩沼市の位置と地形分類

２．周辺の遺跡と歴史的環境（第２図）

＜旧石器・縄文時代＞

岩沼市域では、旧石器時代の遺構は未検出であるものの、遺物が北原遺跡（3）（宮城県教育委員会 1993。以下、県教委）で確認されている。北隣する名取市南部では、これまでに西野田遺跡（県教委 1974）で表土中より後期旧石器時代の石器が確認された他、近年では野田山遺跡（名取市教育委員会 2002。以下、名取市教委）で後期旧石器時代の技術的特徴を持つ石器が60点出土し、これまで旧石器研究の空白地帯となっていた名取川以南でも徐々に資料の蓄積が行なわれつつある。

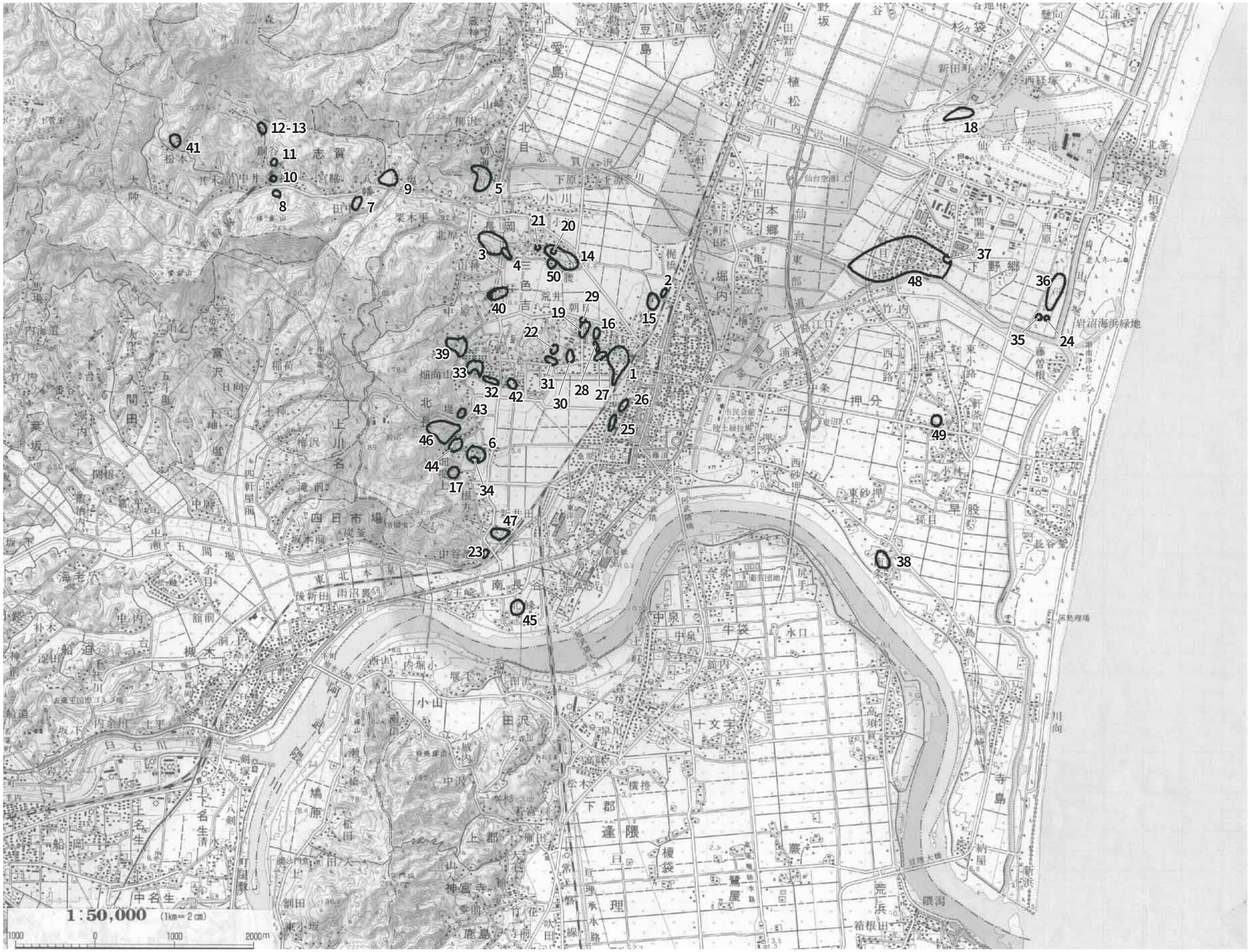
縄文時代は岩沼市域では、北原遺跡、杉の内遺跡（4）、山畑南貝塚（5）、畑堤上貝塚（6）、田中遺跡（7）、大日遺跡（8）、下塩ノ入遺跡（9）、八森Ａ・Ｂ遺跡（10・11）、銅谷Ａ・Ｂ遺跡（12・13）、上根﨑遺跡（14）の 12遺跡のほか、本遺跡地で出土している。これらの遺跡の立地は概ね丘陵地に属するものであり、縄文時代当時の海岸線に沿って遺跡が形成されたと考えられる。なお、本遺跡地で出土した資料の詳細については後述するが、発掘調査でまとまって得られた資料としては当市域では初出である。

＜弥生時代＞

岩沼市域における弥生時代の遺跡は旧石器、または縄文時代以降の複合遺跡である北原遺跡・杉の内遺跡以外では、かめ塚西遺跡（15）、朝日古墳群（19）、根方泉遺跡（17）、及び本地点で遺物が出土・採集されている。北原遺跡では該期の遺構は未確認であるが、弥生時代中期後葉の十三塚式、同時代後期の天王山式に包括される土器が出土している。朝日山古墳群でも弥生時代中期中葉～後葉の桝形囲式、十三塚式に比定される土器が出土しており、今後集落址の検出が期待される。根方泉遺跡では発掘調査は行なわれていないが、大泉式期に比定される土器の出土が報告されている。これら丘陵上もしくは丘陵斜面に位置する遺跡以外に、本期ではかめ塚西遺跡のように沖積地である名取平野に位置する遺跡が出現する。同様なことは名取市南部でもみとめられ、鶴巻前遺跡（名取市教委 1994）が名取川と増田川によって形成された自然堤防上に位置している。これらは稲作の普及に伴って、より生産域に近い低位面へ進出してきた結果と捉えられるが、遺跡数も少ないことから該期での乾陸化はそれほど顕著ではなかったことを示すものと思われる。なお、本遺跡地では十三塚式期に比定される土器や石包丁が出土したことから、朝日古墳群から本遺跡地にかけての丘陵部では集落が営まれた可能性が高く、今後の調査の進展が期待される。

＜古墳時代＞

古墳時代に入ると、岩沼市と北隣する名取市南部では遺跡が急増する。この両市域は県内でも有数の高塚古墳、横穴墓群の密集地として知られている。著名な高塚古墳を列記すると、東北地方最大の前方後円墳である名取市雷神山古墳、前方後方墳や方墳６基から成る飯野坂古墳群のほか、宮城県史跡第１号に認定された岩沼市かめ塚古墳（2）が挙げられる。このほか岩沼市域では、小規模な高塚古墳として新明塚古墳（20）、長塚古墳（21）、東平王塚古墳（23）、



第２図　岩沼市内遺跡分布図

№	遺　跡　名	立　地	時　代	№	遺　跡　名	立　地	時　代
1	鵜ヶ崎城跡	丘陵	縄文早、弥生中、中世・近世	26	丸山横穴墓群	自然堤防	古墳後
2	かめ塚古墳	砂堆	古墳中	27	土ヶ崎横穴墓群	丘陵斜面	古墳後
3	北原遺跡	丘陵	旧石器、縄文早～後、弥生、古墳前	28	石垣山横穴墓群	丘陵斜面	古墳後
4	杉の内遺跡	丘陵斜面	縄文早・前、弥生、古墳中	29	鷲崎横穴墓群	丘陵斜面	古墳後
5	山畑南貝塚	丘陵斜面	縄文中・後、古代	30	引込横穴墓群	丘陵斜面	古墳後
6	畑提上貝塚	丘陵斜面	縄文早・前、古代	31	白山横穴墓群	丘陵斜面	古墳後
7	田中遺跡	谷底平野	縄文中・後	32	平等横穴墓群	丘陵斜面	古墳後
8	大日遺跡	扇状地	縄文後・晩	33	長谷寺横穴墓群	丘陵斜面	古墳後
9	下塩ノ入遺跡	丘陵麓	縄文晩	34	畑堤上横穴墓群	丘陵斜面	古墳後
10	八森Ａ遺跡	丘陵斜面	縄文	35	にら塚西遺跡	砂堆	古墳、古代
11	八森Ｂ遺跡	丘陵麓	縄文	36	高大瀬遺跡	浜堤	古墳、古代
12	銅谷Ａ遺跡	丘陵斜面		37	館外遺跡	砂堆	古代
13	銅谷Ｂ遺跡	丘陵斜面	縄文	38	西須賀原遺跡	浜堤	古代
14	上根崎遺跡	丘陵麓	縄文、古墳中	39	竹倉部遺跡	丘陵麓	古墳～古代
15	かめ塚西遺跡	砂堆	弥生、古墳	40	熊野遺跡	丘陵麓	古代
16	朝日遺跡	丘陵	古墳、古代	41	岩蔵寺遺跡	丘陵斜面	平安
17	根方泉遺跡	丘陵麓	弥生	42	新田遺跡	丘陵斜面	縄文、古墳、古代
18	孫兵衛谷地遺跡	自然堤防	古墳前	43	古閑山遺跡	丘陵斜面	弥生、奈良
19	朝日古墳群	丘陵	弥生、古墳、中世	44	新館前遺跡	丘陵斜面	縄文～平安
20	新明塚古墳	丘陵斜面	古墳中	45	南玉崎遺跡	自然堤防	古代
21	長塚古墳	丘陵斜面	古墳中	46	新館跡	丘陵	中世
22	白山古墳	丘陵	古墳	47	長谷古館跡	丘陵	室町
23	東平王塚古墳	丘陵麓	古墳	48	下野郷館跡	砂堆	中世・近世
24	にら塚古墳	砂堆	古墳	49	新田東遺跡	浜堤	古代、近世
25	二木横穴墓群	自然堤防	古墳後	50	長徳寺前遺跡	丘陵裾	近世

第１表　遺跡地名表

にら塚古墳（24）が存在するが、考古学的な調査は行なわれておらず、詳細は不明な点が多い。一方、横穴墓群は岩沼丘陵から東西に派生する低位丘陵斜面に多く造営されている。市内に点在する横穴墓群は現在までのところ９箇所で確認され（消滅した鷲崎、石垣山横穴墓群を含む）、うち丸山横穴墓群（26）、二木横穴墓群（25）、長谷寺横穴墓群（33）、土ヶ崎横穴墓群（27）、引込横穴墓群（30）で発掘調査が行なわれている。これらの横穴墓は、構造上では平面形が方形乃至不整方形、断面はドーム型であり、玄室内に棺座を有することが大きな共通項として挙げられる。出土遺物も土師器よりも須恵器の出土量が、圧倒的に凌駕するという特色を持つ。また、遺存状態は劣悪なものの、これまでに多数の直刀などの金属製品も出土している。中でも二木横穴墓群では頭椎太刀の柄頭の一部が（註１）、引込横穴墓群（岩沼市教育委員会 2000。以下、岩沼市教委）では轡の一部が出土しており、前段階でも東北地方最大級の古墳が造営された当地域は、『国造本紀』では未記載であるが、地方有力者が存在していた可能性が高い。

集落遺跡に目を転じると、前期遺跡の北原遺跡、孫兵衛谷地遺跡（18）が当市で確認されている。北原遺跡では1992年に県道仙台・岩沼線の改良工事に伴い発掘調査が実施されており、

塩釜式期に比定される竪穴住居跡が36軒確認されている。このうち、10号住居跡からは39個の土玉が出土し、生業として前代から続く稲作のほかに魚撈も行なっていたことが判明している。北隣する名取市南部でも塩釜式期の遺跡の調査事例は当市以上に豊富であり、野田山遺跡で20軒、西野田遺跡で1軒、宮下遺跡（名取市教委1975）で8軒の竪穴住居跡が確認された他、山の上遺跡でも確認されている。塩釜式期に後続する南小泉式期では、当市域では未確認、名取市南部では宮下遺跡で16軒の竪穴住居跡が確認されたのみで、遺構数は減少傾向にある。この傾向は住社式期・栗囲式期ではさらに拍車をかけ、該期の集落址は現在までのところ見当たらない。大規模な墳墓群の存在は、当地域にそれら首長層の勢力下にある相当数の人々がいたことを示しているが、それらの人々が生活を営んだ集落址の発見は、未だ事例の少ない低地遺跡での発掘調査の増加を待たねばならない。

＜奈良・平安時代＞

古代における岩沼市域は、行政区分としては名取郡に属する。10世紀前半に編纂された『和妙類聚抄』では古代名取郡が、指賀、井上、名取、磐城、余戸、駅、玉前の7郷で構成されていたことが記されているが、当市域はこのうちの指賀（志賀）、玉前（玉崎）の2つの郷が存在していたと考えられている。また、現在でも岩沼市は国道4・同6号線が合する交通要衝の地であることは既に述べたが、この起源は古代に福島県浜通り地域を通過する「浜街道」（東海道）と、同県中通り地域を通過する「東街道」（東山道）が整備されたことに端を発している。このうち、東街道は文久元（1861）年の「名取郡南方小川村絵図」（高橋徳太郎家文書）から、南長谷玉崎から三色吉・小川を経て名取市愛島北目へ至ると考えられ（千葉1985）、現在市域の西側を通過している県道仙台・岩沼線がほぼこれを踏襲していると思われる。なお、927年に完成した『延喜式』には兵部省の駅制についての記載があるが、その中で陸奥国の駅馬の順路に「…柴田小野各十疋、名取玉前栖屋…」とあり、玉前に駅家が設置されていたことがうかがえる。この「玉前駅」は東山道に属しており、多賀城跡からは会津郡へ帰還する兵士が玉前駅を通過する旨を、同じく東山道に属する安積軍団の役人が国府へ申請した過所木簡が出土している（東北歴史博物館2005）。この「玉前駅」の所在については現時点では解明されておらず、今後の課題である。

岩沼市域での該期の遺跡は、現在までのところ12遺跡が確認されている。しかしながら、これらはいずれも発掘調査は行なわれておらず、遺跡の時期・遺構構成などは一切判明していない。但し、市内には承和九年（842）に建立されたと伝えられる竹駒神社が、また市内から村田町へ至る現在の県道岩沼・蔵王線の北側の、志賀字薬師に所在し、慈覚大師による開基伝説のある岩蔵寺は貞観二年（860）の創建と伝えられており、これらの造営に関わった人々の生活痕跡は確実に存在すると考えられる。尚、岩蔵寺遺跡（41）では、薬師堂から続く平場で土師器・須恵器の散布が確認されているが、これらの過半数以上は坏類が主体であり、煮焚具である甕類は極めて少ないことから、一般的な集落遺跡とは異なる可能性が高い。

＜中世＞

現在、岩沼市内で確認されている中世遺跡は城館跡と墓地遺跡である。本報告である鵜ヶ崎

城跡については後述するのでここでは割愛する。長谷古館（47）は『仙台城古城書上』によると、長谷紀伊守景重の築城と伝えられている。この長谷氏について『岩沼市史』では亘理氏の家臣としており、南長谷字柳に所在する鷹硯寺にはこの紀伊守景重の墓と伝えられる墓石も存在している。尚、長谷古館の西部と北部では国道４号線建設の際に採土場となっており、現在は旧情を留めていないが中世陶器片も採集されている。北長谷字舘に所在する新館跡（46）は、古絵図・史資料は一切残されていないものの、長谷古館の枝城とも言われている。遺跡は山頂に立地し、丘陵頂部では南北約 40m、東西約 80mの規模を測る平場が形成されている。この城館は眺望がきくことから見張り的な機能を有していたとも考えられている（千葉 2000）。下野郷館跡（48）では県道亘理塩釜線改良工事に伴い発掘調査が実施されている（岩沼市教委 2004a）。調査では 12世紀後半頃に位置付けられる白磁碗や 14～ 15世紀頃と考えられる青磁碗などの中国産の貿易陶磁、13世紀半～後半頃の年代観が与えられる白石市に所在する白石古窯址群の製品、東海地方の陶器片が出土しており、今後も資料の増加が見込まれる地域である。墓地遺跡は朝日古墳群で発見されている。ここでは４基の土葬土壙墓が発見され、副葬品として北宋銭が 13枚出土した他に、線刻のある中世陶器、瓦が出土している。土葬土壙墓群が検出された地点では丘陵斜面を段切して小規模な平場を造作していたが、周辺ではこのような小平場が数多く存在することから、中世後期における葬地であった可能性が高い。この他に岩蔵寺薬師堂近辺には集石を伴う安山岩・凝灰岩製の無紀年銘板碑が存在する。これらのうちの数点はほぼ旧情を留めていると考えられ、当地域の中世史を考える上での貴重な資料となっている（石黒 1997）。

＜近世＞

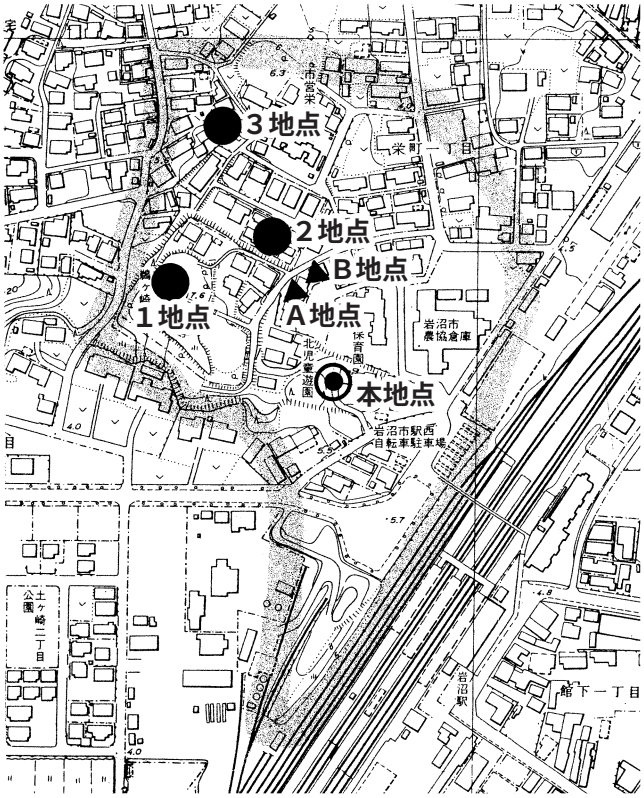
長岡字塚腰に所在する長徳寺前遺跡（50）では、平成 15年に曹洞宗龍谷山長徳寺（1657年開山）門前の現市道下より２基の礫石経塚が発見されている。経塚はいずれも墳丘を有しておらず、１号経塚が径 1.4mほどの円形、２号経塚は１辺が 1.0mほどの方形土坑の底面に厚さ 40～ 60cmにわたって礫石経が埋置されていた。出土した礫石経の総点数は、１号経塚が 14,897点、２号経塚は 11,479点である。このうち文字判読可能なものは１号経塚で 10,089点、２号経塚で 6,329点であり、文字の遺存状態はかなり良好である。書写経典については、１号経塚では妙法蓮華経譬喩品第三、方便品第二、信解品第四を中心に書写したものと考えられ、２号経塚では仏説観普賢菩薩行法経に関連する文字が多数あり、仏説観普賢菩薩行法経を中心に、妙法蓮華経各品の代表的な部分を書写したと考えられる。２基の礫石経塚の築造年代は、それぞれ１号経塚が唐津産陶器の年代観から 17世紀後半頃、２号経塚が「奉讀誦書寫大乗妙典一百部一字一石金剛塔」の年号（文政７年）から 19世紀前半頃と考えられる。（岩沼市教委 2005）

３．鵜ヶ崎城の変遷とこれまでの成果について（第３～６図）

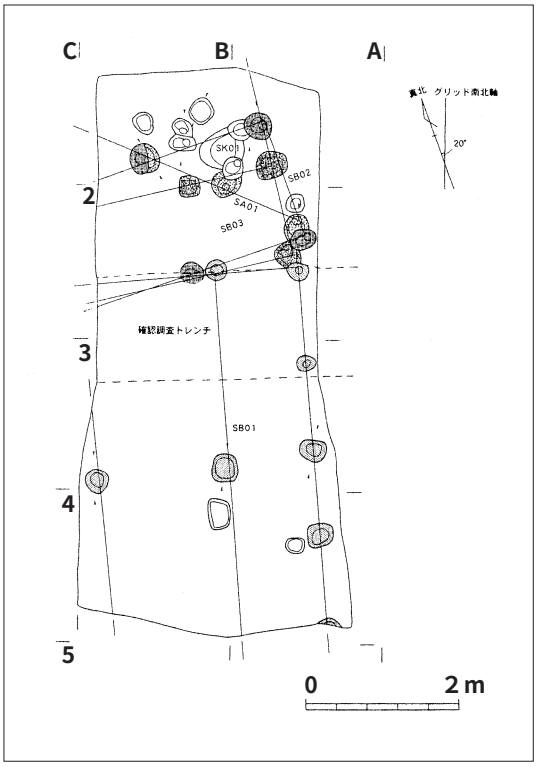
鵜ヶ崎城は、安永二年（1773）に編まれた『岩沼郷風土御用書上』によると、古くは「武隈之館」と呼ばれ、源重之が平安時代に奥州下向に際して旅館として用いたとある。また『岩沼市史』（以下、市史）によると、万治二年（1659）に藩命によって提出を命じられたと考えられている大友太兵衛書上では、永保三年（1083）に武隈館が陸奥守源義家の陣所になったと記され、さらに伝承として義家はその折に館の東南角の地名である鵜ヶ崎の名をとって「鵜ヶ崎城」と名付けたことが明治時代に刊行された『岩沼の志越里』に掲載されているが、現在までのところこれらを裏付ける考古資料は得られていない。その後、『留守家文書斯波直持遵行状』には延文六年（1361）頃に泉田左衛門入道という人物が岩沼で勢力を保っていたことが記載されており、市史ではこの人物も鵜ヶ崎城に居たものと考えている。余談ではあるが、当市の名称である「岩沼」の初見は、現時点ではこの『留守家文書斯波直持遵行状』とされている。応永五年（1398）に名取郡が奥州管領斯波氏から伊達氏へ移譲された後は、当市域も伊達氏の勢力下に入ったものと考えられ、阿武隈川を境に対峙する伊達氏と相馬氏との関係が緊張するに至って天文年中（1532～1569）に防衛拠点の一つとして伊達晴宗が泉田伊豆守行時を配して築城したと伝えられている。また天正18・19（1590・91）年の奥州仕置の際には徳川家康が岩沼で城の縄張りを行なったことも伝承として残っている。戦国期には『城』としての格式、防備施設を有していた鵜ヶ崎城は、江戸幕府によって元和元年（1615）に発せられた一国一城令以降も、二街道が合する拠点に存在することからか破却の対象とはならなかった。その後しばらくの間は『城』として認識されていたが、貞享４年（1687）以降は、仙台藩内に21ヶ所ある『要害』の一つとして位置付けられ、要害岩沼館、あるいは岩沼要害と呼称されるようになる。江戸時代中期以降は、古内氏が代々拝領し、居住していた。明治維新によって廃城となる。

泉田伊豆守行時	天文年中～永禄年間 （1532～1569年）	古内主膳重安	明暦三年～寛文元年 （1657～1661年）
泉田式部大輔景時	永禄年間～天正年間 （1558～1591年）	田村右京大夫宗良	寛文元年～天和二年 （1661～1682年）
泉田安芸重光	天正年間 （1573～1591年）	古内造酒裕重直	天和二年～貞享三年 （1682～1686年）
石田豊前宗朝	天正十九年～文禄三年 （1591～1594年）	古内主膳重興	貞享四年～ （1687年～）
遠藤兵部小輔	文禄三年～慶長五年 （1594～1600年）	古内主膳広寿	享保十七年～ （1732年～）
屋代勘解由兵衛景頼	慶長五年～慶長七年 （1600～1602年）	古内頼母広充	明和五年～ （1768年～）
奥山出羽守兼清	慶長七年～元和二年 （1602～1616年）	古内要人広富	明和六年～ （1769年～）
奥山大学常長	元和二年～寛永六年 （1616～1629年）	古内主膳広保	文化十三年～文政二年 （1816～1819年）
伊達千勝丸 （伊達兵部宗勝）	寛永六年～寛永十三年 （1629～1636年）	古内弘見賢	文政二年～ （1819年～）
古内主膳重広	寛永十三年～明暦三年 （1636～1657年）	古内左近広居	文久元年～明治維新 （1860～1868年）

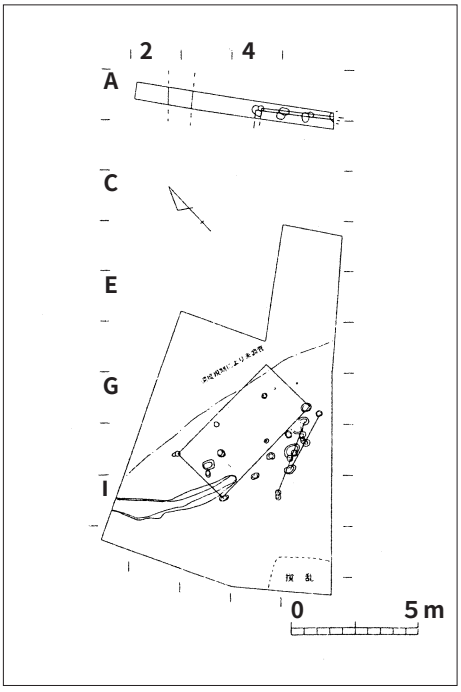
第２表　鵜ヶ崎城（岩沼要害）拝領者



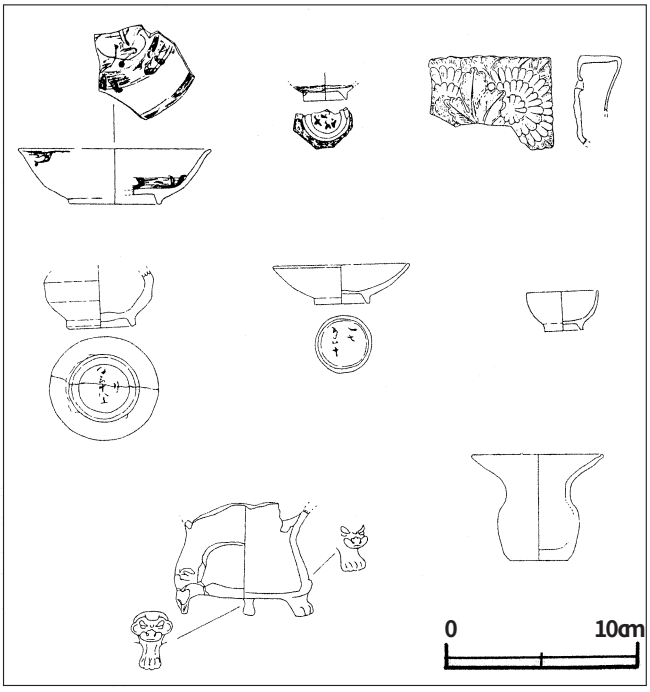
第３図　鵜ヶ崎城跡内調査地点



第４図　第２地点全体図（S=1/100）



第５図　第３地点全体図（S=1/300）



第６図　鵜ヶ崎城跡第１地点出土遺物

江戸期には鵜ヶ崎城（岩沼要害）を中心に描かれた幾枚かの古絵図があるが（巻頭カラー図版１・２）、前述の通り本遺跡地は市街地に近接しているため、遺跡地内においても早くから数多くの開発行為が繰り返し行なわれてきたことにより地形の改変が著しく、現在ではこれら古絵図と現地形の照合は困難な状況となっている（註２）。しかしながら近年、東北福祉大学による発掘調査を皮切りに、当市教育委員会でも数地点で確認調査等を実施し、徐々にではあるが資料の蓄積を見ている。以下にこれまで数地点で行なわれた発掘調査事例の成果について詳述する。なお、遺跡地内において最初に東北福祉大学が本格調査を開始した鵜ヶ崎城跡公園地点を「第１地点」とし、以下本格調査を実施した順に番号を附することにする。

第１地点

第１地点は旧鵜ヶ崎神社境内で現在の鵜ヶ崎城跡公園内である。学術調査を目的とした東北福祉大学によって2001年に調査が開始され、現在まで４次に渡って継続的に実施されている。これまでに最頂部（海抜17.3m前後）の平場西側より、南北方向の石垣とこれに伴うと考えられる溝跡が確認されている。石垣は約15mに渡って遺存しているが、北端の部分では崩落などの事情もあり、形状・規模等については今後の調査を待たねばならない。平場の中央寄りでは地業面が形成されているが、この面上では建物が存在していた可能性を示す根石群・柱穴を確認している。なお、これまで確認されている地業面の下では、上記の遺構群とは時期差のある柱穴の存在が確認されており、中世に遡る遺構が包含されている可能性も考慮されている。また平場の西側約３m下段に存在する帯曲輪状を呈する地点の一部でも調査が実施されており、元来は堀状の遺構であったことが確認されている。

遺物は石垣の西側前面で南北方向に走る溝跡内から集中して出土している。出土した遺物は18世紀後葉～19世紀前葉の年代観が与えられる陶磁器類が大勢を占めるが、金属製品、土製品も若干量出土している。陶磁器類では肥前系磁器が最も多く、次いで福島県浪江町付近で生産された大堀相馬陶器がみられる。また稀少ではあるが中国漳州窯で生産された磁器も出土している。出土遺物の器種構成をみると碗皿類が高い割合を占めているが、菊花文を陽刻した肥前系磁器水注や瀬戸産の天目釉を施した壺、さらには瓦質土器の土風呂など非日常的なものも出土しており、本地点の居住者階層を考える上で興味深い資料が蓄積されつつある（東北福祉大学2002～2005）。

第２地点

第２地点は集合住宅建設に伴って2004年５月に調査が実施された。確認された遺構は掘立柱建物跡３棟、柱列１列、土坑１基などである。調査地点は第１地点から北側へ舌状に張り出す尾根の東側斜面に位置しており、調査区内で確認された旧地形も西側から東側へ若干傾斜していた。なお、調査区東半部では地山面が急激に落ち込むことが確認でき、さらに東側で行なった確認調査では現地表下約２m下から湿地状の土層堆積を検出したことから、本来は大きな谷状地形が存在していたことが明かになった。掘立柱建物跡はいずれも全容が明らかではなく、規模・形状については不明な点が多い。柱列はこの建物の北側で柱穴３口で構成されているが、建物との主軸方位には大きな差が生じることから、建物とは異なる時期の施設であると考えら

れる。

遺物は肥前系磁器、土師質土器・瓦質土器などが出土している。遺構の主軸方向から見ると大別して３期の変遷が考えられるが、遺構に伴う遺物は全く無いため、検出した遺構の年代観については不明である。（岩沼市教委 2004b）

第３地点

第３地点は共同住宅建設に伴って 2004年５月に調査が実施された。確認した遺構は掘立柱建物跡１棟、柱列２列、南北溝跡である。調査地点は第１地点から北側へ舌状に張り出す尾根の西側斜面に位置しており、調査区内で確認された旧地形も東側から西側へ、南側から北側へ傾斜していた。掘立柱建物跡は東西４間、南北２間の東西棟だが、桁行 4.4m、梁行 2.6m、推定建物面積は 11.44㎡と小型のものである。柱列はこの建物の東側で構成されているが、建物との主軸方位には若干の差が生じることから、建物とは異なる時期の施設であると考えられる。掘立柱建物跡と柱列が等高線にほぼ平行する形で存在しているのに対し、溝跡は掘立柱建物跡の南側から等高線に直交する形で作られていた。なお、調査対象地北側で行なった確認調査では、地業面が形成されていることが判明している。この地業面上では２棟の掘立柱建物跡を構成すると思われる柱穴列と南北方向の溝状遺構を発見しているが、相互の遺構検出面の比高差が 60～70cmほども生じることから、本格調査で発見された遺構群の北西下位には異なる平場が形成されていたと考えられる。

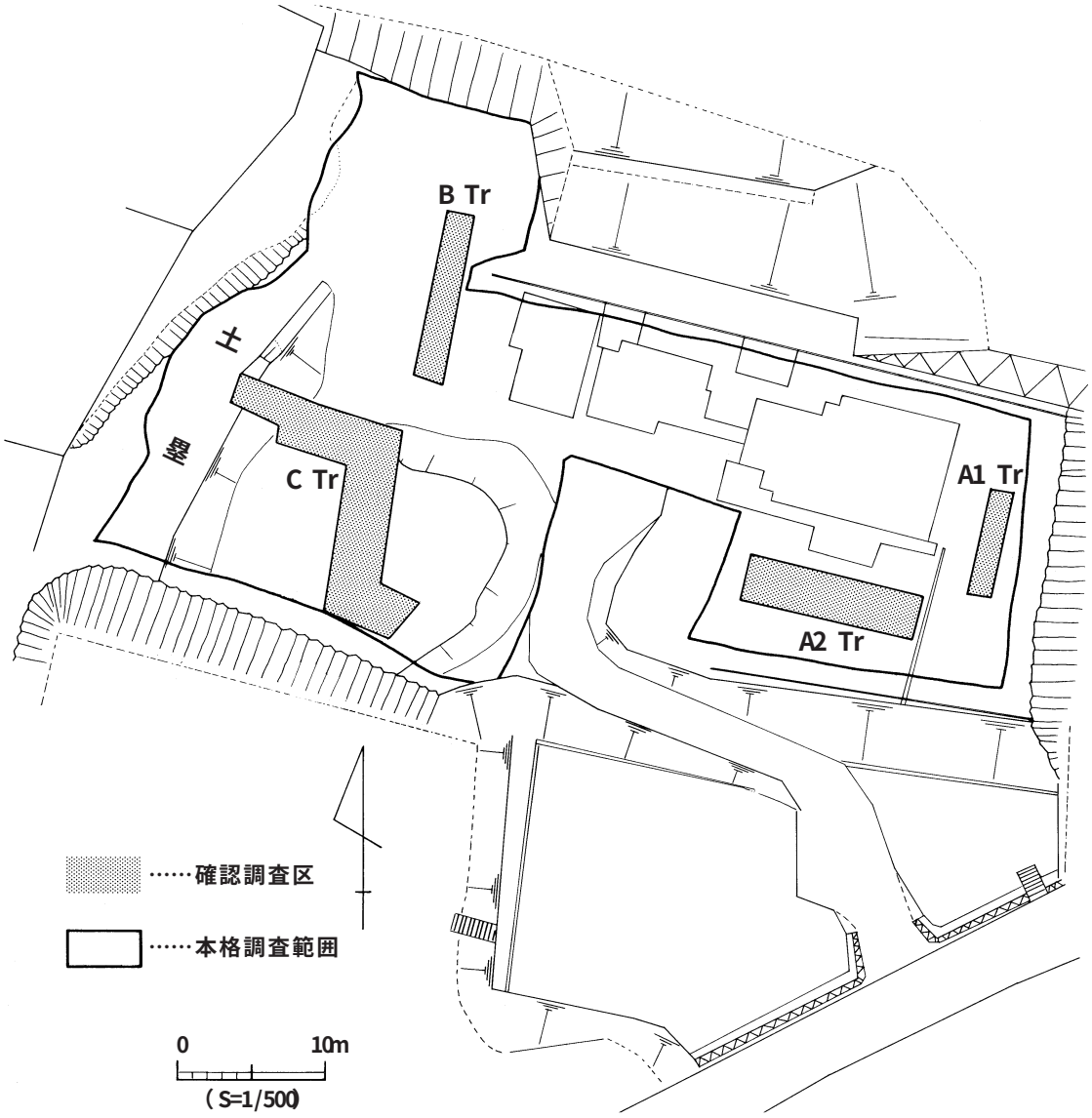
遺物は 18世紀後葉～19世紀前葉の年代観が与えられる大堀相馬産陶器小碗のほか、釘・鉄滓・魚骨などが出土している。（岩沼市教委 2004c）

第Ⅱ章　調査の概要

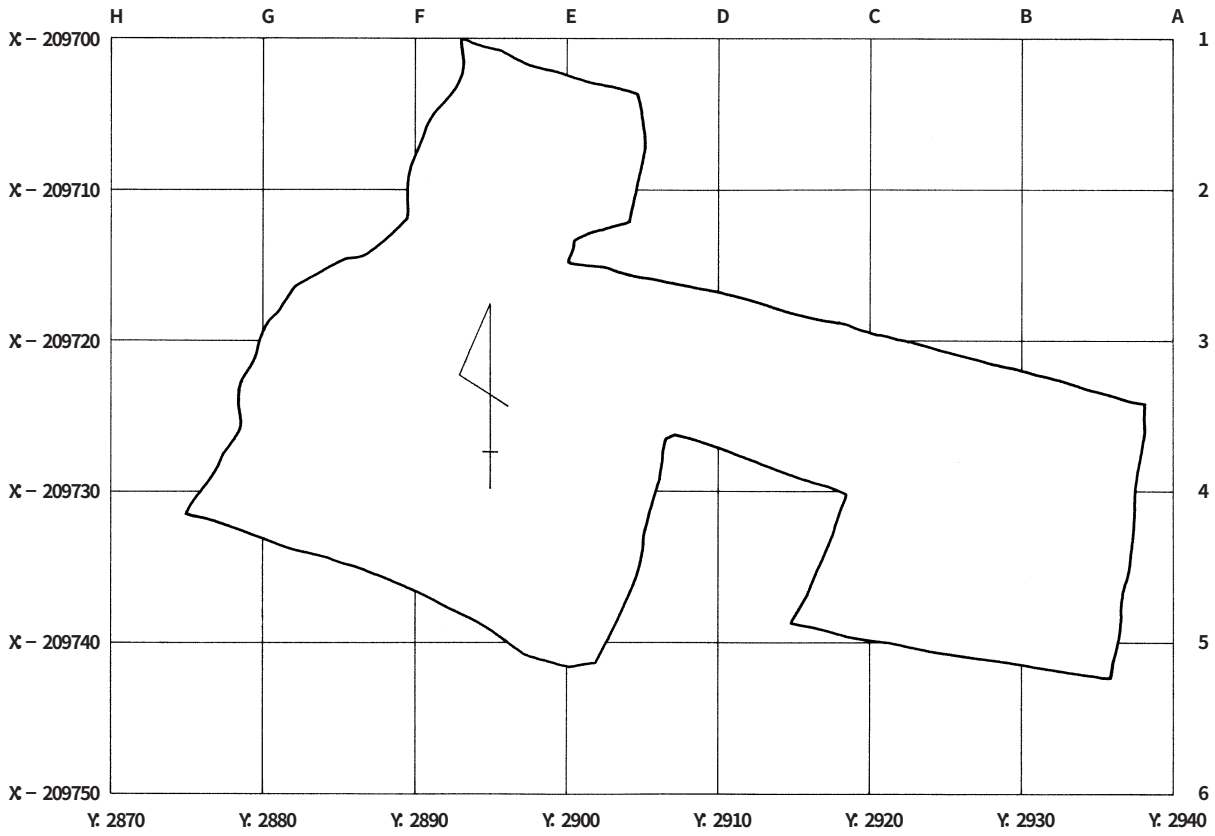
１．調査に至る経緯（第７図）

平成16年２月６日に岩沼市教育委員会（以下、市教委）へ栄町１丁目４番２号他の宅地造成開発計画が寄せられた。開発対象地が県の遺跡台帳に登録されている『鵜ヶ崎城跡』の範囲に含まれていることから、市教委では現地踏査を実施した。その結果、地表顕在遺構として土塁の存在が確認できたことから、遺構の遺存状況は良好であると判断し、県教育庁文化財保護課（以下、県教委）に報告を行なった。県教委は報告を受け、２月23日に市教委と合同で現地踏査を行ない、市教委及び地権者に対して開発工事に先駆けて確認調査が必要であると回答した。これを受けて市教委では地権者の理解を得て、３月25日～３月31日にかけて確認調査を実施した。

確認調査は平成16年３月25日より開始した。先に画定した４箇所のトレンチを設定し、重



第７図　調査区設定図



第８図　グリッド設定図（S=1/500）

機によって表土を除去した後は人力によって遺構面の検出・精査に努めた。26日にＡ－１・Ｂトレンチが、29日にＡ－２トレンチが、31日にＣトレンチの調査が終了した。

調査の結果、掘立柱建物跡を形成すると考えられる柱穴や土坑など城郭機能時と考えられる遺構が検出された他、地表顕在遺構である土塁がおよそ３時期に渡って補修・使用がなされていたことが確認できた。この結果を受けて、31日には県教委・市教委・地権者・施行業者による遺跡保存への一度目の協議が現地で行なわれている。

その後も数度にわたって遺跡保存を主眼とした事業計画変更について協議したが、計画の変更は成し難いとのことから、本格調査を実施する運びとなった。

２．調査経過と方法（第８図）

本格調査は2004年10月12日から実施した。設定した調査区の面積は約1,254㎡である。調査開始以前に既存住宅の取り壊しとコンクリート基礎部分の除去を行ない、併せて調査地西側での立木や草木の伐採を行なった。その後、重機によって表土の除去を行い、遺構面の検出に努めた。作業の経過は以下の通りである。

10/12	対象地東側（東側平場）から表土掘削開始。機材搬入。
10/13	対象地北側（北側平場）の表土掘削。
10/16	ＳＸ０２土塁への土層確認トレンチ設定。対象地南西部（南西平場）の表土掘削。
10/25	北側平場第１次全景撮影。
10/27	東側平場全景撮影。
10/29	南西平場全景撮影。

11/8～24	遺構平面図、土層断面図、ＳＸ０２土塁コンター図等作成。
11/24	ＳＸ０２土塁第１次全景撮影。25日より表土除去開始。
11/30	ＳＸ０２土塁第２次全景撮影。
12/2	ＳＸ０２土塁下部遺構確認トレンチ設定。→縄文時代早期に位置付けられる土器出土。
12/5	ＳＸ０２土塁下部遺構確認のため、重機による構築土除去。
12/6	ＳＸ０２土塁断面での火山灰サンプリング
12/8	ＳＸ０２土塁断面の写真撮影。
12/9	ＳＸ０１遺物包含層、ＳＩ０１住居跡調査開始。
12/22	ＳＸ０２土塁下部遺構群（ＳＸ０１遺物包含層を含む）全景撮影。機材撤収。
12/24	ＳＸ０２土塁下部遺構群（ＳＸ０１遺物包含層を含む）遺構図作成。調査終了。

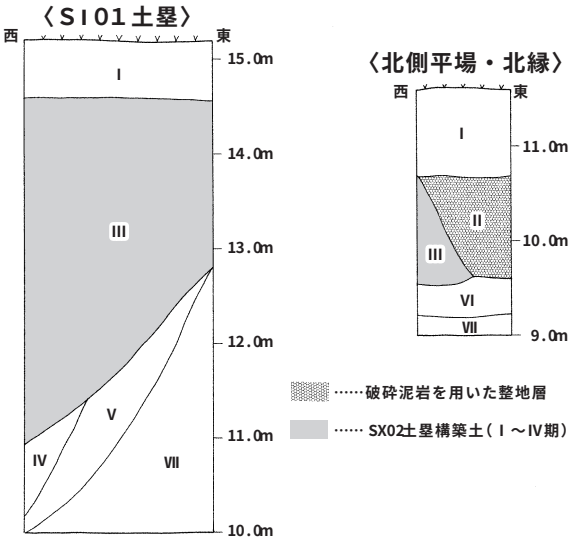
本調査で使用した測量軸の設定に関しては、国家座標を使用した。使用した測量原点は岩沼市公共基準点２－054（Ｘ；－209795.561・Ｙ；2775.306）と同３－129（Ｘ；－209794.488・Ｙ；2409.722）である。これにより調査対象地北東のＸ；－209,700.000・Ｙ；2,940.000の地点にＡ－１杭を設定し、東西ライン（Ｘ軸）に算用数字を北から１～６と、南北ライン（Ｙ軸）にアルファベットを東からＡ～Ｈと附した（第７図）。各グリッドライン間の距離は10mである。また各グリッドの名称は北東隅の交点を採用した。

出土品の整理作業・報告書の作成は2005年３月22日から６月30日にかけて岩沼市文化財展示室内で行なった。

３．層序（第９図）

本地点では前述の通り、市域の西側で南北にはしる高館丘陵から東へ派生する低位丘陵頂部において、東西60m、南北36mという広範囲にわたって調査を実施している。そのため各所での土層堆積は一様ではなく、土塁部分を除いた調査区内では大きく①表土下10cmで凝灰岩盤面、もしくは愛島パミス層が露頭（東側・南西部平場）

②20～40cmの耕作土下に破砕泥岩を用いた整地層（北側平場）の２者の土層堆積が確認できる。このうち、②の下部では愛島パミス層の直上にローム質土の堆積が確認されている。



第９図　基本土層模式図

この他、ＳＸ０２土塁下部の谷地形を望む西側傾斜面では、詳細については後述するが、黒色、褐色シルト層が確認されている。なお、土塁を含んだ調査地西側では、本調査開始以前に一部で掘削を受けていたが、この箇所では褐色シルト層下に蔵王川崎スコリアを包含する赤褐色パミス層、その直下では高温石英を含む愛島パミス層の存在が確認されている。

第Ⅲ章　発見された遺構と遺物

本地点では調査開始以前に地表顕在遺構として土塁の存在が明らかになっていたが、平場内では戦時中に畑地として使用されたため、またその後の開発行為によって大きく削平されており、城郭機能時に伴う遺構・遺物の検出・出土状況はそれほど良好ではない。しかしながら、土塁下部や北側平場では、部分的ではあるが城郭機能時の遺構や遺物が発見された。さらに土塁下部の谷地形を望む西側傾斜面では、土塁に被覆されたことにより後世の開発から免れた縄文時代、弥生時代の遺構が発見されている。以下に発見遺構・出土遺物について、それぞれが帰属する時期別に記述していく。

１．縄文時代

縄文時代に位置付けられる遺構は土塁下部よりＳＸ０１遺物包含層とピット群である。以下にこれらの遺構について詳述するが、ピット群の中には覆土観察から弥生時代に帰属する可能性のものも含んでいる。なお、東側平場の南側で確認された谷地形からは石器が１点出土しており、この部分についても本項に含めて報告する。

ＳＸ０１遺物包含層（第 10図）

Ｆ２・Ｆ３区の土塁下部より発見された。調査地点の西側には、尾根がある南から端を発して東へ向かって弧状に屈曲する谷が存在するが、今回発見された遺物包含層はＦ３区のほぼ中央を起点とし、この本谷にかけて開口する小支谷の堆積土である。

本調査地点で確認された小支谷は、調査区内で全長約 10m、最大幅約９m、谷戸頭である頂部からの比高差は 3.0mを測る。主軸方位は 37°西に傾き、最大斜度は 16°である。確認し得た堆積土は全てが自然堆積であり色調を基にすると大別して６層の分層が可能であるが、１～３層は含有物、あるいは締まり具合からそれぞれ細分が可能であり、総数で 11層となる。

第１ａ層－黒褐色（10YR3／１）シルト。締まり弱い。石英を微量含む。

第１ｂ層－黒褐色（10YR3／２）シルト。締まりやや強い。石英を少量含む。

第２ａ層－褐色（10YR4／４）シルト。締まり強い。炭化物散見。石英少量含む。

第２ｂ層－にぶい黄褐色（10YR4／３）シルト。締まり強い。炭化物・石英を微量含む。

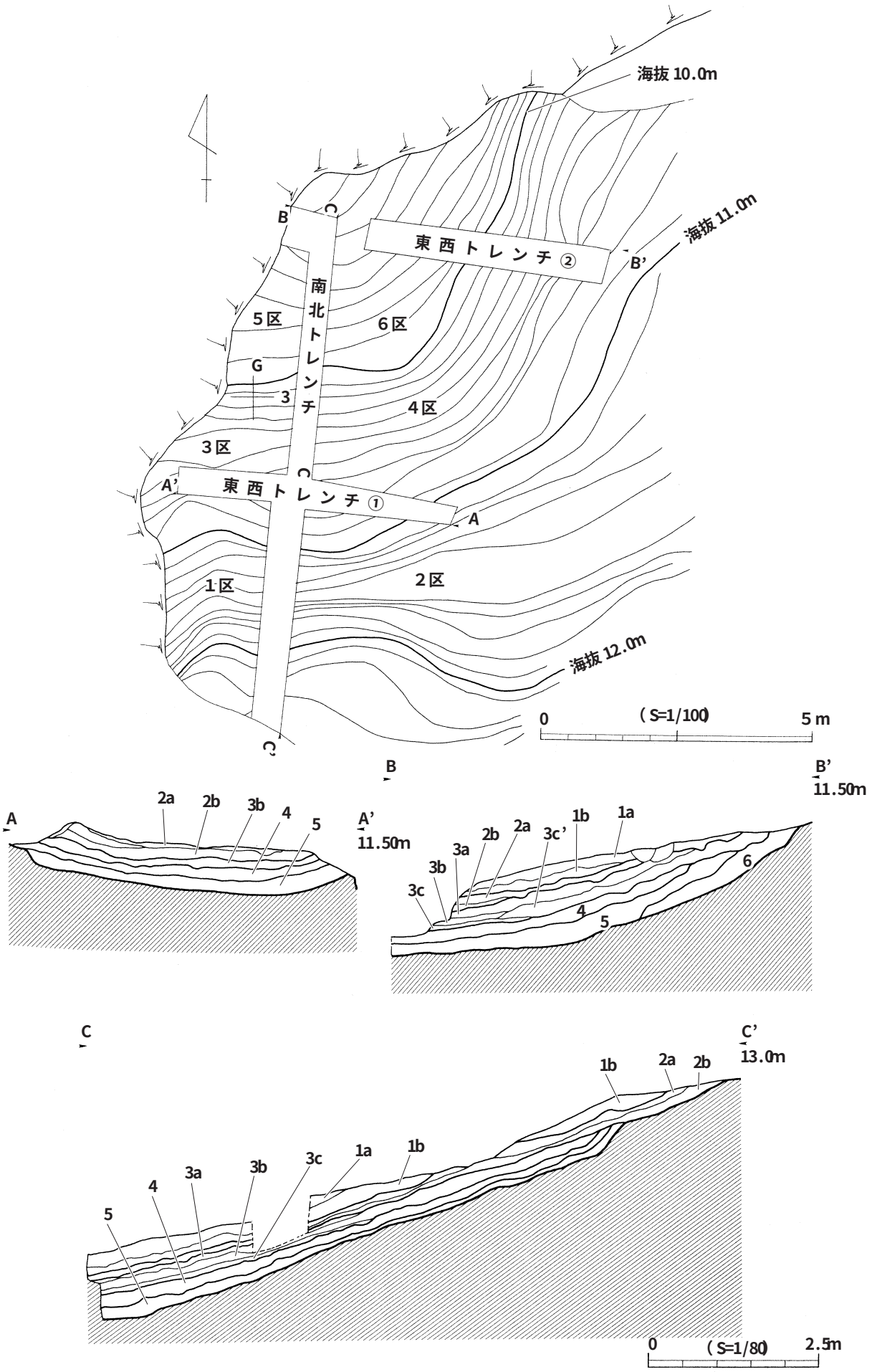
第３ａ層－灰黄褐色（10YR4／２）シルト。締まり極めて強い。石英をやや多く含む。

第３ｂ層－にぶい黄褐色（10YR4／３）シルト。締まり極めて強い。石英をやや多く含む。

第３ｃ層－灰褐色（7.5YR4／２）シルト。締まり強い。石英を少量含む。上面でクラックが見られる。

第３ｃ層－灰褐色（7.5YR4／２）シルト。３ｃ層に比べ、若干黒色味が強い。部分的な検出に留まる。

第４層－暗褐色（10YR3／３）シルト。締まりやや強い。石英を微量含む。



第 10図　SX01遺物包含層

第５層－褐色（7.5YR4／３）ローム質土。締まりやや弱い。

第６層－にぶい赤褐色（５YR4／４）愛島パミス。

このうち第１～３ｃ層中より土器が出土しているが、遺物の出土状況は広範囲に分布するという散漫な状態であり、一定のまとまりを持つものではない。また斜面上位よりは中位～下位にかけて出土量が多く、出土遺物も小細片が大勢を占めており、全体の形状が判断できるような資料は得られていない。さらに斜面地に形成された遺物包含層であるため、層位毎の一括性や特定の傾向を示すといった成果は得られなかった。なお、１ａ・ｂ層中からは弥生時代中期後葉頃に位置付けられる十三塚式に比定されている土器片が少量出土している。

［出土遺物］

前述の通り、遺物は包含層の１～３層にかけて出土している。このうち１層中からは弥生土器の出土もみられるが、２層以下での遺物構成は縄文時代早期後葉に位置付けられる土器群に限定されている。弥生時代に帰属する遺物については後述し、ここではこれら以外の土器と石製品について記述する。なお、調査時には土塁下で認められた黒色土（第１層－基本土層Ⅳ層と共通）が広がる範囲（第19図）に対して直交したトレンチを設定し土層観察のためのベルトを設けたが、遺物の取り上げにあたってはこれら土層観察ベルトに区切られた区毎に名称を附している。

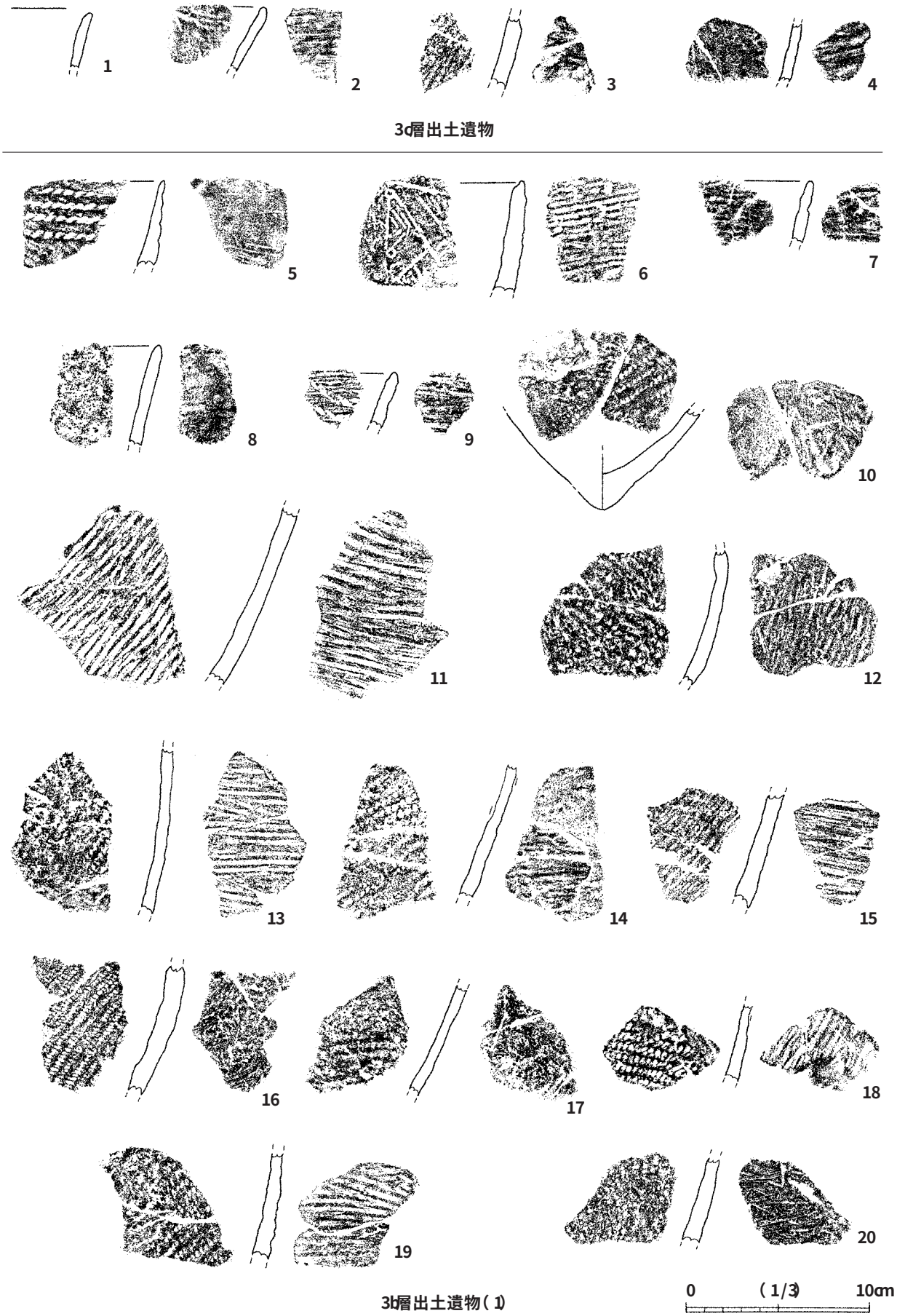
本稿では以下にＳＸ０１遺物包含層出土土器について下層から上層への順序で層位毎に記載していくが、この遺物包含層発見の端緒となったＳＸ０２土塁確認１トレンチより出土した資料については層位への帰属が困難なことから、末尾に掲載する。なお、石製品については項目を別にし、詳細な各遺物の観察結果については「観察表」として74頁以下に掲載した。

第３ｃ層出土土器（第11図）

第３ｃ層及びｃ’層は３～６区にかけて堆積する。遺物の出土量は僅かに６点のみであり、その全てが３区からの出土である。出土した土器は、３のいわゆる「縄文条痕土器」１点を除く全てが、内外面ともにぶい橙色（7.5Ｙ Ｒ７／４）を呈し、器肉は薄いもので占められる。これらの土器は本層以外からも出土しているが、全体量としては少なく、また大多数は大別すれば３層中よりの出土である。確認されたこの土器群の器種は、全体像を復元しうるものが皆無であるため判然としないが、概ね深鉢を主流とするものと考えられる。なお、器面の調整は１・２、４とも外面はナデ調整が施されるが、内面では条痕文を有するもの（２、４）、条痕文の後にナデ調整を施すものがある。３を除くこれらの土器の胎土観察では繊維の混入を認め得るものは存在しない。

第３表　第３ｃ層区別出土点数集計表

	１区	２区	３区	４区	５区	６区
第３ｃ層	0	0	6	0	0	0



3d層出土遺物

3b層出土遺物(1)

第11図　SX01出土遺物(1)

第３ｂ層出土土器（第 11・12図）

第３ｂ層は１～６区にかけて堆積する。遺物の出土量は 75点であり、６区からの出土が最も多い。出土した土器群はいわゆる「縄文条痕土器」群が大勢を占め、器種は深鉢を主流とするが、口縁部の形状や器面調整、及び胎土の観察から大別して４系統の土器群が混在していると判断できる。また 40・41・43を除くいずれの土器も胎土に繊維の混入が認められる。

はじめに口縁部資料を見ていくと、５の口縁部は直立気味に外傾する。口縁部外面に押圧縄文帯があり、胴部には縄文を配する。押圧縄文は横位のみであり、内面に条痕文を有する。口唇部にキザミは施されない。６の口縁部は弱く外傾する。口縁部外面に連続刺突文沈線による三角文を配し、その結節点に円形竹管文を施す。内面に条痕文を有する。口唇部外角にキザミを施す。７～９の口縁部は弱く外傾する。口縁部外面に横位条痕文を施した後に縦位・斜位の押圧縄文を配する。内面には条痕文を有し、口唇部にはＶ字状のキザミを施す。

底部資料としては、10の尖底土器ある。この底部では外面に縄文、内面には条痕文とナデが施される。

この他の出土遺物の施文技法・器面調整について記すと、11～22、24～27、29・30、39では外面に縄文、内面に条痕文が配される。28は７～９と接合関係には無いものの、施文技法から同一個体の可能性が高い。23、31、35～38、44は外側では縄文を有し、内面に条痕文を施さないものである。32は内外面ともに条痕文が施される。33は外面に連続刺突文による沈線と円形竹管文がみられることから６と同一個体の可能性が考慮される。34は外面に斜位沈線、内面に条痕文とナデが施される。なお、40・41は胎土及び色調、及び薄手という特徴から、第３ｃ層より出土した土器群と接合関係には無いものの、同一個体である可能性は高い。

第４表　第３ｂ層区別出土点数集計表

	１区	２区	３区	４区	５区	６区
第３ｂ層	5	6	18	12	0	34

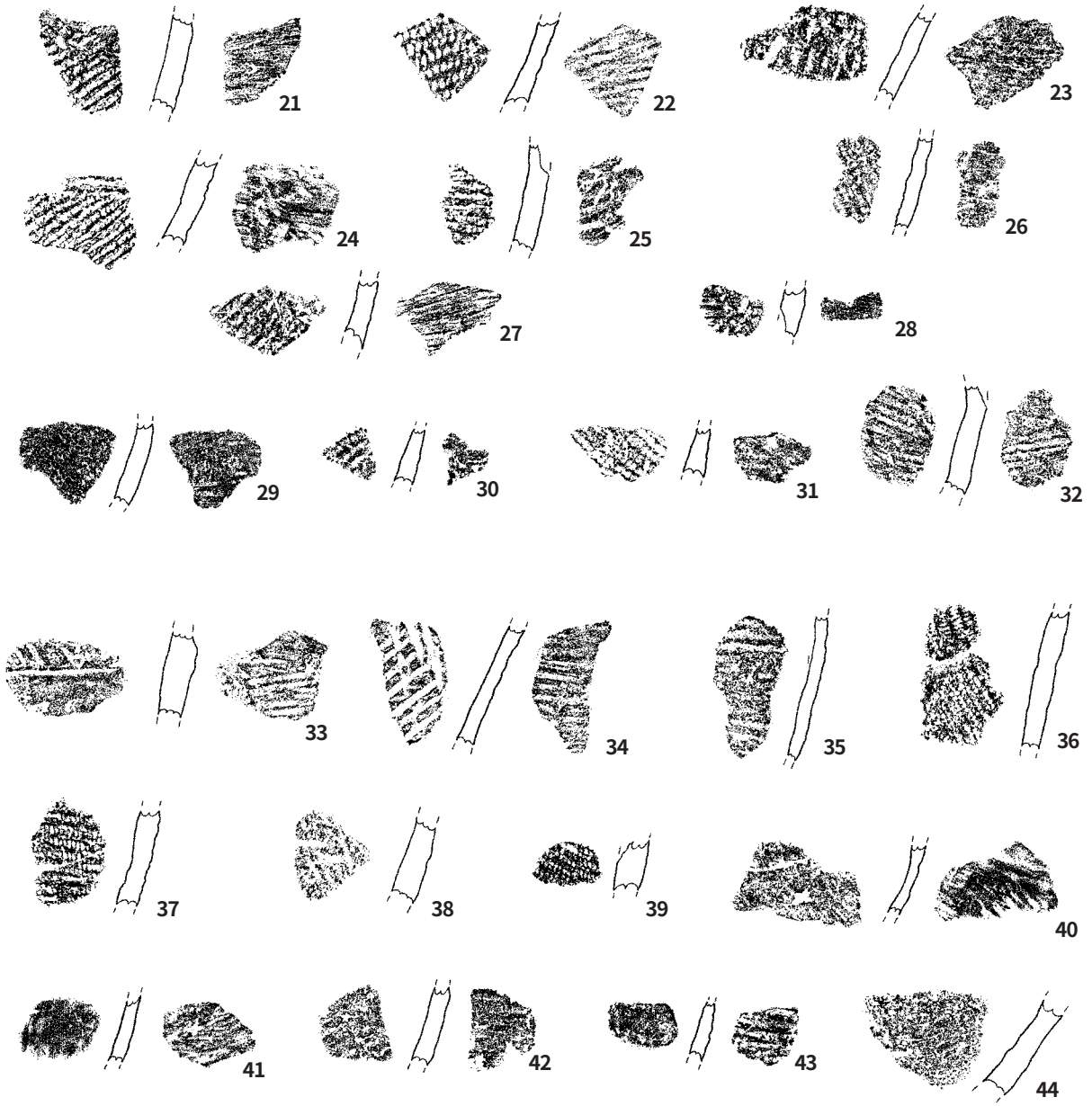
第３ａ層出土土器（第 12・13図）

第３ａ層は１～６区にかけて堆積する。遺物の出土量は 30点であり、６区からの出土が最も多い。出土した土器群はいわゆる「縄文条痕土器」群が大勢を占め、器種は深鉢を主流とする。また 74・75、78～82を除くいずれの土器も胎土に繊維の混入が認められる。

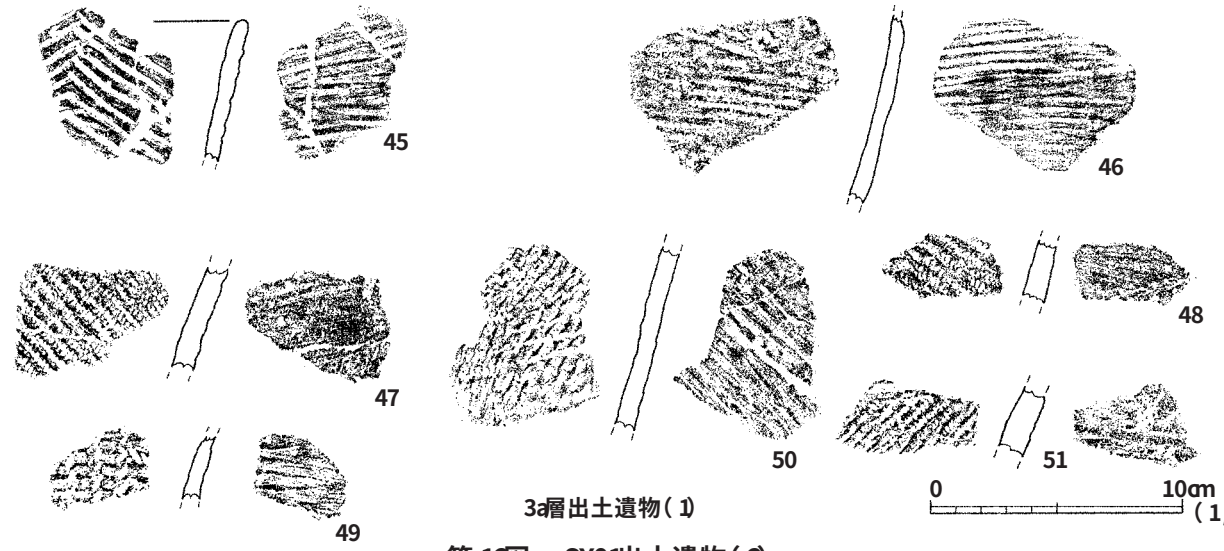
はじめに口縁部資料を見ていくと、45の口縁部は波状口縁を呈し、直立気味に外傾する。外面は波状を呈する口縁部の形状に平行して幅約４㎜ほどのやや幅の広い集合沈線が施される。内面には条痕文を有する。62の口縁部も直立気味に外傾し、口唇部にはＶ字条の浅いキザミを有する。外面には縄文が施され、内面には条痕文を有する。78の口縁部は弱く外傾する。外面にはナデ調整、内面には条痕文の後、ナデ調整が行なわれる。

底部資料としては、83の平底土器がある。この外底面では条痕文とみられる方向不定の擦痕がみられ、内底面では条痕文が施された後、ナデ調整が行なわれている。

この他の出土遺物の施文技法・器面調整について記すと、49では条痕文の後に斜位の押圧縄



3b層出土遺物（2）



3a層出土遺物（1）

第12図　SX01出土遺物（2）

文が、52では沈線が施された後に斜位の押圧縄文が、64では条痕文と沈線が施された後に斜位の押圧縄文が配される。これらはいずれも接合関係には無いが、共通した施文技法がみとめられることから同一個体である可能性が高い。また68～70についても接合関係には無いが、いずれも連続刺突によって沈線を構成し、68・69は円形竹管文がみられ、胎土も共通した特徴を有する。前述した83も胎土観察からこれらと近似した傾向がうかがえることからこれらについても同一個体である可能性が高い。71は横位沈線が施され、内面には条痕文を有する。57・72は横位押圧縄文が施される。46・76の外面上位には条痕文、以下に縄文が施され、46は内面に条痕文を有する。47・48、50・51、53、55、59～61、63、65～67では外面に縄文、内面に条痕文が配される。54、56、58、73は外側では縄文を有し、内面に条痕文を施さないものである。77は外面に条痕文を有し、内面ではナデ調整が行なわれている。なお、口縁部資料の78を含め、74・75、79～81は胎土及び色調、及び薄手という特徴から、第３ｃ層より出土した土器群と接合関係には無いものの、同一個体である可能性は高い。このうち74・75、79では外面に縦位の条痕文が施された後にナデ調整が行なわれ、内面には横位の条痕文を有している。

第５表　第３ａ層区別出土点数集計表

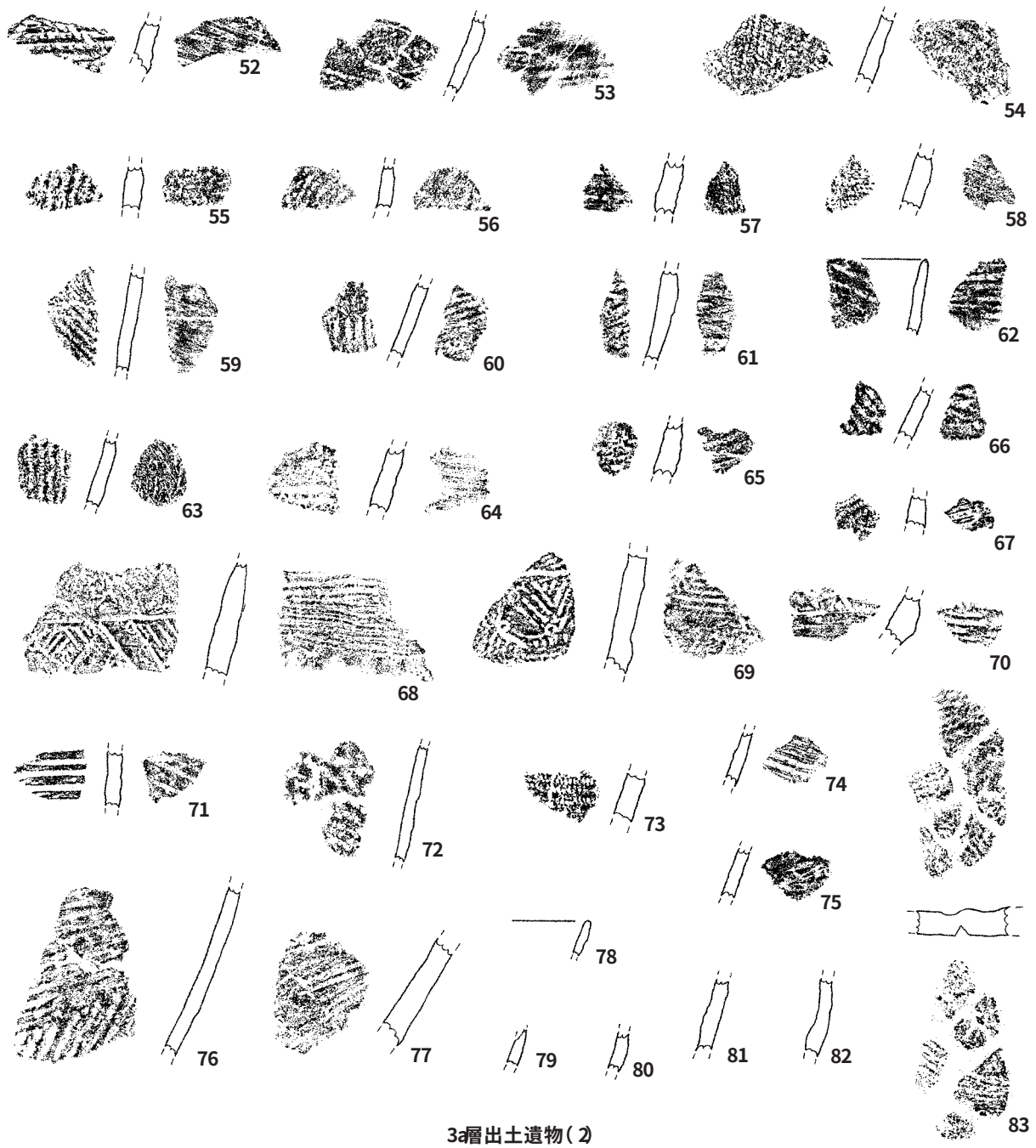
	１区	２区	３区	４区	５区	６区
第３ａ層	2	0	9	2	5	12

第２ｂ層出土土器（第13～15図）

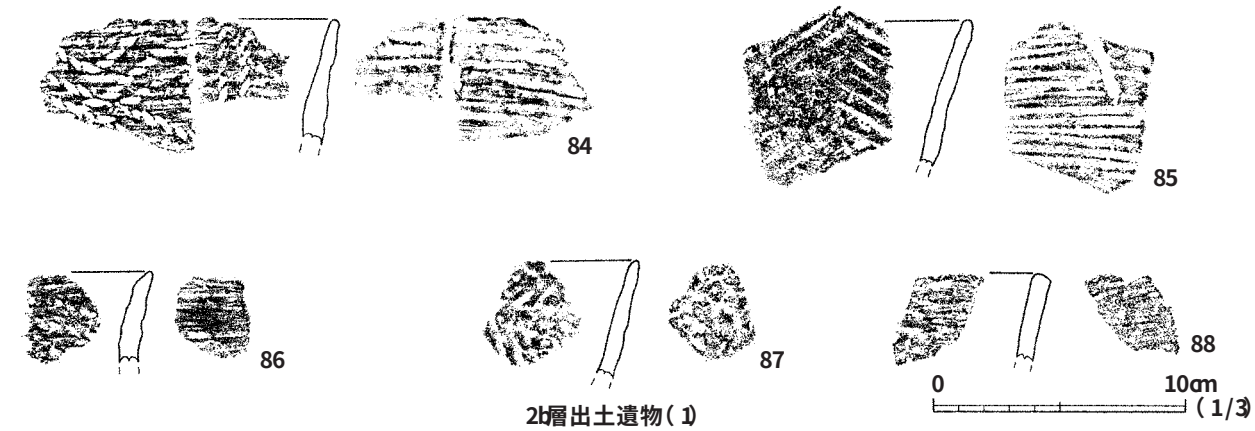
第２ｂ層は１～６区にかけて堆積する。遺物の出土量は80点であり、１区からの出土が最も多い。出土した土器群はいわゆる「縄文条痕土器」群が大勢を占め、器種は深鉢を主流とする。また136・138・139を除くいずれの土器も胎土に繊維の混入が認められる。

はじめに口縁部資料を見ていくと、84、86の口縁部は直立気味に外傾し、口唇部にはＶ字条の浅いキザミを有する。施文技法は横位条痕文を施した後に斜位の押圧縄文を配する。外面には条痕文を有する。85の口縁部は波状口縁を呈し、直立気味に外傾する。外面は波状を呈する口縁部の形状に平行して幅約４㎜ほどのやや幅の広い集合沈線が施文される。内面には条痕文を有する。87の口縁部は直立気味に外傾し、外面に２方向の縄文を配し、内面ではナデ調整を施す。88の口縁部は直立気味に外傾し、内外面ともに条痕文を施す。口唇部はやや肥厚し、キザミを有する。

この他の出土遺物の施文技法・器面調整について記すと、89・114の外面では横位条痕文を施した後に、斜位・縦位の押圧縄文を配する。内面には条痕文を施す。89の外面上部では条痕文帯の下位に沈線が巡り、その下から縄文が展開されている。115～117は外面に沈線、内面に条痕文を有する。103の外面は条痕文と縄文を施し、内面には条痕文とナデ調整を施す。120は外面に押圧縄文を配し、内面にナデ調整を施す。119では内外面ともに条痕文を有する。90～102、104、106～113、118、121、124、131では外面に縄文、内面に条痕文が配される。105、122・123、125～130、132・133は外側では縄文を有し、内面に条痕文を施さないものである。134～136は外面でナデ調整が行なわれ、内面では条痕文を施す。137～139は内外面ともナデ



3a層出土遺物（2）



2b層出土遺物（1）

第13図　SX01出土遺物（3）

調整を施している。なお、136、138・139は胎土及び色調、及び薄手という特徴から、第３ｃ層より出土した土器群と接合関係には無いものの、同一個体である可能性は高い。

第６表　第２ｂ層区別出土点数集計表

	１区	２区	３区	４区	５区	６区
第２ｂ層	26	7	6	15	11	15

第２ａ層出土土器（第15・16図）

第２ａ層は１～６区にかけて堆積する。遺物の出土量は91点であり、１区からの出土が最も多い。出土した土器群はいわゆる「縄文条痕土器」群が大勢を占め、器種は深鉢を主流とする。また161・172・189・194を除くいずれの土器も胎土に繊維の混入が認められる。

はじめに口縁部資料を見ていくと、141の口縁部は直立気味に外傾する。施文技法は横位条痕文を施した後に斜位の押圧縄文を配し、外面には条痕文を有する。166の口縁部は直立気味に外傾し、外面、口唇部、及び口縁部内面に押圧縄文を配する。内面はナデ調整を施す。189の口縁部はやや大きく外傾する。器面調整は外面では縦位の条痕文を配した後、縦位のナデ調整を施し、内面では条痕文を有する。

この他の出土遺物の施文技法・器面調整について記すと、140、163、165では横位条痕文を施した後に、斜位・縦位の押圧縄文を配する。内面には条痕文を施す。140の外面上部では条痕文帯の下位に沈線が巡り、その下から縄文が展開されている。168・169は外面に沈線、内面に条痕文を有する。164の外面は条痕文と縄文を施し、内面には条痕文とナデ調整を施す。167は外面に押圧縄文を配し、内面にナデ調整を施す。161では内外面ともに条痕文を有する。142～145、147・148、152～160、162、179では外面に縄文、内面に条痕文が配される。146、149～151、170～178、180～188は外側では縄文を有し、内面に条痕文を施さないものである。190・191、194は外面でナデ調整が行なわれ、内面では条痕文を施す。192・193は内外面ともナデ調整を施している。なお、189・194は胎土及び色調、及び薄手という特徴から、第３ｃ層より出土した土器群と接合関係には無いものの、同一個体である可能性は高い。

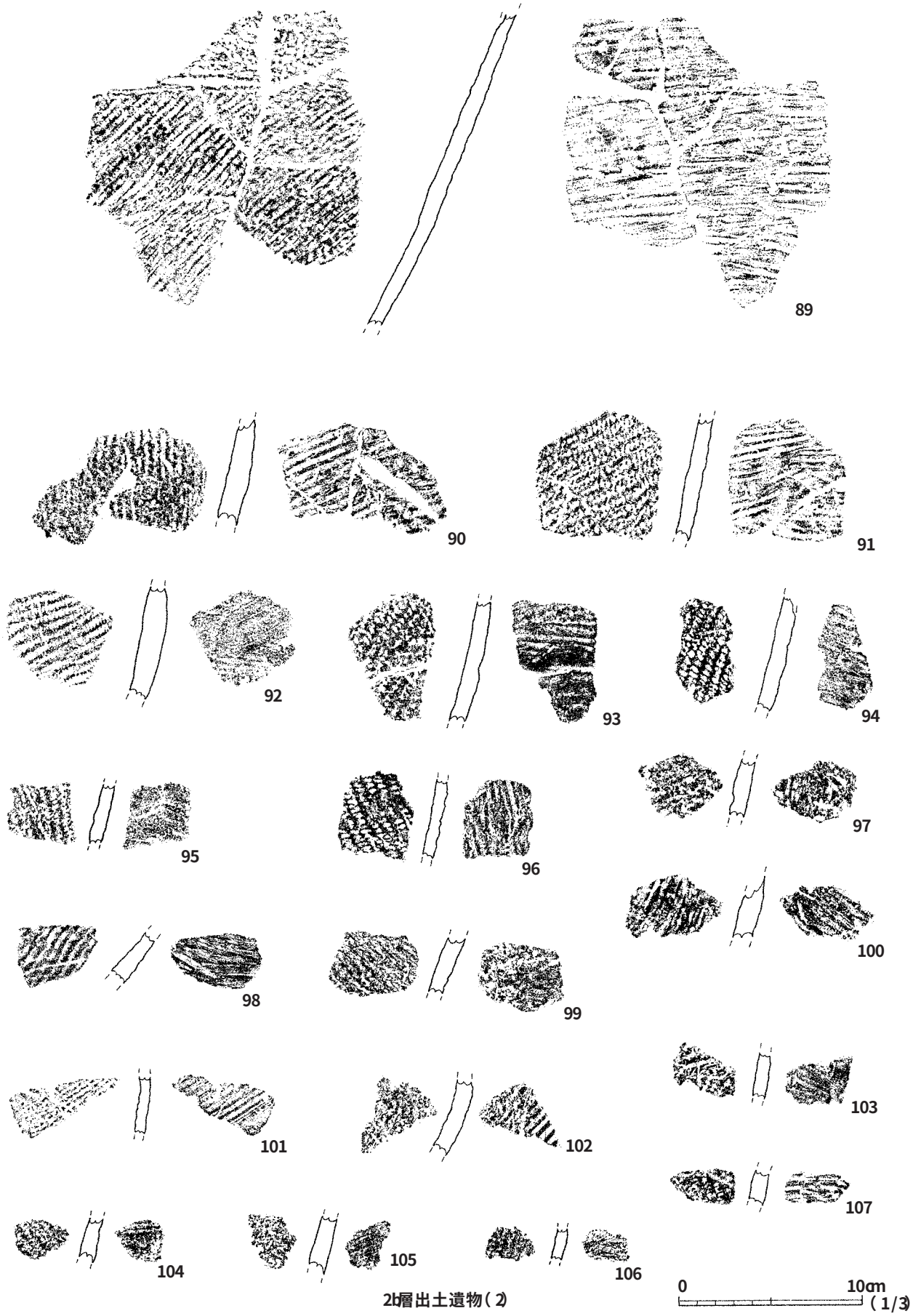
第７表　第２ａ層区別出土点数集計表

	１区	２区	３区	４区	５区	６区
第２ａ層	11	7	13	16	22	20

第１ｂ層出土土器（第16図）

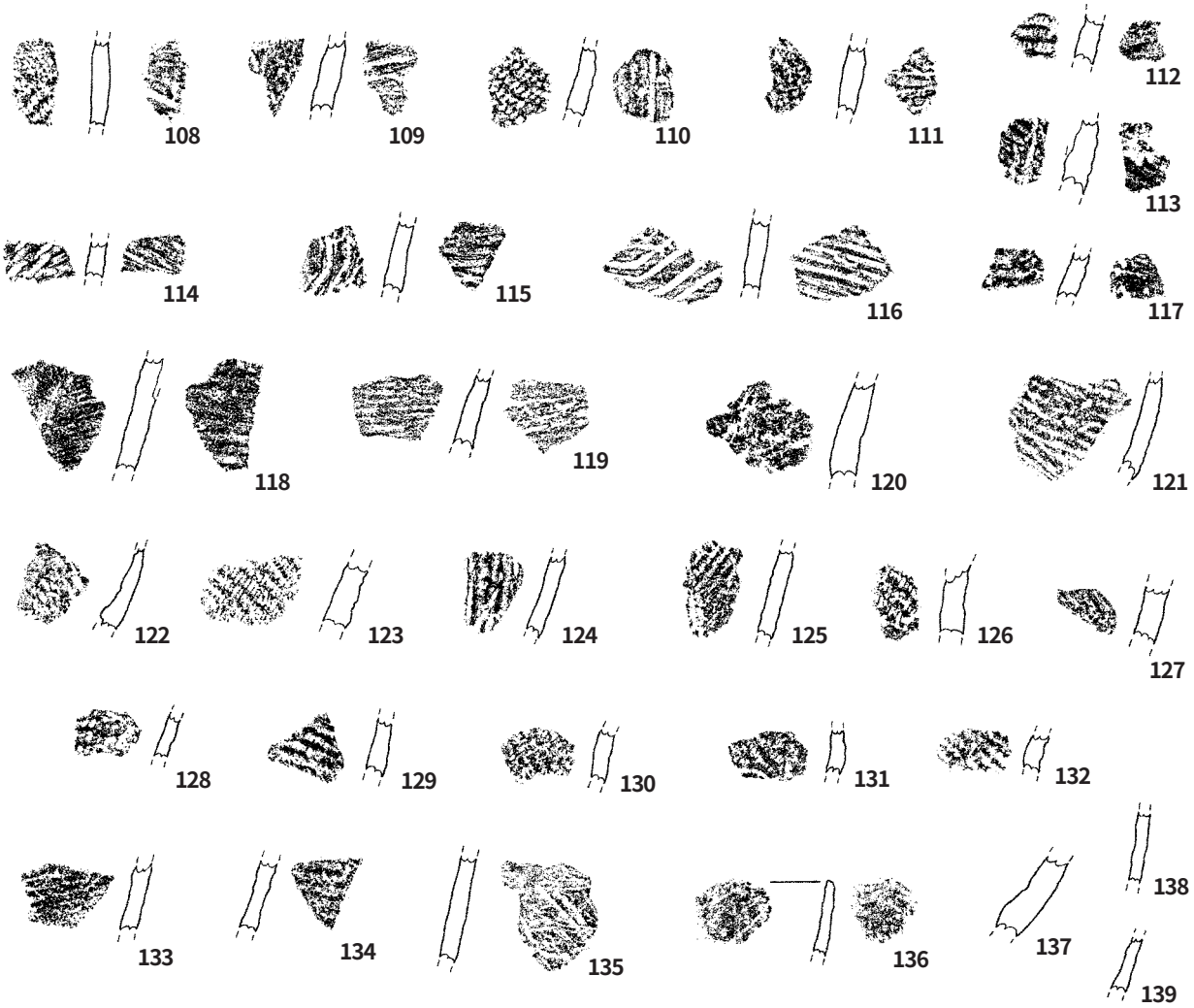
第１ｂ層は１～４区にかけて堆積する。遺物の出土量は７点であり、２区からの出土が最も多い。出土した土器群はいわゆる「縄文条痕土器」群が大勢を占め、器種は深鉢を主流とする。またいずれの土器も胎土に繊維の混入が認められる。

出土遺物の施文技法・器面調整について記すと、195では外面に縄文、内面に条痕文が配される。196～198は外側では縄文を有し、内面に条痕文を施さないものである。

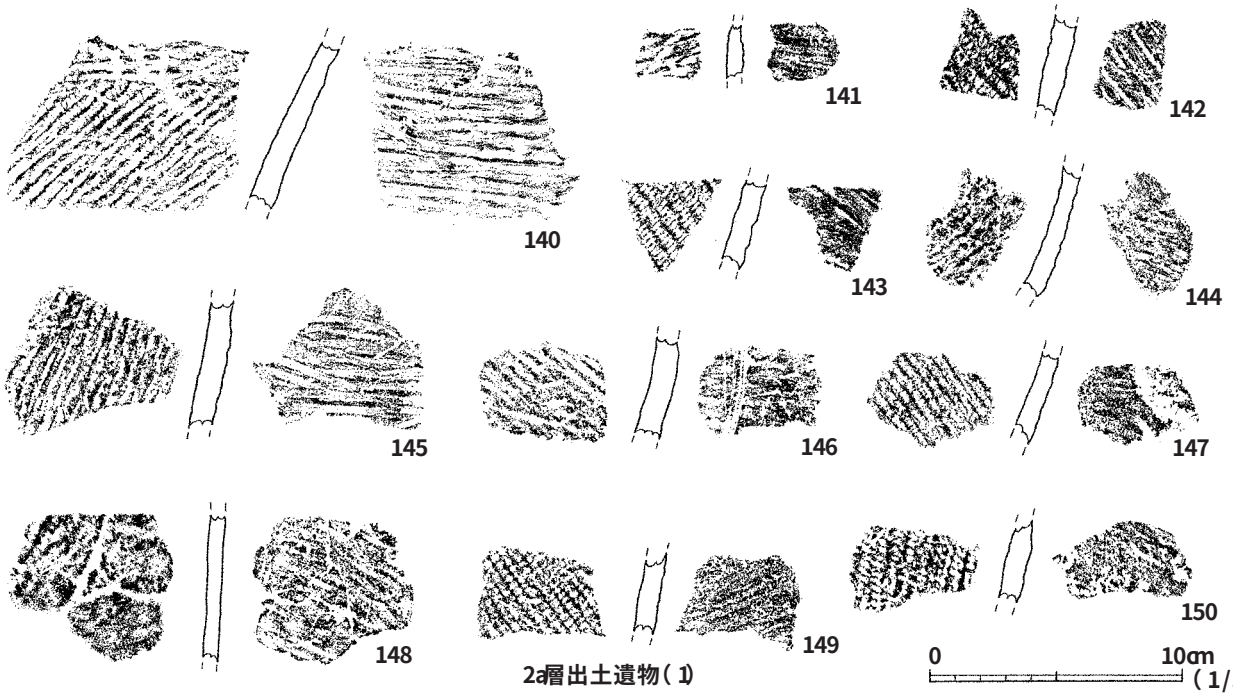


2b層出土遺物(2)

第14図　SX01出土遺物(4)

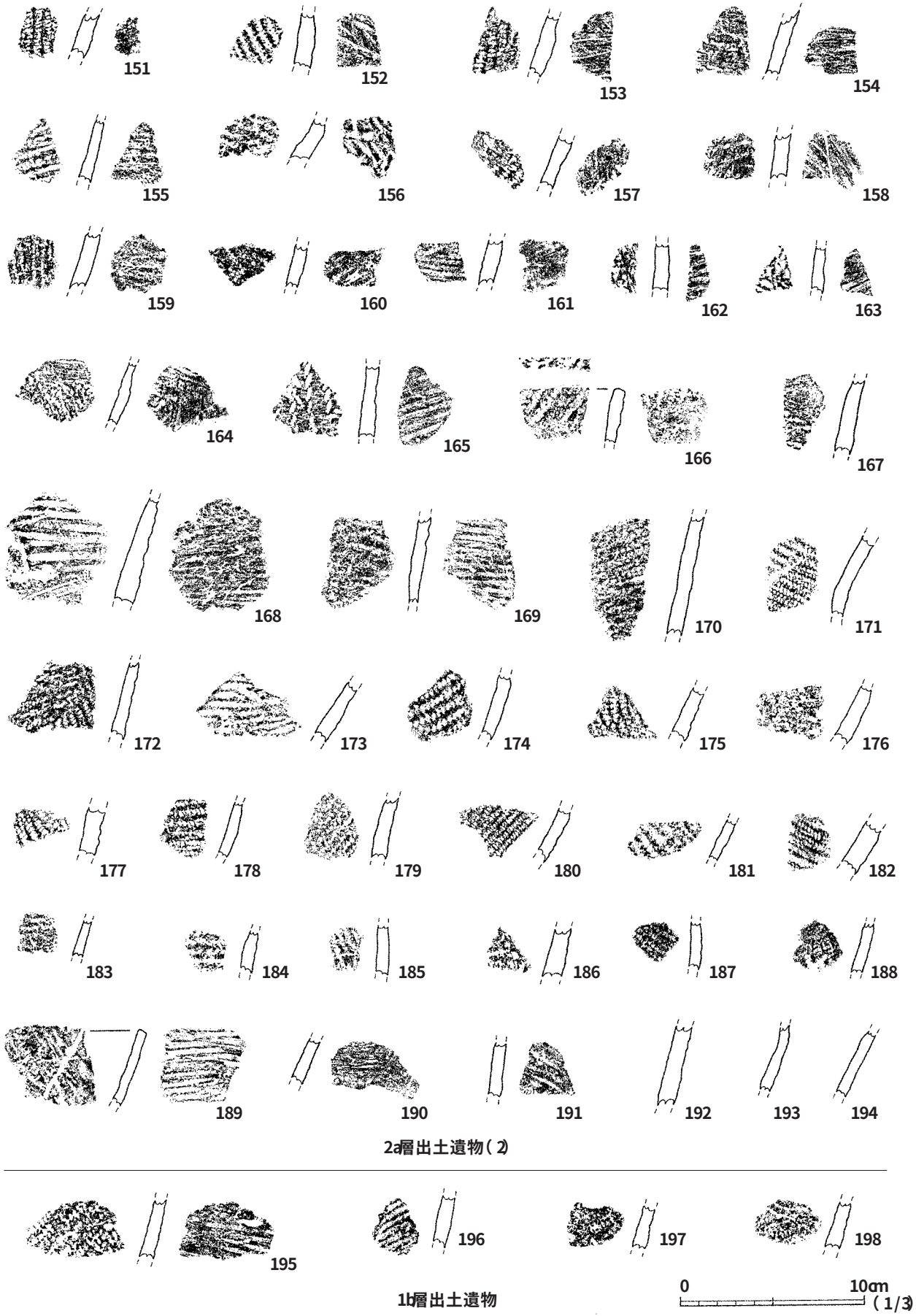


2b層出土遺物（3）

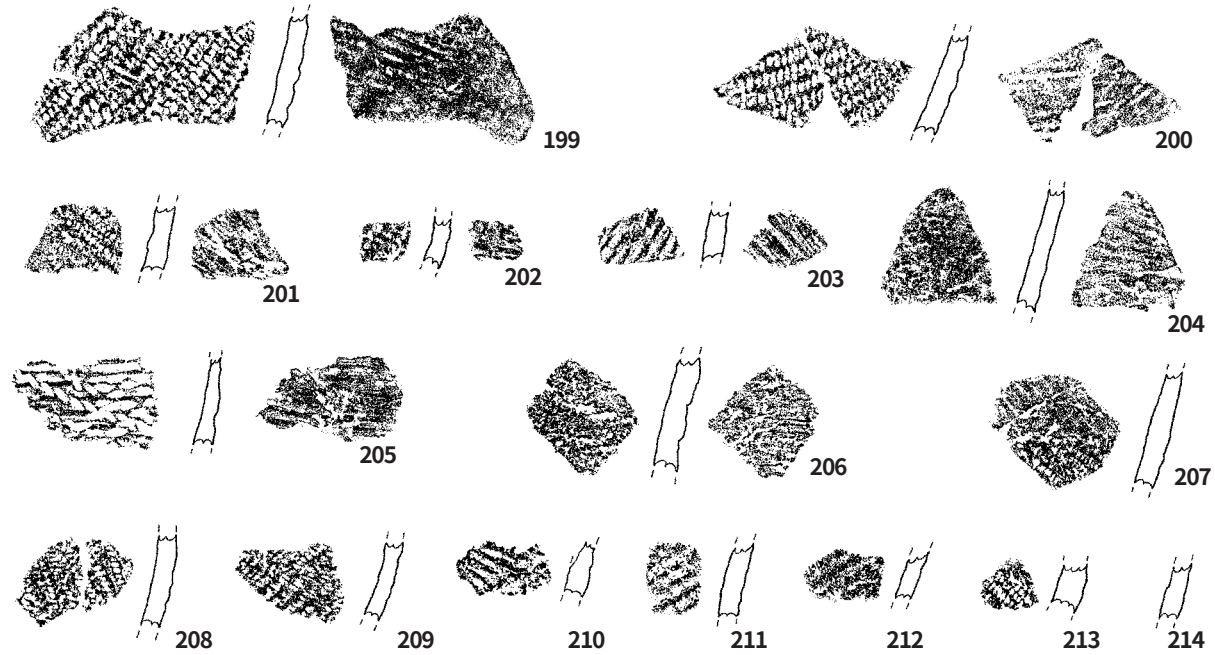


2a層出土遺物（1）

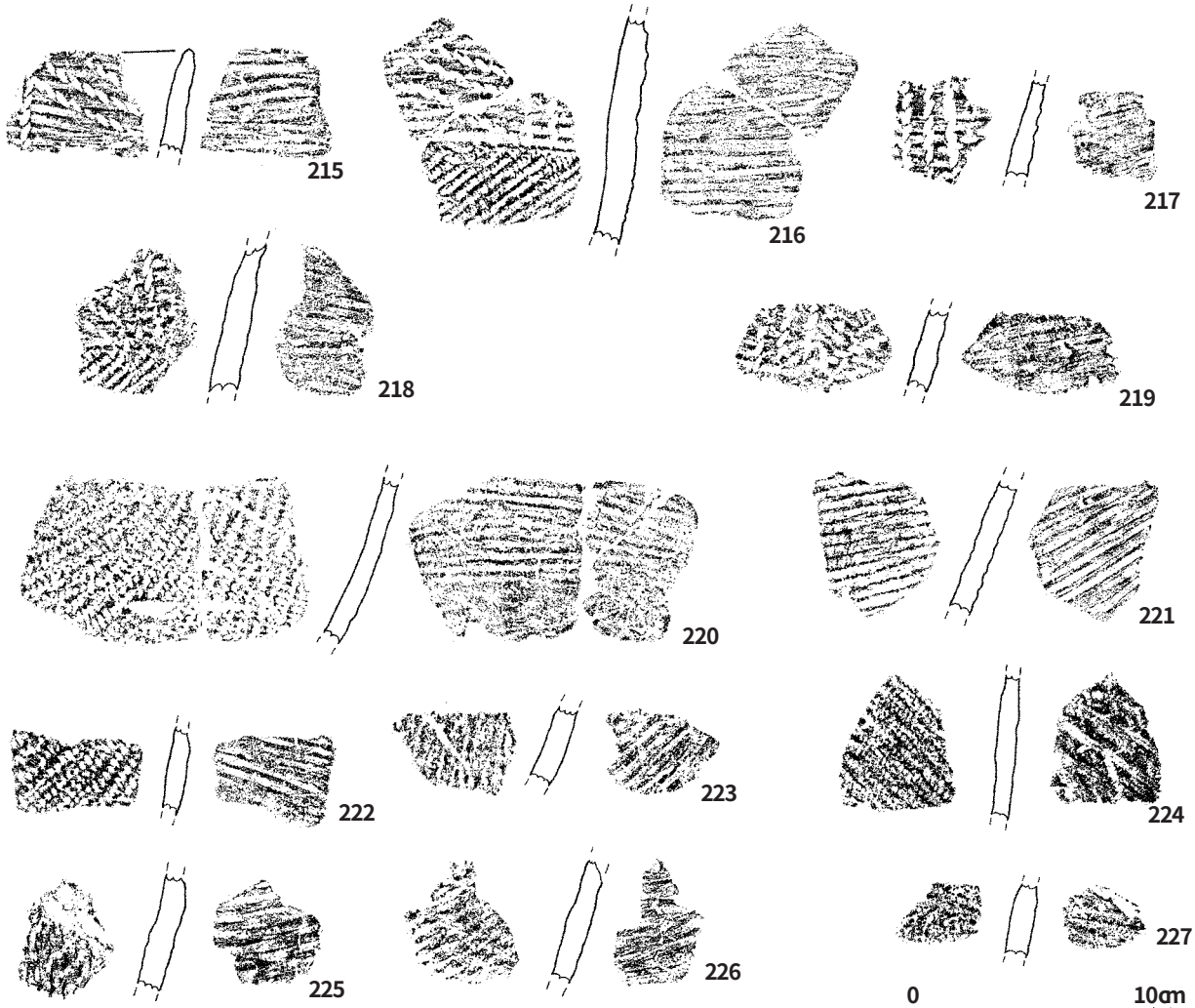
第15図　SX01出土遺物（5）



第16図　SX01出土遺物（6）



1a層出土遺物



層位不明出土遺物(1)

第17図　SX01出土遺物(7)

第８表　第１ｂ層区別出土点数集計表

	１区	２区	３区	４区	５区	６区
第１ｂ層	2	5	0	0	0	0

第１ａ層出土土器（第 17図）

第１ａ層は１～６区にかけて堆積する。遺物の出土量は 33点であり、５区からの出土が最も多い。出土した土器群はいわゆる「縄文条痕土器」群が大勢を占め、器種は深鉢を主流とする。またいずれの土器も胎土に繊維の混入が認められる。

出土遺物の施文技法・器面調整について記すと、 205では横位条痕文を施した後に、斜位の押圧縄文を配する。内面には条痕文を施す。 206は外面に横位押圧縄文を施し、内面はナデ調整を施す。 199～ 204では外面に縄文、内面に条痕文が配される。 207～ 213は外側では縄文を有し、内面に条痕文を施さないものである。 214は内外面ともナデ調整を施している。

第９表　第１ａ層区別出土点数集計表

	１区	２区	３区	４区	５区	６区
第１ａ層	0	0	3	7	19	4

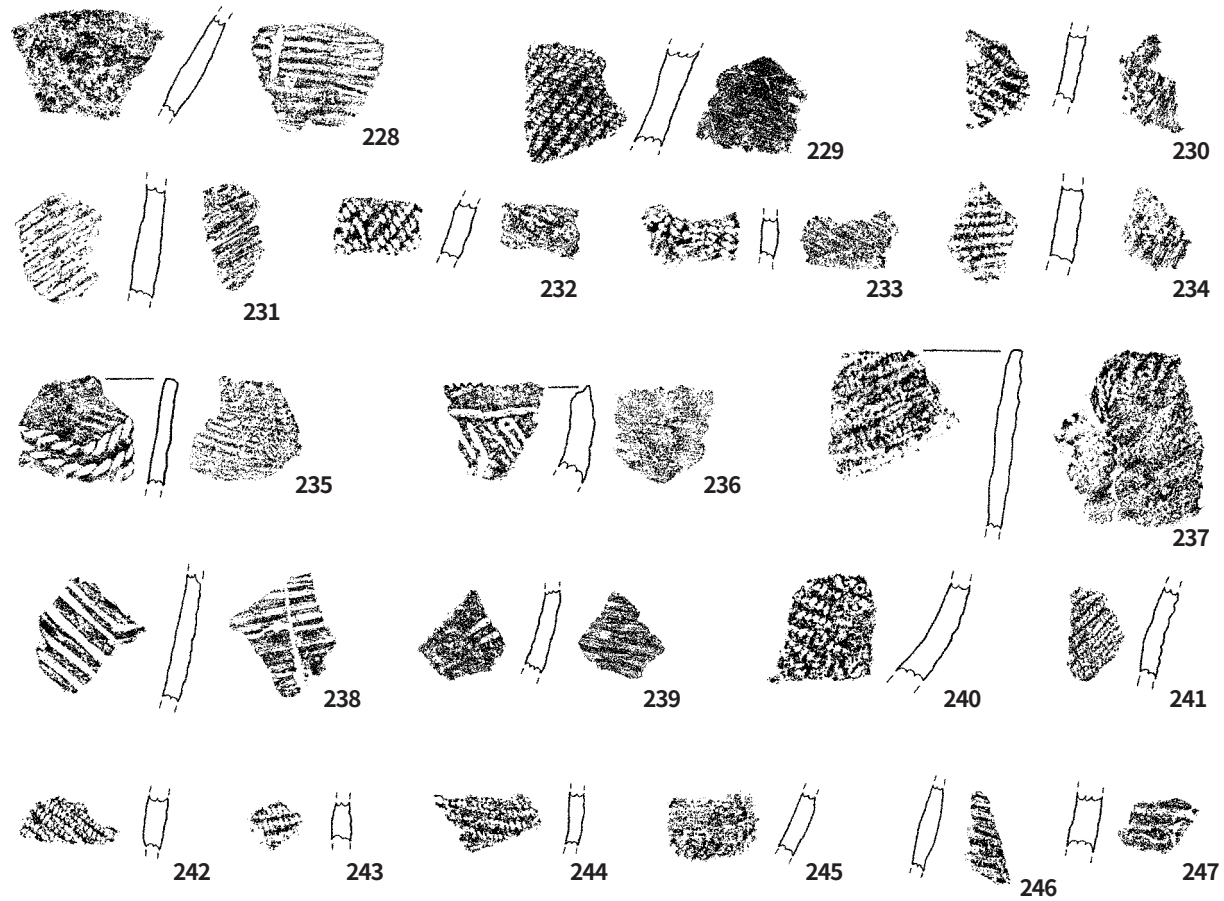
層位不明出土土器（第 17・ 18図）

ＳＸ０２土塁構築土内、同確認１トレンチ掘削時、及び遺物包含層精査時、同土層確認トレンチ掘削時に出土した資料である。これらの出土点数は 39点を数えるが、各層位や区への帰属が困難なため、一括して提示する。

はじめに口縁部資料を見ていくと、 215の口縁部はやや弱く外傾する。施文技法は外面では横位条痕文を施した後に縦位・斜位の押圧縄文を配し、内面には条痕文を施す。口唇部には浅いＶ字状のキザミを有する。 235の口縁部は直立気味に外傾する。施文技法は外面では押圧縄文を配し、内面には条痕文を施す。口唇部には浅いＶ字状のキザミを有する。 236の口縁部は弱く外傾する。口縁部外面に連続刺突文沈線による三角文を配し、その結節点に円形竹管文を施す。内面には条痕文を有する。口唇部にキザミは施されない。 237の口縁部は直立気味に外傾し、外面、口唇部、及び口縁部内面に押圧縄文を配する。内面はナデ調整を施す。

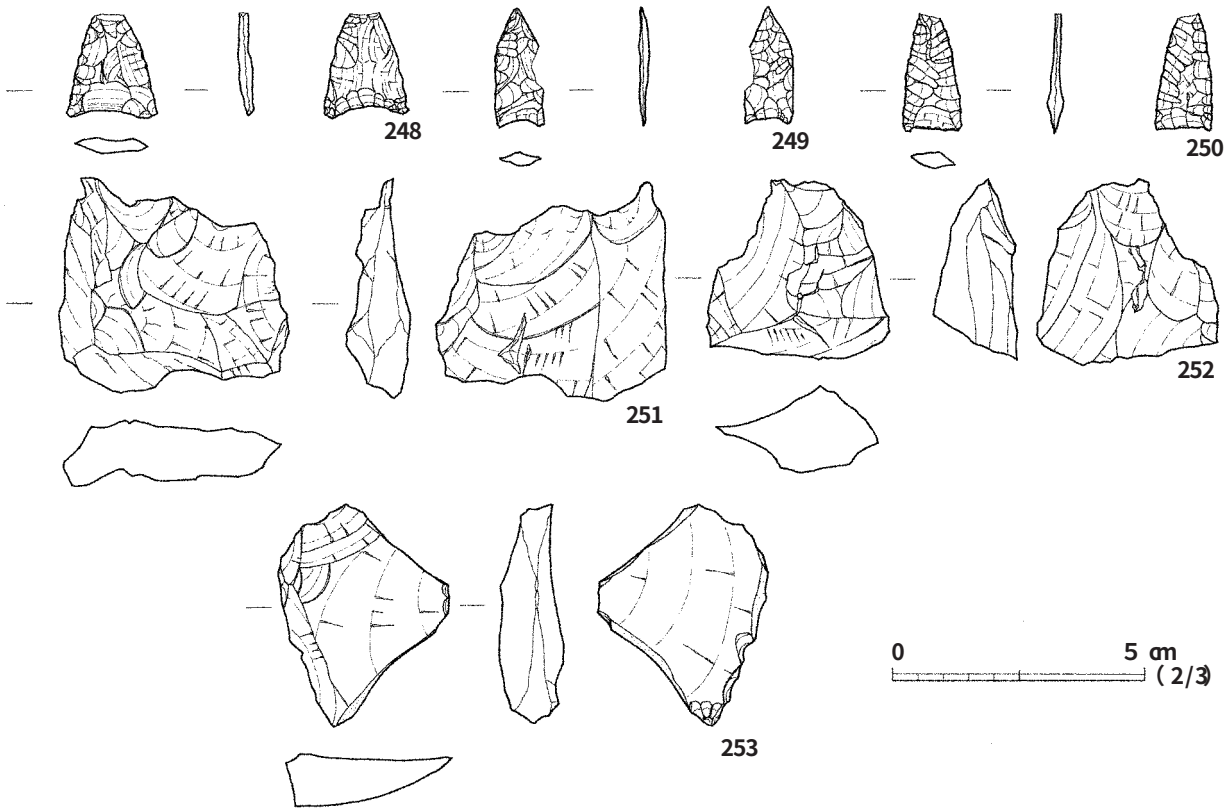
この他の出土遺物の施文技法・器面調整について記すと、 216～ 219では横位条痕文を施した後に、斜位・縦位の押圧縄文を配する。内面には条痕文を施す。 216・ 218の外面上部では条痕文帯の下位に沈線が巡り、その下から縄文が展開されている。 238・ 239は外面に沈線、内面に条痕文を有する。 247は外面に押圧縄文を配し、内面にナデ調整を施す。 220～ 228、 231、 233・ 234、 246では外面に縄文、内面に条痕文が配される。 229・ 230、 232、 240～ 244は外側では縄文を有し、内面に条痕文を施さないものである。 245は外面でナデ調整と縄文を配し、内面ではナデ調整を施す。

石器（第 18図）



層位不明出土遺物（2）

0　10cm（1/3）



0　5 cm（2/3）

第18図　SX01出土遺物（8）

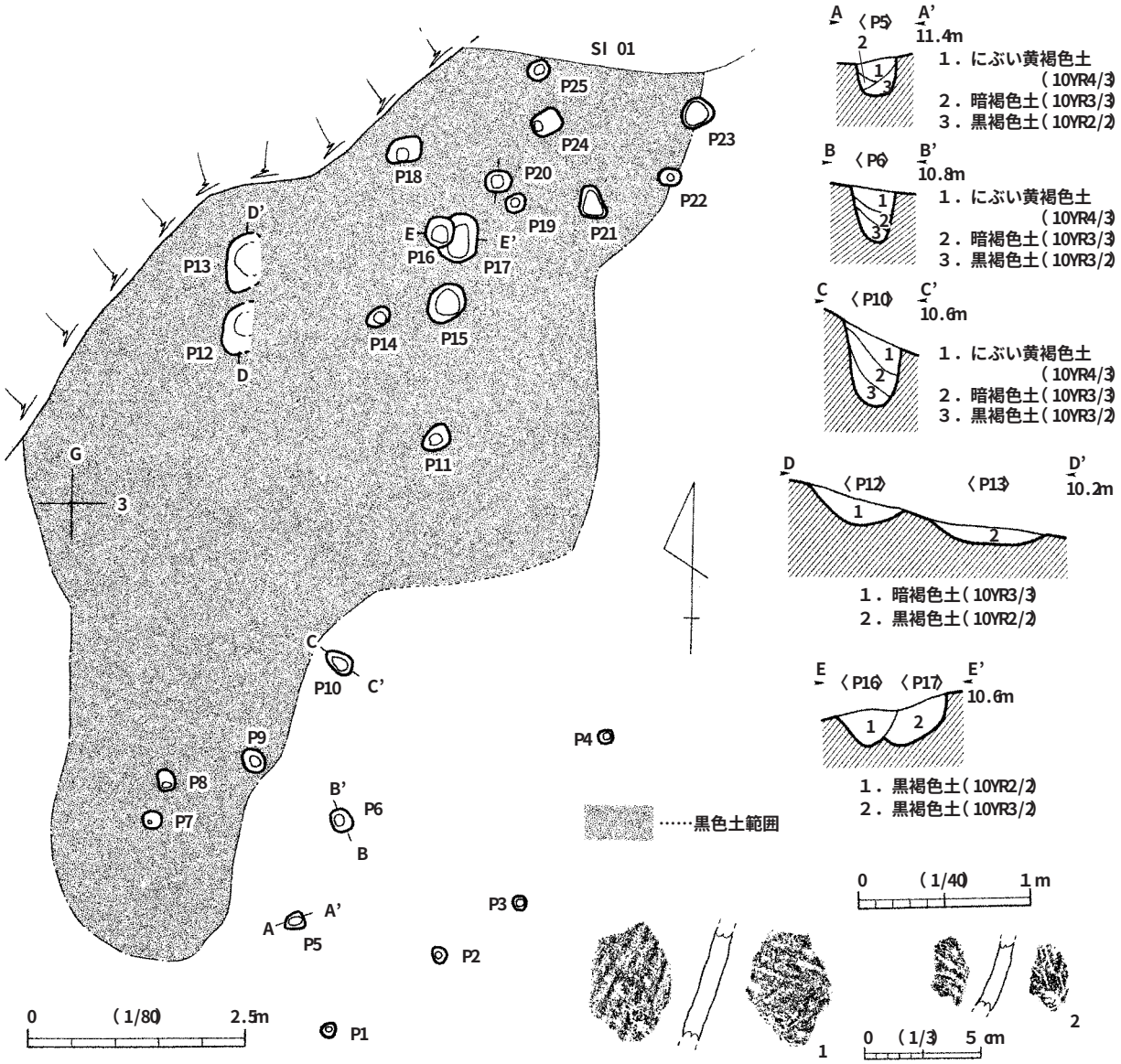
ＳＸ０１遺物包含層からは、焼礫の出土は22点を数えたのに対し、加工痕が看取できる石器の出土は少ないものであった。出土した石器の内訳は石鏃３点、剥離痕のある不定形石器３点のみであり、その全てを図示した。

石鏃

尖頭部を持ち（または有すると考えられる）、長軸中心線からほぼ左右対照となるものを石鏃として扱った。本址より出土した石鏃は全て部分的に欠損している。出土石鏃の基部の形状は全て凹状を呈し、その抉りはいずれも浅いが、幅広のもの（248）と縦長のもの（249・250）の２者がある。いずれの石鏃も側縁部及び基部において微細剥離痕が看取できる。

不定形石器

２次加工によって縁部において刃部が形成されたものを不定形石器として取り扱った。この



第19図　土塁（SX02）下のピット群

うち251では１方向のみで、252・253では１縁部において表裏からの剥離によって刃部を作り出している。なお、これら不定形石器の刃部では、光沢を伴う明瞭な使用痕跡はみとめられない。

ピット群（第19図）

土塁下部の地山面やＳＸ０１遺物包含層上面では25口のピットが確認されている。ピット群は竪穴住居跡を含めた建物跡の存在を示すといった規則性を持った分布状況ではなく、散漫な分布状況を呈している。またいずれのピットでも柱痕跡は一切確認できていない。

これらのピットは覆土の観察から大別して縄文時代、弥生時代の２時期の遺構であると判断できる。まず褐色シルトを主体とした覆土を持つピット（以下、Ｐ）はＰ１、Ｐ３、Ｐ５、Ｐ６、Ｐ９、Ｐ10、Ｐ12、Ｐ15、Ｐ18、Ｐ19、Ｐ21、Ｐ22、Ｐ24であるが、これらはＳＸ０１遺物包含層第２層を構成する土質と近似することから、縄文時代早期後葉頃と位置付けられる。これに対し、黒色味が強い覆土を持つＰ２、Ｐ４、Ｐ７、Ｐ８、Ｐ11、Ｐ13、Ｐ14、Ｐ16、Ｐ17、Ｐ20、Ｐ23、Ｐ25からは遺物の出土は一切無いが、その覆土はＳＸ０１遺物包含層第１層を構成する土質と近似し、また後述するＳＩ０１住居跡の覆土とも明瞭な差異は無い。このうち第１層では前述の通り弥生時代中期後葉の十三塚式期に比定される土器が出土しており、２層以下には弥生土器を含まないことから第１層が形成された時期を弥生時代と捉えると、これら黒色味が強い覆土を持つピット群は弥生時代中期後葉頃に位置付けられよう。

［出土遺物］（第19図）

出土した遺物は、全てが褐色シルトを覆土に持つピット内からであり、焼礫５個を除くと全てが縄文土器深鉢胴部片であるが、量的には極めて少ない。

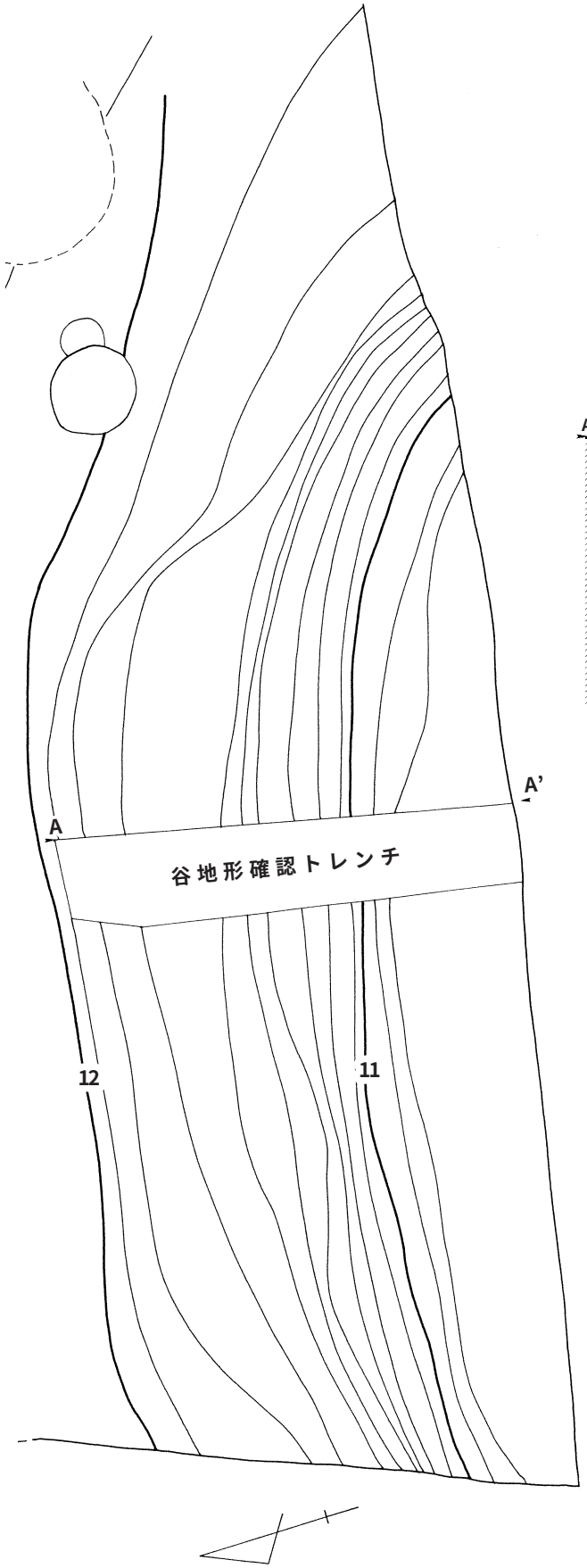
１・２はＰ12より出土。いずれも胎土には繊維を混入する。１の外面には縄文を有し、内面はナデ調整を施す。２は外面には縄文を、内面には条痕文を施す。

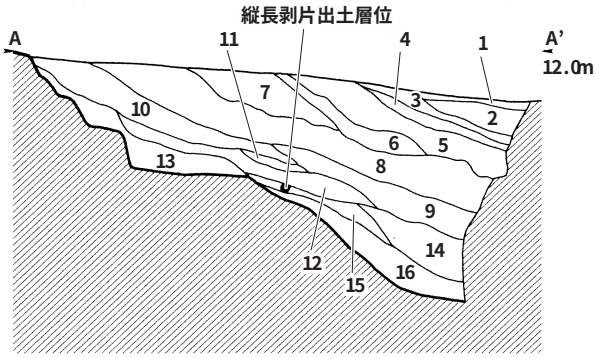
東側平場内谷地形（第20図）

東側平場南側のＢ５区周辺に位置する。確認調査時にはすでに南方に開口する小支谷の存在を把握していた。この小支谷はおそらくは城郭機能時にはすでに大半が埋没し、浅い皿状の窪地を呈していたと考えられ、確認面から約60cmまでは破砕泥岩を主体とする整地層が存在する（第１～４層）。第５層以下は全てが自然堆積であり、土器類は未確認であるが、岩盤面に程近い第15層中より石器が１点出土している。なお、この岩盤面の最大斜度は29°である。

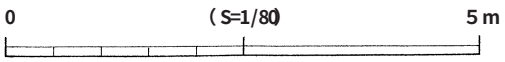
［出土遺物］（第21図）

１は微細剥離痕のある剥片である。石材は珪質頁岩である。側縁の一部で欠損しており、その箇所で幅３㎜のパティナ（水和層）が確認できる。なお、この石器については従来、パティ



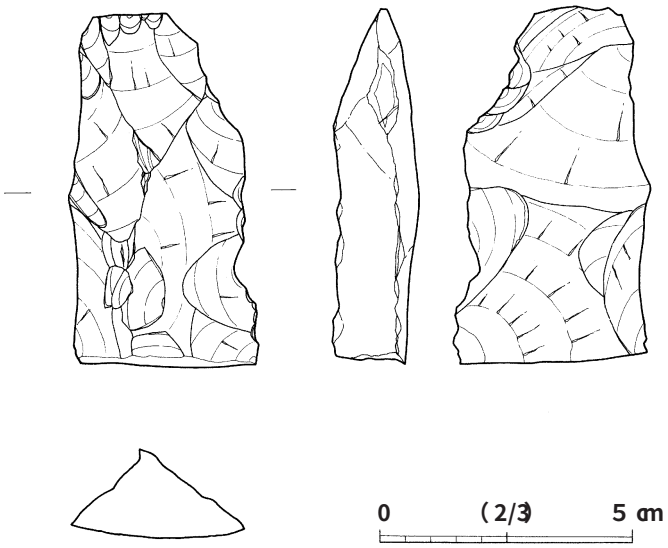


1．明黄褐色シルト（2.5Y7/6）破砕泥岩主体層
2．褐色シルト（10YR4/4）
3．にぶい黄橙色シルト（10YR6/4）泥岩粒主体層，炭化物微量
4．にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）泥岩粒少量
5．褐色シルト（10YR4/6）炭化物少量
6．暗褐色シルト（10YR3/3）
7．黒褐色シルト（10YR2/3）石英 橙色スコリアを微量含む
8．褐色シルト（7.5YR4/4）締まり極めて強い
9．黒褐色シルト（10YR3/2）酸化鉄を粒状に含む
10．褐色シルト（7.5YR4/3）泥岩小塊を少量含む
11．褐色シルト（10YR4/4）泥岩粒微量含む
12．にぶい褐色シルト（7.5YR5/4）漸移層，拳大の泥岩塊やや多く含む
13．にぶい褐色シルト（7.5YR5/4）泥岩層，やや軟質
14．にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）泥岩粒を微量含む
15．にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）泥岩粒を少量含む，縦長剥片出土層位
16．にぶい黄褐色シルト（10YR5/4）1～3 cm大の泥岩粒を多量含む



第20図　東側平場・谷地形

ナの観察や出土層位の前後に土器が全く存在しないことから旧石器時代に帰属すると考えていたが、平場内や土塁下部では明確に旧石器時代に属するという遺物の存在が認められないこと、及び出土層位自体が上部より流入の可能性があることから、本報告では可能性のみを記して積極的に該期の遺物と捉えることは差控えておく。



第21図　東側平場谷地形出土遺物

２．弥生時代

弥生時代に位置付けられる遺構は、土塁下部より発見されたＳＩ０１竪穴住居跡１軒とＳＸ０１遺物包含層とピット群である。以下にこれらの遺構について詳述するが、ＳＩ０１竪穴住居跡からは石器が１点出土したのみであり、遺構の年代を確定するにあたっての、言わば最重要資料である土器は得られていない。しかしながら、住居覆土が既述したＳＸ０１遺物包含層第１層と極めて近似するという点を考慮して、ここでは弥生時代の遺構として取り扱う。また、ピット群については、前項で述べているのでここでは省略する。

ＳＩ０１竪穴住居跡（第22図）

Ｆ２区に位置する。本住居跡の北西部分では調査開始以前に大きく掘削を受けたことにより消滅しているが、遺存した部分では緩やかな弧状を呈することが確認できることから本来は円形に近い形状であったと考えられる。確認面の海抜は10.7m前後であるが、立地としては丘陵頂部ではなく西側及び北側へ下る緩斜面上に位置している。

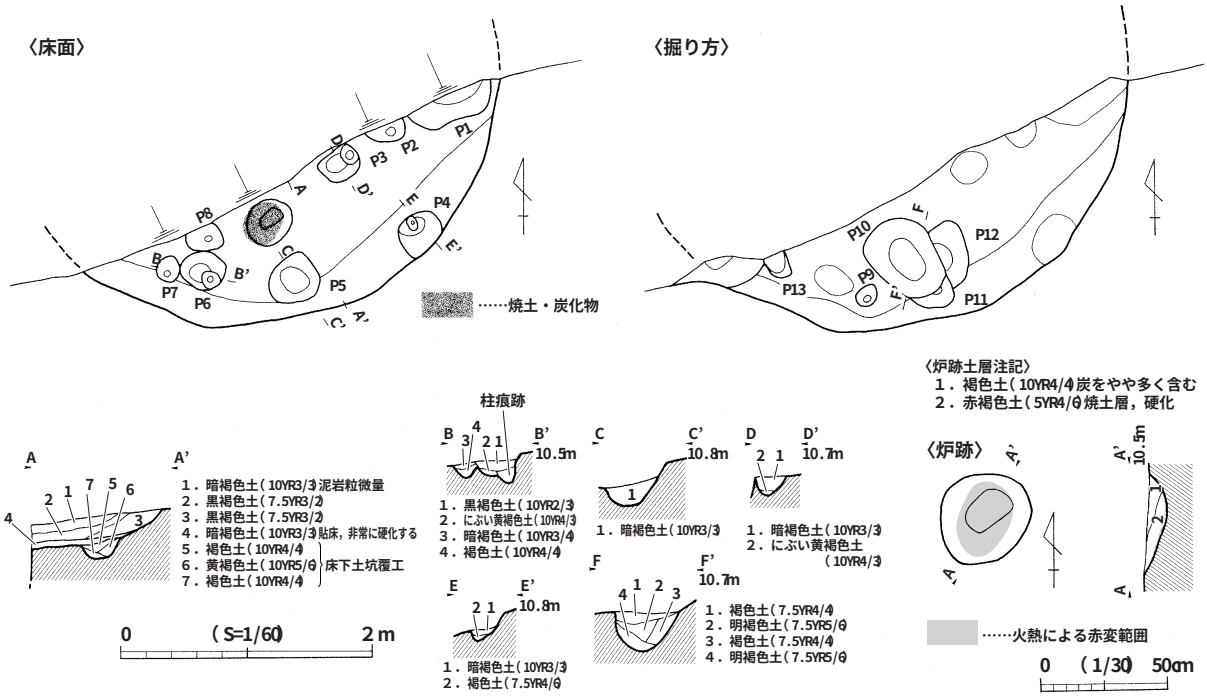
住居内床面までの堆積土は３層に分層できる。このうち第１層には泥岩粒が微量含まれるが、２・３層には目立った含有物は認められず、均質な印象を受ける。いずれも自然堆積である。

床面は暗褐色ローム質土を用いて構築され、住居内中央にかけて若干傾斜している。検出した範囲内においてはいずれも硬化が著しい。

屋外から床面に至る壁面は、緩やかな立ち上がりを見せており、確認面からの壁高は最大で12cmであり、斜度は21°を測る。壁の立ち上がりは、西側ではやや不明瞭となる。

住居内の南寄りの床面には焼土と炭化物の分布が認められ、この直下には平面形状が楕円形、断面形状が浅い皿状を呈する地床炉が存在する。規模は長軸39cm、短軸35cm、深さ８cmを測る。地床炉の底面は被熱により赤変している。

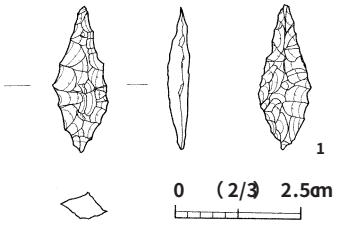
床面上ではピットが８口確認されているが、このうちＰ１は規模から主柱穴と考えられる。また壁面に沿って展開するＰ４・Ｐ５・Ｐ６は壁柱穴となる可能性がある。なお、Ｐ３・Ｐ４・



第22図　ＳＩ０１住居跡

Ｐ６では底面において柱材が沈下した痕跡が認められている。

掘り方は厚さ３～５ cmほどの貼床の直下で確認されているが、ここでは床下遺構としてピットが５口確認されている。この他に深さ４～７ cmの浅い窪み状のものが６穴確認できた。



第23図　SI01出土遺物

［出土遺物］（第23図）

ＳＩ０１竪穴住居跡からは石器が１点出土したのみであり、遺構の年代を判断する資料は得られていない。しかしながら既述したＳＩ０１住居跡の覆土と弥生土器を多く包含するＳＸ０１第１層とが極めて近似するという理由により、ここでは弥生時代の遺構として取り扱う。

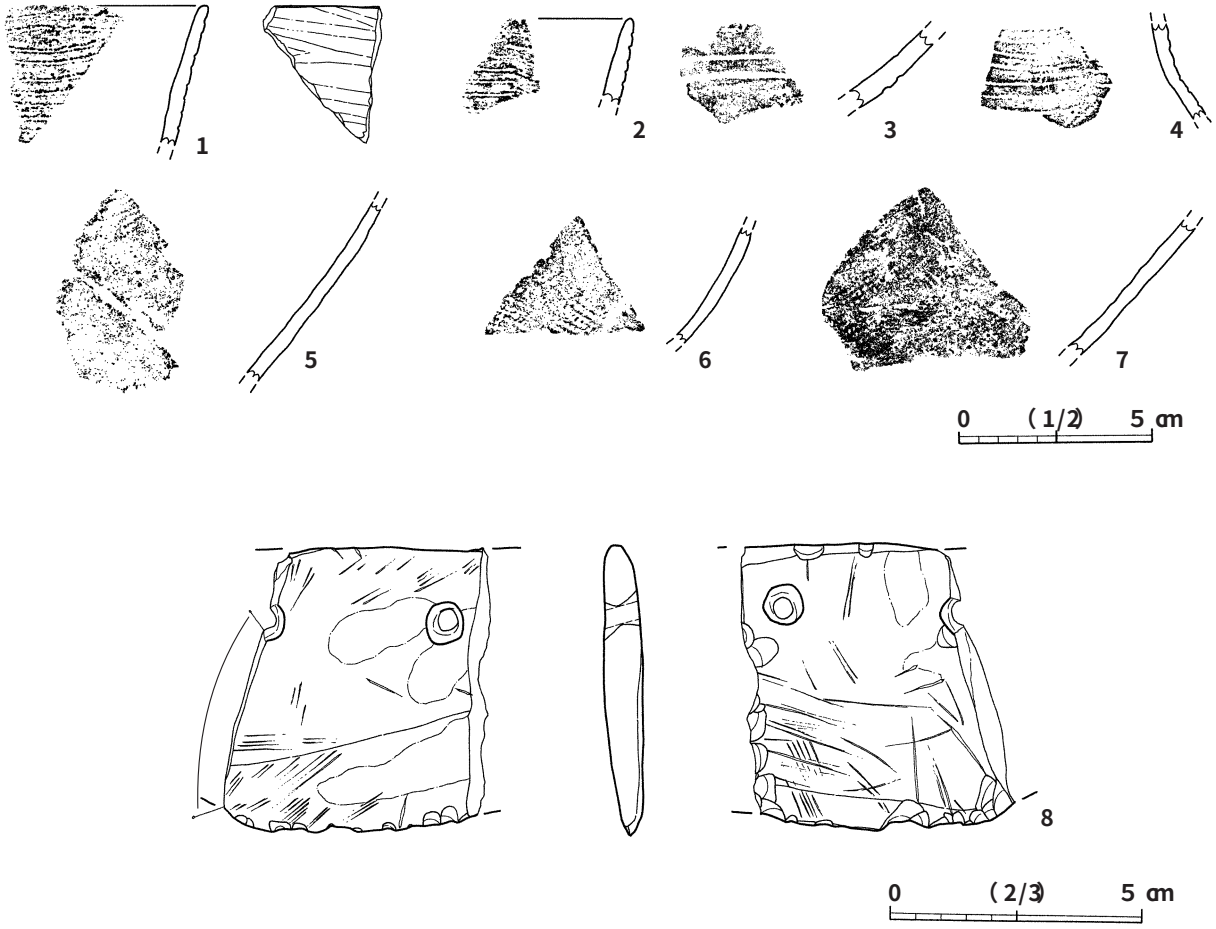
１は石鏃である。石材は黒曜石であり、形状は茎部が短い菱形を呈する。側縁部では表裏で微細剥離痕が観察できる。

ＳＸ０１遺物包含層（第24図）

前項までに第２層以下については述べているので、ここでは第１ａ・ｂ層より出土した弥生土器について記述する。なお、弥生土器は細分した１ａ・ｂ両層から計７点出土しているが、顕著な相違は認められないため、ここでは一括して「第１層」出土資料として取り扱う。

第１層出土土器

第１層からは計７点の弥生土器が出土している。これらはいずれも小片であるが、器種としては壺形土器（１・２・４～７）、鉢もしくは高坏（３）が存在する。土器外面の施文は、１・



第24図　SX02土塁掘り下げ時出土遺物（弥生時代）

２・４が２本１単位の櫛状工具による連弧文が描かれるもの、３が半裁竹管による平行沈線が施されるもの、４～７は地文縄文が施されるもの、である。なお、１の内面にはミガキが認められる。これらはいずれも弥生時代中期後葉（十三塚式）に位置付けられる。

遺構外出土遺物（弥生時代）

本調査地点では、弥生時代に帰属する遺物として上記以外に重機を用いた土塁構築土掘削時に８の石包丁が１点出土している。この石包丁は両端部を欠損しているが、最大幅は5.8cm、最大厚は0.7cm、紐孔の芯心距離は3.6cmを測る。石材は粘板岩であり、両面ともに擦痕を明瞭に留める。紐孔部の穿孔は回転穿孔によるものである。なお、この石包丁の破損している断面の一部では摩滅面が認められ、破損した後に２次利用がなされていたと考えられる。

３．中世～近世

中世～近世に位置付けられる遺構・遺物は、既存住宅が立地していた東側平場部分を除く調査区内の各所において見られる。中でも調査区西側の、現在の丘陵頂部縁辺にあたる箇所においては、調査開始以前より地表顕在遺構として土塁が南北方向に約37mにわたって遺存していることが知られていた。また本調査においても掘立柱建物跡３棟、柱列１列、溝跡２条などの

他、性格不明遺構として焼成遺構１基、土塁構築時の土取坑と考えられる大型土坑８基、整地層などの各種の遺構が発見された。以下にこれらの遺構について詳述する。

A．ＳＸ０２土塁（第29、31・32図）

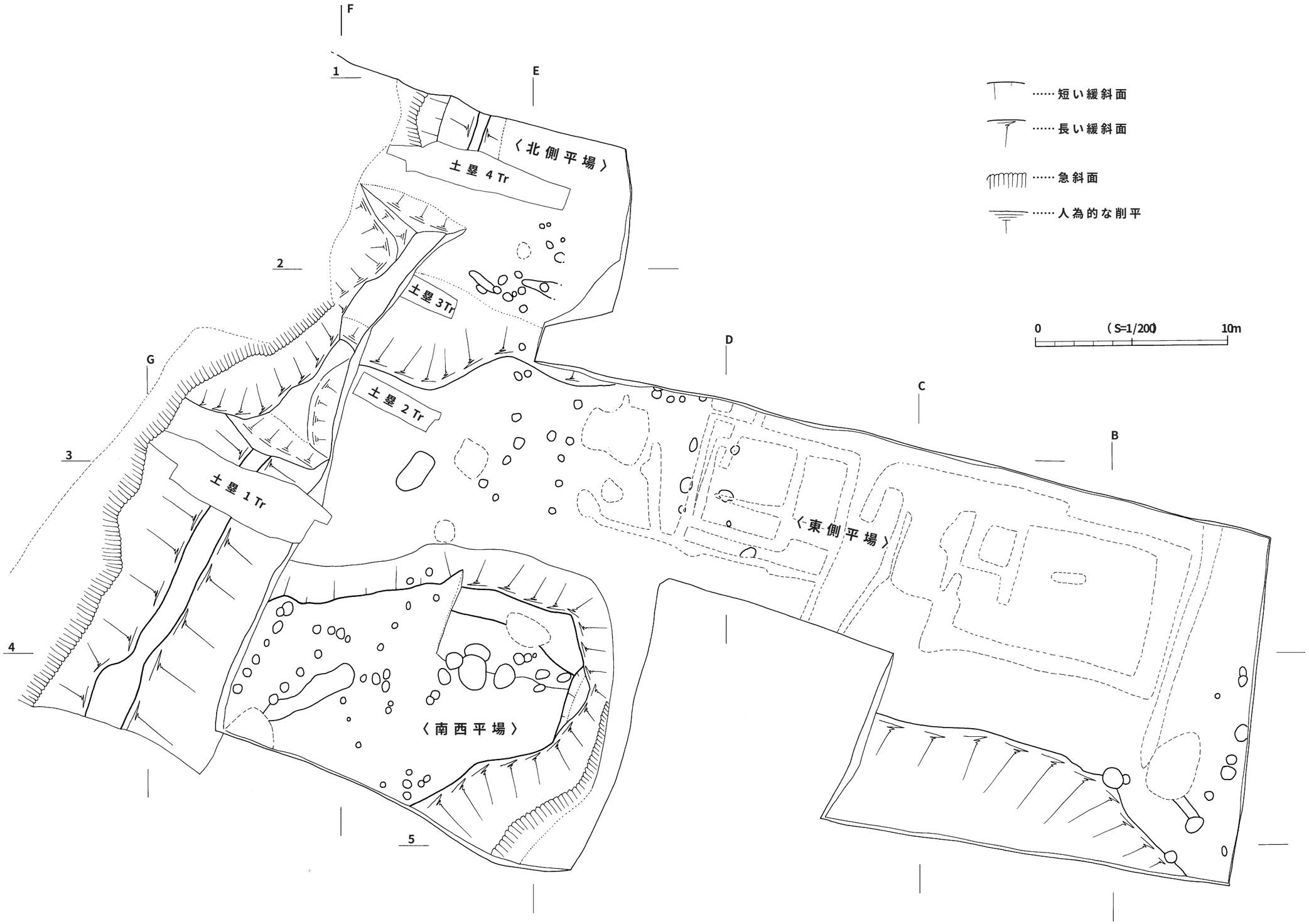
調査区の最西部に位置し、南北方向の走方向を持つ。調査区西側では南西平場と北側平場が約２ｍの落差を持って存在するが、土塁はこれらの平場を繋ぐ傾斜面では等高線に直交するようにして構築されている。この土塁は江戸期を通じて描かれた幾枚かの古絵図（巻頭カラー参照）にも描かれており、また昭和24年に米軍が撮影した航空写真でも調査地点が立地する丘陵部縁辺に巡っていることが確認できる。ところが昭和55年に岩沼市立西保育所が建設された際には調査は行なわれず、土塁の詳細については不明な点が多かった。調査開始以前での規模は全長37m、基底部は最大で9.3m、高さは平場側で約２m、谷側からは約５mを測る。また調査地点での土塁の主軸方位は約33°東傾する。なお、中央部から北半部では、戦時中に同地を畑作地として使用した折に土塁を切り崩したとのことで、現在は一見すると南側と北側の土塁が別個に存在するような状況を呈しているが、本調査では土塁欠損部分においても土塁構築土・崩落土等を確認しているため一連の遺構として捉えている。

調査では、はじめに土塁の補修・改修を含めた構築方法を土層断面によって把握することを主眼として、良好に遺存していると考えられたほぼ中央付近・北端付近・南端付近において断ち割りを行なった。その結果、土塁は３～４回にわたる補修・改修が行なわれたと考えられた。以下に各期の土塁の構築状況、規模について詳述する。

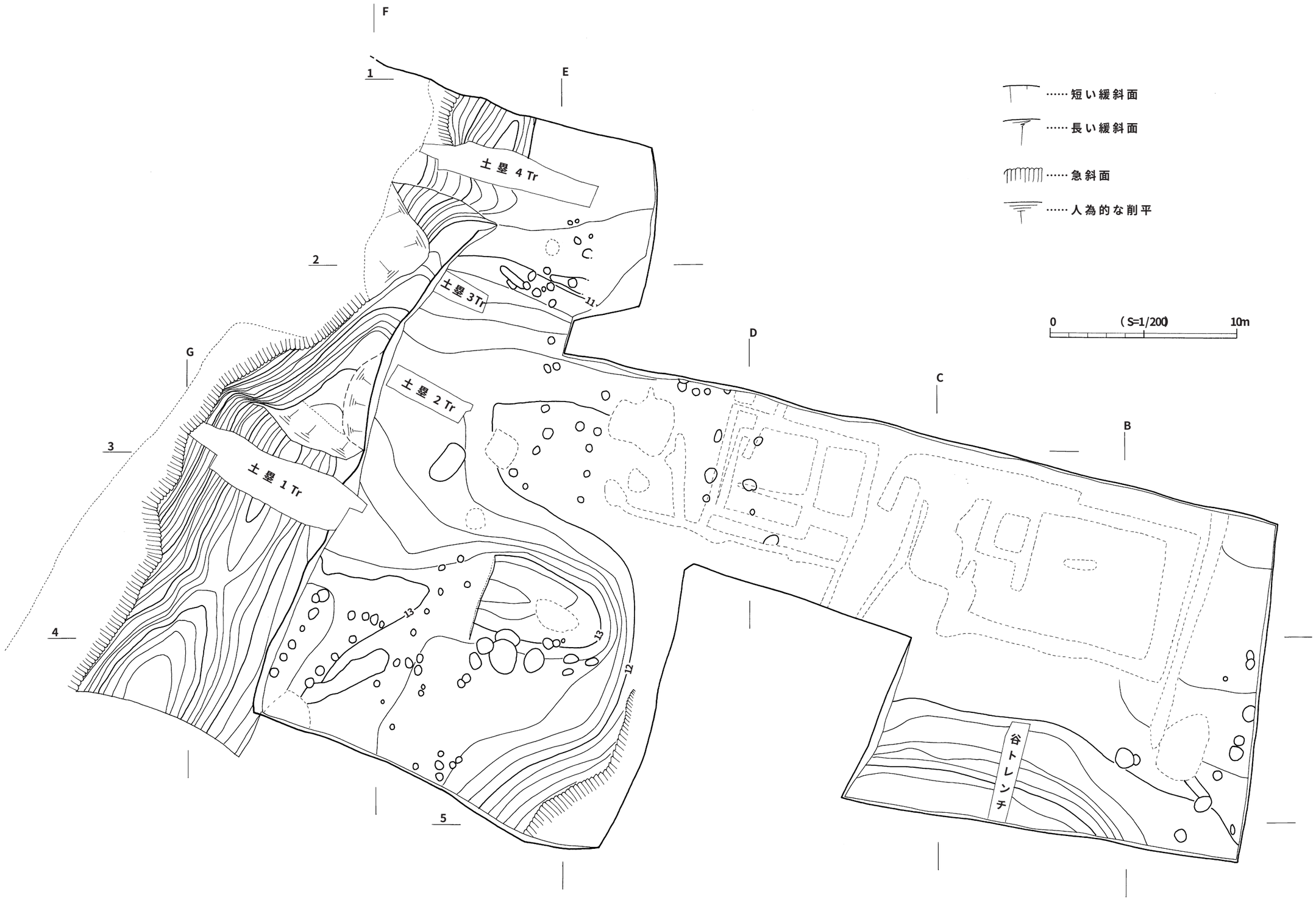
Ｉ期土塁

西側の谷地形に沿った丘陵頂縁辺部から斜面にかけて構築される。土塁確認１・２、４・５トレンチでＩ期土塁の構築土はみとめられるが、構築土の残存する高さは最も良好に遺存していた１トレンチでも約1.4mを測る程度であり、極めて遺存状態は不良である。またこれらのＩ期土塁構築土はいずれもその東側縁部のみが残存していること、及び東側での崩落土の量もさほど多くないことから、大半は西側へ崩落しているものと推測できる。土塁走方向の主軸は東側縁部を結ぶ線で推定が可能であり、25～37°東傾する。

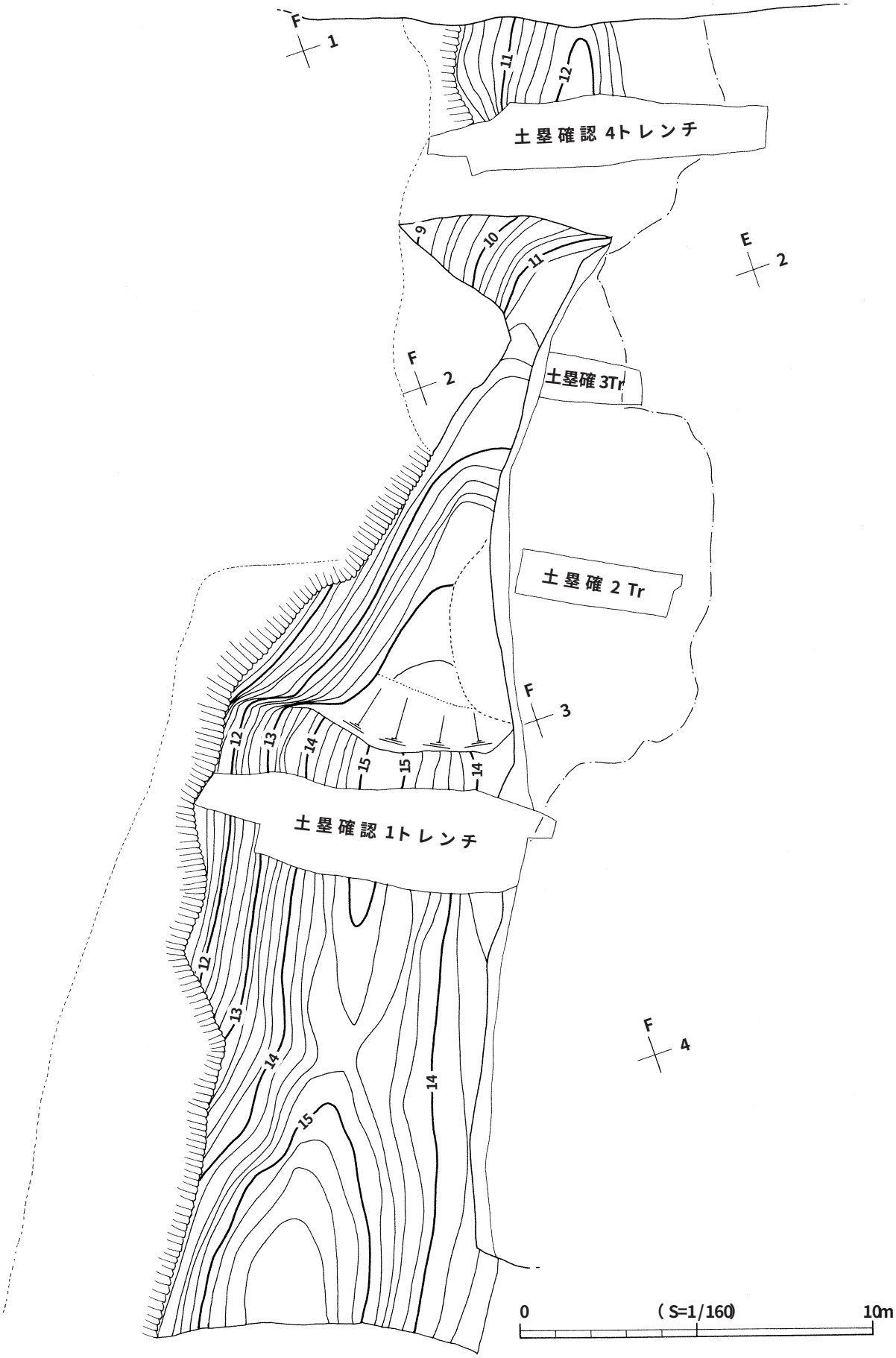
Ｉ期土塁の構築にあたっては、まず低位面である北側平場を除いた丘陵縁辺部を南北方向で大規模に削平することからはじまる（ＳＸ０６ａ、ＳＫ０８など）。この掘削幅は４m前後であるが、１トレンチでは5.2mにも及ぶ。掘削底面は愛島パミスを包含するⅤ・Ⅶ層にまで達し、平場面からの深さは1.2～1.9 mを測る。土塁はこのＳＸ０６ａ底面から４・５トレンチではⅥ層、ＳＸ０１遺物包含層が存在する１トレンチ付近ではⅣ層上に構築される。構築方法は比較的良好な状態がみられる１トレンチでの土層観察を参照すると、Ⅳ層傾斜面を埋め立てて水平な平場を構築するように、斜面下方から上方へと積み上げを行なって中心部を形成した後に、全体を褐色シルトによって被覆する。中心部は破砕泥岩や黒褐色・赤褐色シルトを主体とした土砂で構成されるが、それぞれの締まりは概して強いものではない。なお、Ｉ期土塁を構


F
E
D
C
B
G
1
2
3
4
5
〈北側平場〉
土塁 4 Tr
土塁 3Tr
土塁 2 Tr
土塁 1 Tr
〈東側平場〉
〈南西平場〉
……短い緩斜面
……長い緩斜面
……急斜面
……人為的な削平
0
(S=1/200)
10m

第 25図　遺構全体図(1)

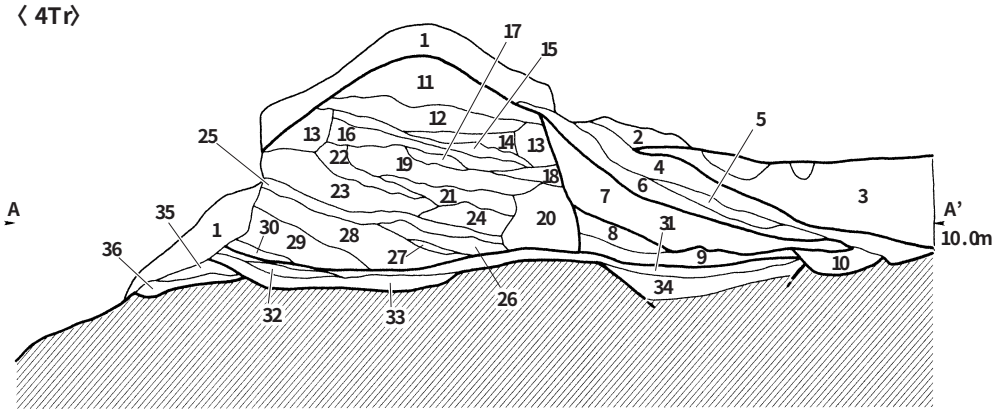

F
E
D
C
B
G
1
2
3
4
5
土塁 4 Tr
土塁 3 Tr
土塁 2 Tr
土塁 1 Tr
谷トレンチ
11
12
13
13
……短い緩斜面
……長い緩斜面
……急斜面
……人為的な削平
0
(S=1/200)
10m

第 26図　遺構全体図(2)

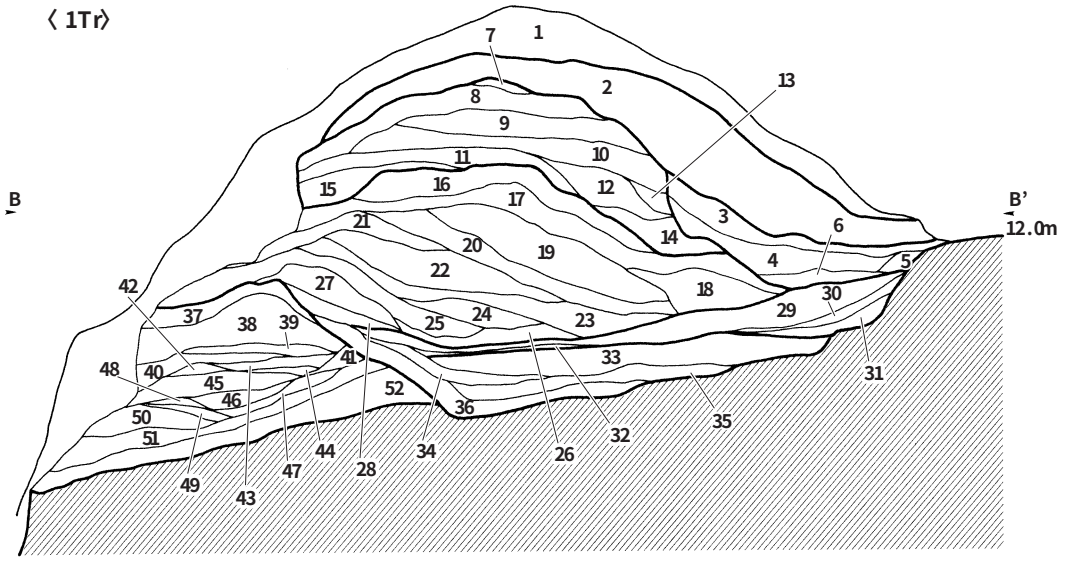


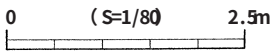
第27図　SX02土墨全測図

〈4Tr〉

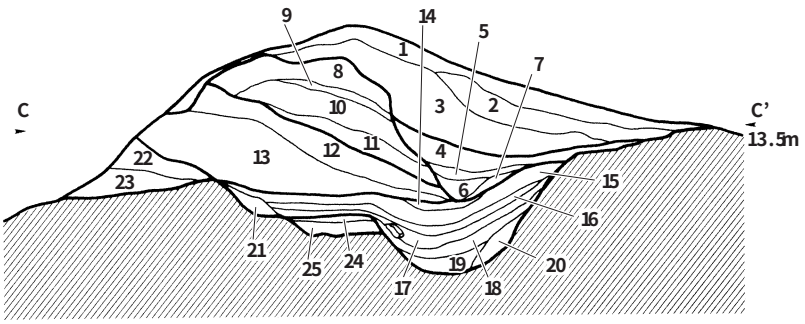


〈1Tr〉





〈5Tr〉



第28図　SX02土塁断面図

ＳＸ０２土塁・北部（4Tr）土層断面図土層注記

№	土　色		土　質	締　り	特　　徴
1	表土				
2	灰白色	2.5Y8/2	泥岩層	やや強い	破砕泥岩の積み上げ
3	褐色	10YR4/6	シルト	強い	泥岩粒極めて多量含む
4	褐色	7.5YR4/4	シルト	やや強い	炭化物微量含む
5	褐色	7.5YR4/3	シルト	強い	炭化物微量含む
6	褐色	10YR4/4	砂質シルト	やや弱い	泥岩粒少量含む
7	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質シルト	やや強い	泥岩粒やや多く含む
8	黒褐色	10YR3/2	シルト	やや弱い	橙色スコリア少量含む
9	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	極めて強い	褐色土ブロックを少量含む
10	暗褐色	10YR3/4	シルト	弱い	泥岩粒微量含む
11	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	やや強い	褐色土ブロックをやや多く含む
12	暗褐色	10YR3/3	シルト	やや弱い	褐色土を帯状に含む
13	黒褐色	10YR3/2	シルト	やや弱い	褐色土を少量含む
14	暗褐色	10YR3/3	シルト	やや強い	泥岩粒を少量含む
15	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	やや強い	褐色土ブロックをやや多く含む
16	暗褐色	10YR3/3	シルト	やや弱い	褐色土ブロックを少量含む
17	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	やや強い	泥岩塊を微量含む
18	黒褐色	10YR3/2	シルト	やや強い	褐色土との互層
19	褐色	7.5YR4/4	シルト	極めて強い	泥岩粒を少量含む
20	黒褐色	10YR3/1	シルト	やや強い	褐色土との互層
21	暗褐色	10YR3/3	シルト	強い	泥岩粒・褐色土ブロックを少量含む
22	黒褐色	10YR2/2	シルト	やや弱い	橙色スコリア少量含む
23	暗褐色	10YR3/3	シルト	やや弱い	黒褐色土との互層
24	黒褐色	10YR3/2	シルト	やや強い	褐色土との互層
25	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	やや弱い	炭化物 泥岩粒を微量含む
26	褐色	7.5YR4/4	シルト	やや強い	黒褐色土を多量含む
27	黒褐色	10YR3/3	シルト	弱い	橙色スコリア・炭化物を微量含む
28	褐色	10YR4/4	砂質シルト	やや強い	泥岩粒を多量含む褐色土との互層
29	にぶい黄褐色	10YR5/4	シルト	極めて強い	発泡したスコリアをやや多く含む
30	明黄褐色	10YR6/6	砂質シルト	極めて強い	灰白色火山灰層
31	褐色	7.5YR4/4	シルト	やや強い	炭化物微量含む
32	黄褐色	7.5YR5/6	シルト	強い	灰黄色シルトとの混合層
33	橙色	7.5YR6/8	シルト	極めて強い	石英をやや多く含む
34	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	やや強い	褐色土を帯状に含む。炭化物少量含む
35	黒褐色	10YR3/2	シルト	やや強い	泥岩粒を微量含む
36	暗褐色	7.5YR3/4	シルト	やや強い	泥岩粒を微量含む

ＳＸ０２土塁・中央部（1Tr）土層断面図土層注記

№	土　色		土　質	締　り	特　　徴
1	表土				
2	浅黄色	2.5Y8/4	シルト	やや強い	破砕泥岩主体層
3	黒褐色	10YR3/2	シルト	やや弱い	橙色スコリアを微量含む
4	褐灰色	10YR4/1	シルト	やや強い	黒褐色土との混合層
5	褐色	10YR4/6	シルト	やや弱い	泥岩粒・炭化物を微量含む
6	暗褐色	10YR3/4	シルト	弱い	泥岩粒・褐色土ブロックを少量含む
7	にぶい褐色	7.5YR5/3	砂質シルト	弱い	泥岩粒を少量含む
8	明褐色	7.5YR5/6	砂質シルト	やや強い	泥岩粒を微量含む
9	褐色	7.5YR4/4	砂質シルト	強い	泥岩粒を少量含む
10	灰褐色	7.5YR4/2	シルト	強い	泥岩粒を少量含む
11	褐色	7.5YR4/6	砂質シルト	極めて強い	泥岩粒を多量含む
12	褐色	7.5YR4/4	シルト	強い	黒褐色土を帯状に含む
13	黒褐色	7.5YR3/2	シルト	やや弱い	褐色砂質シルトを多く量含む
14	黒褐色	10YR3/2	シルト	強い	破砕泥岩との互層
15	暗褐色	7.5YR3/3	シルト	強い	褐色砂質シルトを少量含む
16	浅黄橙色	10YR8/3	シルト	やや強い	破砕泥岩主体層
17	にぶい黄褐色	10YR5/3	シルト	強い	破砕泥岩主体層
18	浅黄色	2.5Y7/4	シルト	やや強い	破砕泥岩主体層。人頭大の大塊含む
19	にぶい黄色	2.5Y6/4	シルト	やや強い	破砕泥岩主体層
20	浅黄色	2.5Y7/3	シルト	やや強い	破砕泥岩主体層
21	明赤褐色	5YR5/8	砂質シルト	やや強い	泥岩小塊を多量含む
22	浅黄色	2.5Y7/4	シルト	やや強い	破砕泥岩主体層
23	にぶい黄褐色	2.5Y5/3	シルト	強い	破砕泥岩主体層
24	浅黄色	2.5Y7/4	シルト	やや強い	破砕泥岩主体層
25	浅黄色	2.5Y7/4	シルト	やや弱い	破砕泥岩主体層
26	にぶい黄褐色	10YR5/4	シルト	極めて強い	破砕泥岩主体層
27	褐色	10YR4/4	シルト	やや強い	黄褐色砂質シルトとの互層
28	明黄褐色	10YR6/6	砂質シルト	弱い	褐色土ブロックを微量含む
29	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	やや強い	褐色土ブロックを多量含む
30	褐色	10YR4/4	シルト	極めて強い	褐色土ブロックをやや多く含む
31	にぶい黄褐色	10YR5/3	シルト	やや弱い	炭化物、泥岩粒を少量含む
32	灰白色	7.5YR8/2	灰	弱い	パウダー状の火山灰近似層
33	黄褐色	10YR5/6	シルト	極めて強い	黄褐色・明黄褐色シルトの互層
34	褐灰色	10YR4/1	シルト	強い	泥岩粒を極めて多量含む
35	暗褐色	10YR4/3	砂質シルト	やや弱い	泥岩粒を微量含む
36	褐色	7.5YR4/4	砂質シルト	極めて強い	褐灰色土ブロックを少量含む
37	暗褐色	10YR3/3	シルト	やや強い	黒褐色土ブロックを少量含む
38	褐色	7.5YR4/4	シルト	やや強い	黒褐色土ブロックをやや多く含む
39	黒褐色	7.5YR3/2	シルト	やや弱い	褐色土ブロックをやや多く含む
40	黒褐色	10YR2/3	シルト	やや弱い	泥岩粒を少量含む
41	黒褐色	10YR3/2	シルト	強い	泥岩粒を微量含む
42	明褐色	7.5YR5/8	シルト	やや弱い	黒褐色土を少量含む
43	暗褐色	10YR3/3	シルト	やや強い	破砕泥岩主体層
44	明褐色	7.5YR5/8	シルト	やや弱い	黒褐色土を少量含む
45	にぶい黄褐色	10YR5/4	シルト	強い	泥岩粒をやや多く含む
46	明黄褐色	10YR7/6	シルト	強い	破砕泥岩主体層
47	明黄褐色	10YR6/6	シルト	強い	泥岩粒をやや多く含む
48	暗褐色	10YR3/3	シルト	やや弱い	黄褐色土ブロックを微量含む
49	黒褐色	10YR2/1	シルト	強い	泥岩粒をやや多く含む
50	明黄褐色	10YR6/6	シルト	やや弱い	破砕泥岩主体層
51	黄橙色	10YR8/6	シルト	強い	泥岩粒を少量含む
52	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質シルト	極めて強い	泥岩粒を微量含む

ＳＸ０２土塁・南部（5Tr）土層断面図土層注記

№	土　色		土　質	締　り	特　　徴
1	褐色	10YR4/4	シルト	やや強い	泥岩粒をやや多く含む
2	褐色	10YR4/6	シルト	やや強い	破砕泥岩主体層
3	浅黄色	2.5Y7/4	シルト	やや強い	破砕泥岩主体層
4	黒褐色	10YR3/2	砂質シルト	やや弱い	褐色土ブロックを少量含む
5	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	やや弱い	褐色土ブロックをやや多く含む
6	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	強い	褐色土ブロックを少量含む
7	黒色	10YR2/1	シルト	弱い	橙色スコリアを微量含む
8	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	やや強い	褐色土ブロックを少量含む
9	明黄褐色	10YR6/6	粘質シルト	やや強い	褐色土ブロックを微量含む
10	暗褐色	10YR3/3	シルト	強い	褐色土ブロックをやや多く含む
11	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	やや弱い	褐色土・黒褐色土を帯状に含む
12	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト	やや強い	泥岩粒を多量含む
13	浅黄色	2.5Y7/2	シルト	やや弱い	破砕泥岩主体層
14	黒色	10YR2/1	シルト	弱い	橙色スコリアを微量含む
15	黒褐色	2.5Y3/2	シルト	やや弱い	泥岩粒を微量含む
16	黒色	10YR2/1	灰層	弱い	火山灰近似層。炭化物をやや多く含む
17	黒褐色	2.5Y3/1	シルト	弱い	褐色土ブロックと礫を少量含む
18	黒褐色	10YR3/1	シルト	弱い	褐色土ブロックをやや多く含む
19	黒色	10YR2/1	シルト	弱い	礫・泥岩粒を微量含む
20	明褐色	7.5YR5/6	シルト	強い	黒色土を帯状に含む
21	暗褐色	10YR3/3	シルト	やや強い	泥岩粒・褐色土ブロックを少量含む
22	暗褐色	10YR3/4	シルト	やや強い	褐色土との互層
23	浅黄色	2.5Y7/2	シルト	やや強い	破砕泥岩主体層
24	褐色	10YR4/6	シルト	極めて強い	褐色土ブロックを多量含む
25	黄褐色	10YR5/8	パミス	極めて強い	褐色土ブロック少量含む

築した土砂は、一部ではＳＸ０６ａ、ＳＫ０８などの掘削時に発生した土砂を用いたと考えられるが、破砕泥岩は土墨周辺では採掘できないことから、土墨構築にあたって他所から持ち込まれた可能性が高い。

遺物は第18図233の縄文土器が１点出土したのみであり、構築年代を示す遺物の出土は皆無である。

Ⅱ期土墨

Ⅰ期土墨の東側で、Ⅰ期土墨を被覆して構築される。土墨土層観察のために設けた１・２、５トレンチでⅡ期土墨の構築土はみとめられるが、低位面である北側平場、及び北側平場へ至る緩斜面に存在する３・４トレンチではⅡ期土墨構築土はみとめられていない。Ⅱ期土墨の規模は構築土が最も良好に遺存していた１トレンチでの土層観察から基底部7.9m、高さ2.7m、頂部幅1.7mを測る。Ⅱ期土墨構築土は東側では良好に残存しているものの、西側ではさほど良好に遺存していないことから、大半は西側へ崩落しているものと推測できる。土墨走方向の主軸は東側縁部を結ぶ線で推定が可能であり、30～38°東傾する。

Ⅱ期土墨の構築面について見てみると、まずⅠ期土墨構築時に掘削されたＳＸ０６ａ、ＳＫ０８など土取に関連する遺構群、及びこれらに流入したⅠ期土墨崩落土を、自然堆積及び褐色シルトを用いた人為的埋め立てによって形成された小規模な平場状遺構が一時期存在したことが判断できる（ＳＸ０６ｂ）。この平坦面は火山灰に近似した灰白色シルト（1Tr　32層）によって覆われており、さらに灰黄褐色シルトによって自然堆積した後に、この上面でⅡ期土墨構築土が積み上げられている。構築方法は比較的良好な状態がみられる１トレンチでの土層観察を参照すると、Ⅰ期土墨の東側で地山面の傾斜とは逆位に貼り増しを行なった後、上部から側縁部にかけて被覆している。なお、ここで構築土として用いられた土砂の大部分は破砕泥岩であるが、Ⅰ期土墨同様にそれぞれの締まりは概して強いものではない。

遺物は出土していない。

Ⅲ期土墨

Ⅱ期土墨の東側で、Ⅱ期土墨を被覆して構築される。土墨土層観察のために設けた全てのトレンチでⅢ期土墨の構築土はみとめられる。Ⅲ期土墨の規模は構築土が良好に遺存していた１・４・５トレンチでの土層観察から基底部4.1～7.9m、高さ1.9～3.6m、頂部幅1.9～2.2mを測る。Ⅲ期土墨構築土は東側では良好に残存しているものの、前出のⅠ・Ⅱ期土墨と同様に西側ではさほど良好に遺存していないことから、大半は西側へ崩落しているものと推測できる。土墨走方向の主軸は頂部中心点を結ぶ線で推定が可能であり、38°東傾する。

Ⅲ期土墨の構築面について見てみると、Ⅱ期土墨が存在する１・５トレンチではⅡ期土墨に直接貼り増しを行なっている。これに対しⅡ期土墨が存在しない４トレンチでは、Ⅲ期土墨の構築面としてⅠ期土墨構築後に堆積した灰白色シルト層（前出の火山灰に近似するものと同様）と自然堆積である灰黄褐色シルト（1Tr　29層）の上面であることが判断できる。なお、ここで構

築土として用いられた土砂は、締まりの弱い黒褐色・赤褐色シルトを主体としていることは１～５トレンチの全てで共通してみとめられたが、高位面に位置し、かつⅡ期土塁が存在する１・５トレンチでは前出の通りⅡ期土塁へ貼り増しを行なうことによって構築していることに対し、４トレンチではまず東側縁部において構築土を一旦積み上げた後にⅠ期土塁の東側で斜面の傾斜とは逆位に貼り増しを行なっている。なお、Ⅲ期土塁を確認した大半のトレンチではⅡ期土塁の崩落土が明瞭にみとめられないことから、Ⅱ期土塁とⅢ期土塁の構築時期はほとんど時間差が無いものと考えられる。

遺物は第36図５の石鉢が１点出土した。この石鉢の内面全体では使用時の摩滅痕がみられる。外面には口縁部付近で煤が付着している。なお、この石鉢以外に構築土中からは「つぶて石」とも考えられる拳大の川原石が20～30点ほど出土している。

Ⅳ期土塁

Ⅲ期土塁の東側で構築される。２・３トレンチ以外のトレンチでⅣ期土塁の構築土はみとめられる。Ⅳ期土塁の規模は構築土が良好に遺存していた１・４・５トレンチでの土層観察から基底部８～9.3m、高さ2.2～3.7m、頂部幅0.5～2.1mを測る。Ⅳ期土塁構築土は東側では良好に残存しているものの、前出のⅠ～Ⅲ期土塁と同様に西側ではさほど良好に遺存していないことから、大半は西側へ崩落しているものと推測できる。土塁走方向の主軸は頂部中心点を結ぶ線で推定が可能であり、32°東傾する。

Ⅳ期土塁の構築面について見てみると、いずれもⅢ期土塁の崩落土の上に貼り増している。このうち、低位面である北側平場に位置する土塁は、戦時中の開墾によって大きく削平を受けるものの、Ⅲ期土塁の崩落土の上にまず北側平場を形成する多量の破砕泥岩を用いて埋め立て・整地を行なっていることが確認されており、Ⅳ期土塁構築土はこの整地層の上にから貼り増していた。なお、ここで構築土として用いられた土砂の大部分は破砕泥岩であるが、Ⅰ期土塁同様にそれぞれの締まりは概して強いものではない。

遺物は構築土中からⅢ期土塁同様に「つぶて石」と考えられる拳大の川原石が10～20点ほど出土しているが、構築年代を示す遺物の出土は皆無である。

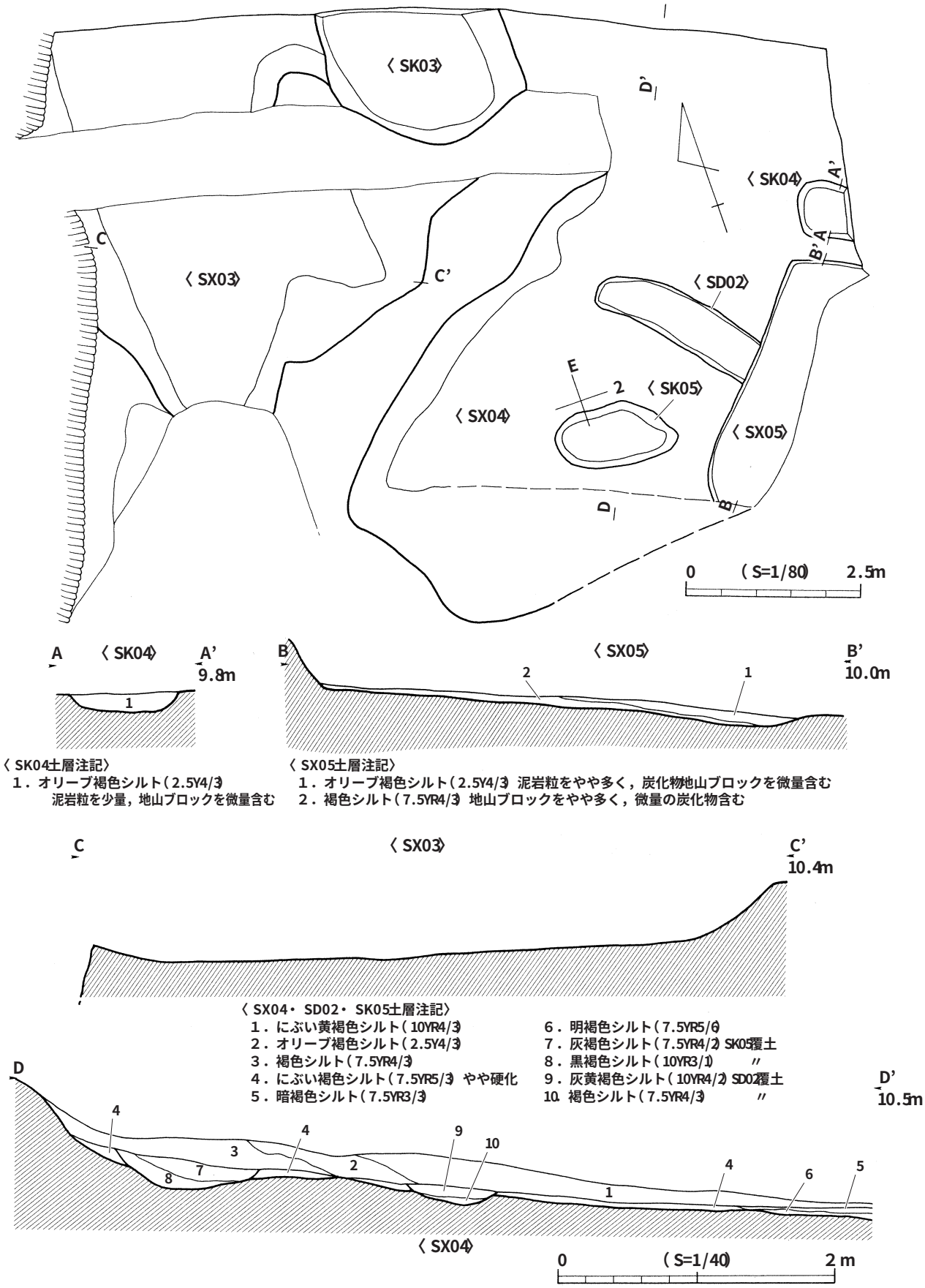
Ｂ．大型土坑（土取坑）

北側平場及びＳＸ０２土塁周辺では、大規模な地形改変の痕跡が確認された。これらはいずれも土塁構築時における丘陵頂部西側縁辺の整地及び土取坑と考えられる。

ＳＸ０３土取坑（第29・30図）

北側平場北西部に位置し、ＳＸ０２土塁下部より検出された。Ⅰ期土塁構築時に関連すると考えられる土取坑である。大部分が後世の掘削によって失われているため全体形状は不明であるが、確認できた範囲内では不定形を呈する。ＳＫ０６と重複関係にあり、これより古い。確認面からの深さは南東部で約42cmを測る。遺構底面は若干北西へ傾斜するものの、ほぼ平坦

第29図　SX02土塁下部の遺構群



第30図　北側平場遺構配置図（整地層下部）

である。堆積土は褐色シルトを主体として３層に分層でき、Ｉ期土墨崩落土を含めると全てが自然堆積である。

遺物は出土していない。

ＳＸ０４土取坑（第 29・30図）

北側平場東部に位置する。整地層下よりの検出であり、遺構の性格は土墨構築時に関連する土取坑とも考えられるが、定かではない。大部分が後世の掘削によって失われているため全体形状は不明であるが、確認できた範囲内では不定形を呈するものと考えられる。ＳＤ０２、ＳＫ０４・０５、及びＳＸ０５と重複関係にあるが、これらは全て本址の底面で掘り込まれることから、これらより古い。確認面からの深さは南部で約 86cmを測る。遺構底面は若干北へ傾斜するものの、ほぼ平坦である。堆積土は褐色シルトを主体として６層に分層でき、全てが人為的に埋め戻されている。なお、ＳＤ０２、ＳＫ０４など他遺構の掘り込み面である４・５層はやや硬化している。

遺物は第 36図９の施釉陶器皿が４層直上で出土している。

ＳＸ０５土取坑（第 29・30図）

北側平場東部に位置し、整地層下より検出された性格不明遺構である。大部分が後世の掘削によって失われているため全体形状は不明であるが、確認できた範囲内では方形乃至長方形を呈するものと考えられる。ＳＸ０４、ＳＤ０２と重複関係にあり、ＳＸ０４より新しく、ＳＤ０２より古い。規模は西側の一辺が 3.7m、確認面からの深さは約５ cmを測る。堆積土は２層に分層でき、全て人為的埋土である。尚、１・２層とも炭化物を含んでいる。

遺物は出土していない。

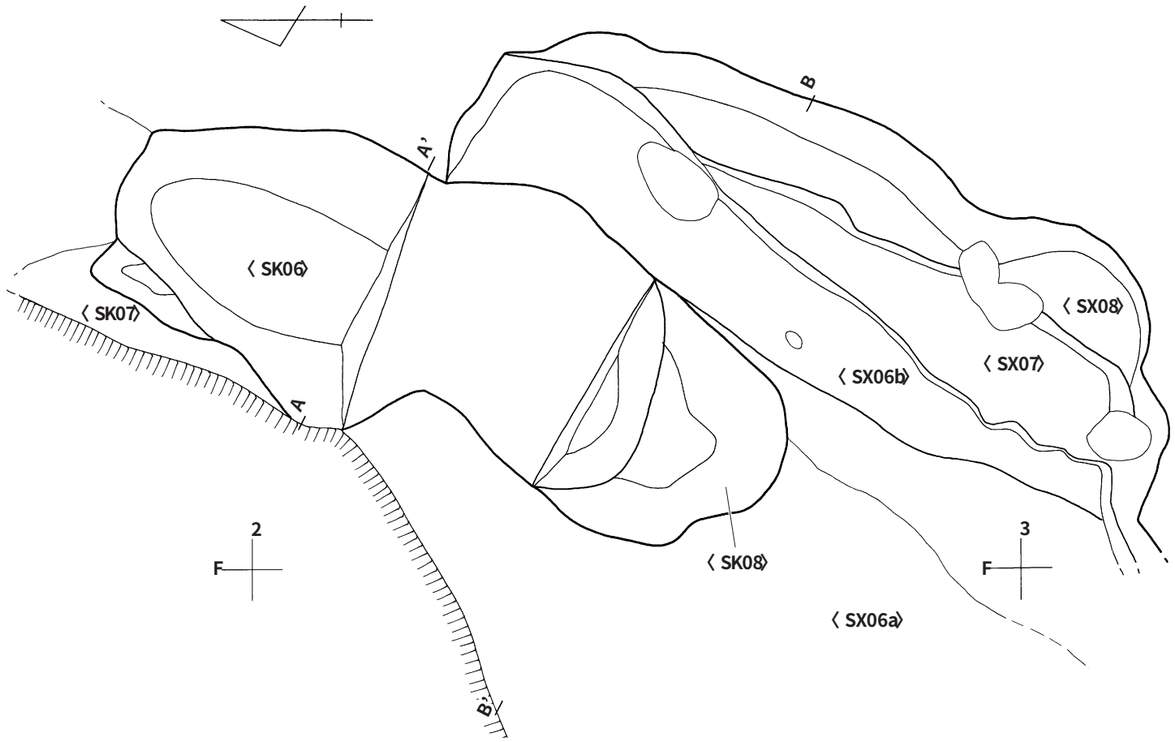
ＳＸ０６ａ土取坑（第 29・31図）

調査区北西部であるＦ－３グリッド周辺に位置する。ＳＸ０２土墨下部より検出された。Ｉ期土墨構築時に関連すると考えられる土取坑である。丘陵頂部側である東側では明瞭な掘り込みは確認できるが、遺構底面はほぼ平坦に掘削されており、斜面部である西側では掘り込みはみとめられない。このことから本址は単なる土取坑ではなく、土墨構築時に不規則な形状であった丘陵頂部縁辺部で安定した土墨基底部を確保するために削平したとも考えられる。また本址はＳＫ０６・０８、ＳＸ０６ｂと重複関係にあり、ＳＸ０６ｂより古いが、ＳＫ０８よりは新しい。なお、ＳＫ０６との新旧関係は不明である。堆積土はＩ期土墨崩落土を除くと概ね自然堆積（21層）と人為的埋土（20層）の２層に分層できる。

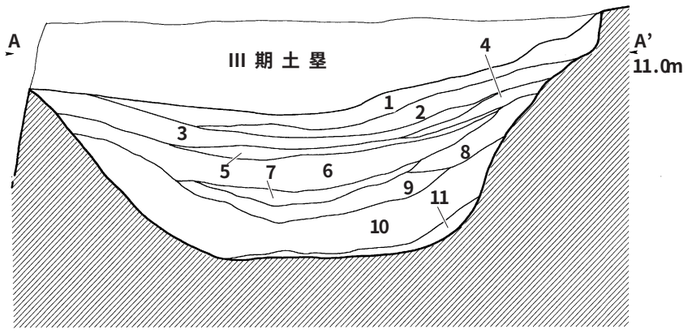
遺物は出土していない。

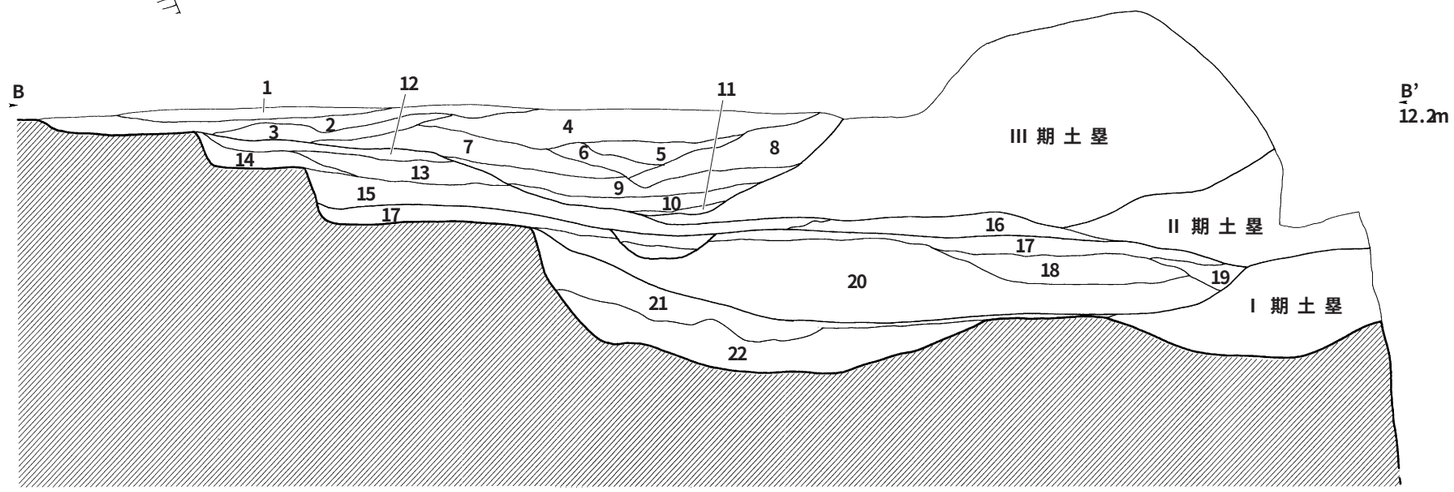
ＳＸ０６ｂ土取坑（第 29・31図）

調査区北西部であるＦ－３グリッド周辺に位置する。ＳＸ０２土墨下部より検出された。本



0 (S=1/80) 5 m





〈SK06土層注記〉

1 灰褐色砂質シルト（7.5YR4/2） 地山ブロックをやや多く含む
2 灰黄褐色シルト（10YR4/2） 地山ブロックを少量含む
3 浅黄色シルト（2.5Y7/3） 拳大の泥岩塊主体層
4 にぶい褐色砂質シルト（7.5YR5/3） 泥岩粒を少量含む
5 黒色灰層（10YR3/1） 火山灰層，やや粒子は粗い
6 にぶい黄褐色シルト（10YR5/3） 地山ブロックをやや多く含む
7 黒色炭層（10YR2/1） 炭化物主体層
8 灰黄褐色シルト（10YR5/2） 地山ブロック 泥岩粒を少量，炭化物微量含む
9 褐色シルト（7.5YR4/3） 地山ブロックを多量，炭化物微量含む
10 にぶい褐色シルト（7.5YR5/3） やや砂質感が強い，地山ブロックを多量含む
11 黒色炭層（10YR2/1） 炭化物主体層

〈SK08，SX06・07・08土層注記〉

1 明褐色シルト（7.5YR5/6） 締まり強い，炭化物少量含む
2 明褐色シルト（7.5YR5/6） やや砂質感が強い
3 黒褐色シルト（7.5YR3/2） 炭を多く，地山ブロックを少量含む
4 褐色シルト（7.5YR4/3） 泥岩粒少量，炭化物微量含む
5 暗褐色シルト（7.5YR3/3） 地山粒少量含む
6 黒褐色シルト（7.5YR3/2） 褐灰色土をシミ状に含む
7 明褐色砂質シルト（7.5YR5/6） 締まり強い，褐色ブロックを微量含む
8 黒褐色シルト（7.5YR3/2） 褐色ブロックを少量，炭化物微量含む
9 黒褐色シルト（7.5YR3/2） 締まりやや弱い，褐色ブロック多量含む
10 褐色シルト（7.5YR4/4） 明褐色シルトブロックを少量含む
11 黒褐色シルト（7.5YR3/1） 締まり弱い，褐色シルトブロック，泥岩粒微量含む
12 にぶい褐色シルト（7.5YR5/3） 締まり極めて強い，上部に暗褐色シルトを帯状に堆積
13 明褐色シルト（7.5YR5/6） 締まり極めて強い，暗褐色土をブロック状に含む
14 褐色シルト（7.5YR4/6） 締まり強い，暗褐色シルトブロックを少量含む
15 褐色シルト（7.5YR4/4） 締まりやや弱い，褐色シルトをシミ状に多く含む
16 明褐灰色シルト（7.5YR7/2） 泥岩粒主体層
17 褐色シルト（7.5YR4/6） 締まり極めて強い，整地層
18 明褐色シルト（7.5YR5/6） 明黄褐色シルトをシミ状にやや多く含む
19 暗褐色シルト（10YR3/4） 5㎝ リ大の泥岩粒少量含む
20 明褐色シルト（7.5YR5/6） 明黄褐色シルトブロックを少量含む
21 暗褐色シルト（10YR3/3） 褐色シルトをシミ状にやや多く含む
22 明褐色シルト（7.5YR5/6） 明黄褐色砂質シルトブロックを多量含む

0 (S=1/40) 2 m

第31図　SK06・07・08土坑，SX06・07・08大型土坑

址はＩ期土塁構築時に土取及び整地坑として掘削されたＳＸ０６ａを人為的に埋め立てて、また一部では拡張して平坦面を形成しており、小規模な平場として機能していたと考えられる。ＳＫ１０・１１・１２、ＳＸ０６ａ・０７と重複関係にあり、ＳＸ０６ａより新しいが、ＳＫ１０・１１・１２、ＳＸ０７よりは古い。本址は掘削後、部分的に締まりの強い褐色シルト（17層）を用いて底面を平坦に整えており、ＳＫ１０・１１など焼土を伴う遺構が作られる。なお、本址はＩ期土塁に伴うものと考えられるが、この東側裾部を埋め立ているため、土塁と本址底面との比高差は約 90cmを測り（ＳＸ０２土塁１トレンチ）、非常に低いものとなっている。堆積土は全て人為的埋土である。

遺物は出土していない。

ＳＸ０７土取坑（第 29・31図）

調査区北西部であるＦ－３グリッド周辺に位置する。ＳＸ０２土塁下部より検出された。本址はⅢ期土塁構築時に土取坑と考えられるが、ＳＸ０６ｂとほぼ同位置に存在することから土塁に付帯した小規模な平場、もしくは竪穴遺構として機能していた可能性もある。ＳＸ０６ｂ・０８などと重複関係にあり、ＳＸ０６ｂより新しいが、ＳＸ０８よりは古い。東側平場からの深さは 25cmを測る。堆積土は全て人為的埋土である。

遺物は出土していない。

ＳＸ０８土取坑（第 29・31図）

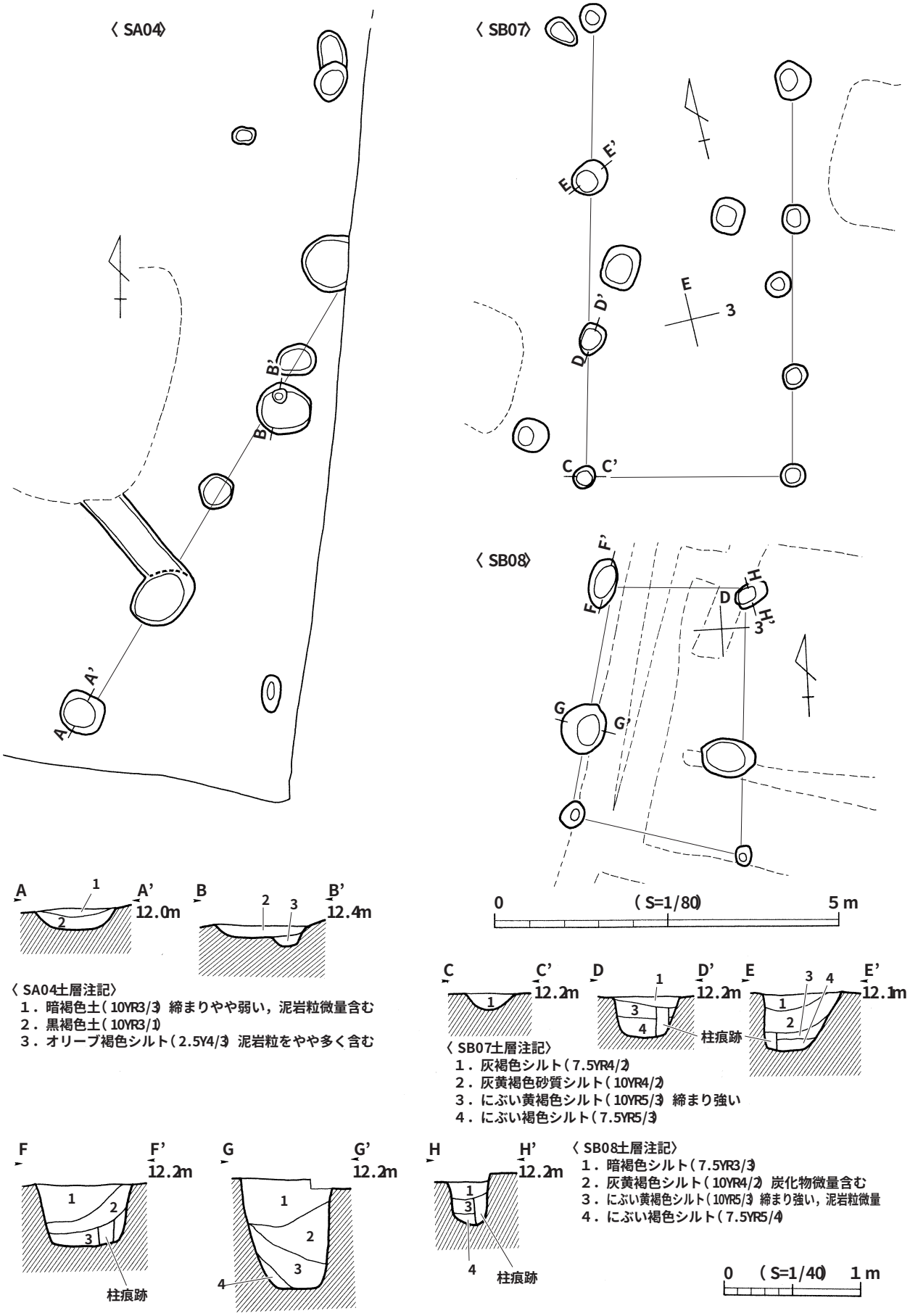
調査区北西部であるＦ－３グリッド周辺に位置する。ＳＸ０６ａ～０７同様、ＳＸ０２土塁下部より検出された。本址の堆積土にはⅣ期土塁崩落土が含まれることから、Ⅳ期土塁構築時の土取坑と考えられるが、ＳＸ０６ｂ・０７とほぼ同位置に存在することから土塁に付帯した小規模な平場、もしくは竪穴遺構として機能していた可能性もある。ＳＸ０７などと重複関係にあり、これより新しい。東側平場からの深さは 10cmを測る。堆積土は全てⅣ期土塁崩落土を含めた人為的埋土である。

遺物は出土していない。

Ｃ．掘立柱建物跡

本調査地点で発見された掘立柱建物跡は３棟である。これらの柱穴よりは一切遺物の出土をみていないが、柱穴の形状、規模等から概ね中・近世の所産であると考えている。なお、今回提示した掘立柱建物跡は柱間寸法が不揃いであったり、平面形状では歪な様相を呈しているものもあり、「掘立柱建物」として取り扱うことについては疑問が残る。しかしながら、本調査地点における柱穴分布の様相を考慮した上で敢えて建物跡として積極的に捉え、提示することにした。

ＳＢ０７掘立柱建物跡（第 32図）



第32図　SA04柱列，SB07・08掘立柱建物跡

東側平場中央西部のＥ－３グリッドを中心に位置する南北３間以上、東西１間の南北棟である。平面規模は西側柱列で桁行総長6.8m、南側柱列で梁行総長3.0m、推定建物面積は20.4㎡を測る。主軸方位はN－14°－E。柱穴は８穴が確認でき、３ヶ所で柱痕跡がみとめられたうちの一つでは柱材の抜取りが行われている。柱穴の規模は長軸38～52cm、短軸30～48cm、確認面からの深さは12～42cmほどであり、平面形は楕円形が主体である。柱痕跡は径９cmほどで、円形乃至楕円形である。掘方埋土は褐・灰黄褐色のシルトを主体とし、地山ブロックを若干含む。

遺物は出土していない。

ＳＢ０８掘立柱建物跡（第32図）

東側平場中央部のＤ－３グリッドを中心に位置する南北２間、東西１間の南北棟である。平面規模は西側柱列で桁行総長3.5m、北側柱列で梁行総長2.0m、推定建物面積は7.0㎡を測る。主軸方位はN－10°－E。柱穴は６穴が確認でき、２ヶ所で柱痕跡がみとめられたうちの一つでは柱材の抜取りが行なわれている。柱穴の規模は長軸28～82cm、短軸24～64cm、確認面からの深さは22～80cmほどであり、平面形は楕円形が主体である。柱痕跡は径９cmほどで、円形乃至楕円形である。掘方埋土は暗褐・灰黄褐色のシルトを主体とし、地山ブロックを若干含む。

遺物は出土していない。

ＳＢ０９掘立柱建物跡（第33図）

南西平場南西部のＦ－４グリッドを中心に位置する南北４間、東西１間の南北棟である。平面規模は西側柱列で桁行総長4.0m、北側柱列で梁行総長2.2m、推定建物面積は9.0㎡を測る。主軸方位はN－34°－E。柱穴は９穴が確認でき、５ヶ所で柱痕跡がみとめられ、このうちの２ヶ所では柱材の沈下がみとめられた。柱穴の規模は長軸40～58cm、短軸18～46cm、確認面からの深さは６～18cmほどであり、平面形は楕円形が主体である。柱痕跡は径９cmほどで、円形乃至楕円形である。掘方埋土は暗褐・黒褐色のシルトを主体とし、泥岩ブロックを若干含む。

遺物は出土していない。

Ｄ．柱列

本調査地点で発見された柱列は２列である。これらの柱穴よりは一切遺物の出土をみていないが、柱穴の形状、規模等から概ね中・近世の所産であると考えている。なお、柱列についても柱間寸法が不揃いなものもあるが、本調査地点における柱穴分布の様相を考慮した上で敢えて柱列として積極的に捉え、提示することにした。

ＳＡ０４柱列跡（第32図）

東側平場東部のＡ－５グリッドに位置する柱列である。確認した柱列の規模は南北方向３間（総長７.７m）で、柱穴は４穴であり、１ヶ所で柱痕跡がみられる。柱穴の規模は長軸 62～ 100cm、短軸 58～ 78cm、確認面からの深さは８～ 20cmほどであり、平面形は楕円形である。柱痕跡は径９ cmほどの円形である。主軸方位はＥ－ 30°－Ｎ。掘方埋土は黒褐・暗褐色などのシルトで、泥岩粒をやや多く含む。

遺物は出土していない。

ＳＡ０５柱列跡（第 33図）

南西平場南西部のＦ－４グリッド周辺に位置する柱列である。確認した柱列の規模は南北方向４間（総長 6.0m）で、柱穴は５穴であり、１ヶ所で柱痕跡がみられる。柱穴の規模は長軸 18～ 42cm、短軸 18～ 20cm、確認面からの深さは５～ 22cmほどであり、平面形は円形乃至楕円形である。柱痕跡は径９ cmほどの円形である。主軸方位はＥ－ 35°－Ｎ。掘方埋土は黒褐・暗褐色などのシルトで、泥岩粒・炭化物をやや多く含む。なお、本址は主軸方位が近接するＳＢ０９とほぼ同様の数値を示すことから、ＳＢ０９に付随した施設と考えられる。

遺物は出土していない。

Ｅ．溝状遺構

溝状遺構は４条確認されている。これらは北側平場と南西平場に位置するものであり、東側平場では確認されていない。これらの性格については全容が明らかでないものもあり判断は困難だが、ＳＤ０３・０４は東側平場から北側平場にかけての傾斜面裾部に存在することから何らかの区画的な性格を帯びていた可能性がある。

ＳＤ０２溝状遺構（第 30図）

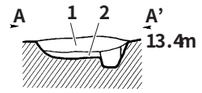
北側平場整地層下のＳＸ０４内に位置する溝状遺構であり、ＳＸ０５に切られるものの約 2.5mに渡って検出した。主軸方位はＮ－ 47°－Ｗ。規模は上幅 68cm、下幅 34～ 56cm、掘り込み面よりの深さは 20cmを測る。断面形状は浅い皿状を呈し、底面レベルは概ね西側へ緩やかに傾斜している。堆積土はオリーブ褐色のシルトで、自然堆積である。

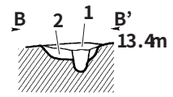
遺物は出土していない。

ＳＤ０３溝状遺構（第 34図）

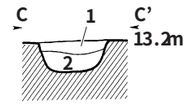
北側平場整地面上に位置する溝状遺構であり、約 1.7mに渡って検出した。主軸方位はＮ－ 50°－Ｅ。規模は上幅 42cm、下幅 38cm、確認面よりの深さは 16cmを測る。断面形状は箱型を呈し、底面レベルは概ね西側へ緩やかに傾斜している。堆積土は暗褐色のシルトで、自然堆積である。

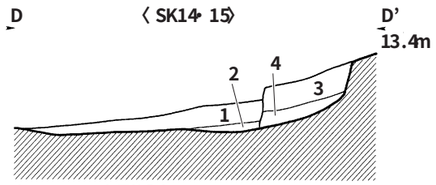
遺物は出土していない。



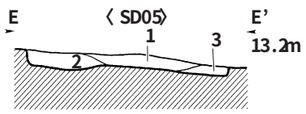


〈SB09土層注記〉
1．暗褐色土（10YR3/3）
2．黒褐色土（10YR3/1）
泥岩ブロックやや多く含む

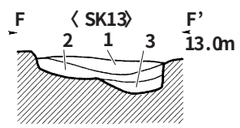




〈SK14・15土層注記〉
1．灰褐色シルト（7.5YR4/2）
2．暗褐色シルト（10YR3/3）
やや多量の泥岩粒含む
3．にぶい褐色シルト（7.5YR5/3）
4．褐色シルト（7.5YR4/3）
少量の泥岩粒を含む



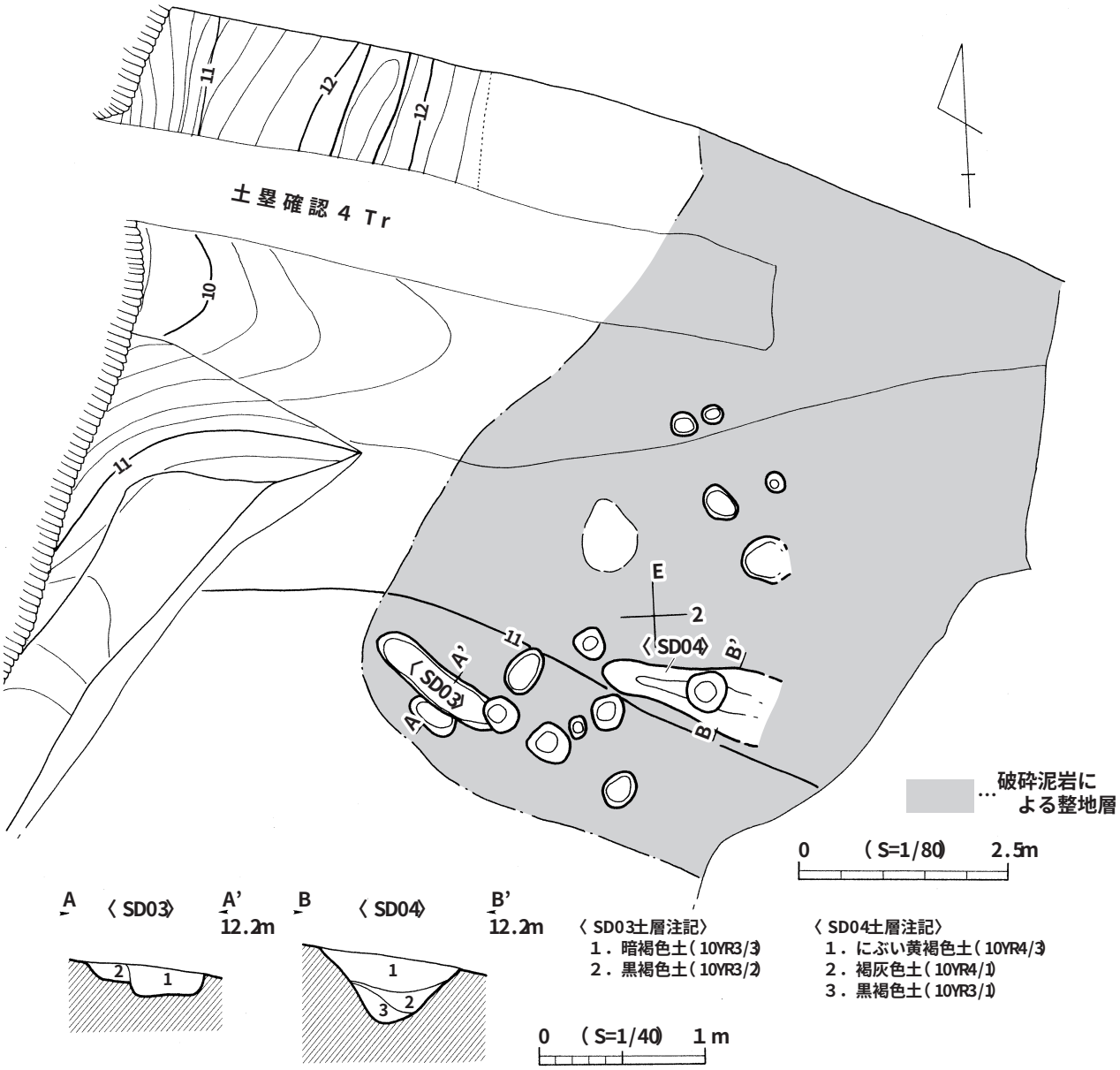
〈SD05土層注記〉
1．黒褐色シルト（10YR3/2）炭化物をやや多く含む
2．にぶい黄褐色シルト（7.5YR5/3）拳大の泥岩塊を含む
3．灰黄褐色シルト（10YR4/2）



〈SK13土層注記〉
1．褐色シルト（7.5YR4/3）極微量の炭化物を含む
2．黄褐色シルト（10YR5/6）
3．にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）微量の炭化物含む

0 (S=1/40) 1m

第33図　南西平場遺構配置図



第34図　北側平場遺構配置図(整地層上面)

ＳＤ０４溝状遺構(第34図)

北側平場整地面上に位置する溝状遺構であり、約1.8mに渡って検出したが、東側ではＳＸ０４掘り下げ時に重機を使用したことにより失われている。主軸方位はN－73°－E、規模は上幅42～84cm、下幅22cm、確認面よりの深さは40cmを測る。断面形状はやや緩やかなV字状を呈し、底面レベルは概ね西側へ緩やかに傾斜している。堆積土は黄褐・褐灰・黒褐色のシルトで、自然堆積である。

遺物は出土していない。

ＳＤ０５溝状遺構(第33図)

南西平場南西部のＦ－４グリッドに位置する溝状遺構であり、約5.1mに渡って検出したが、南側では立木が存在したことによって撹乱を受け失われている。主軸方位はN－60°－E、規模は上幅72～116cm、下幅64～108cm、確認面よりの深さは８～10cmを測る。断面形状はや

や不規則な箱状を呈し、底面レベルは概ね南側へ緩やかに傾斜している。堆積土は褐・黄褐色のシルトで、自然堆積である。

遺物は第36図１の青磁・盤と２の瀬戸・天目釉小壺が出土している。

Ｆ．土坑

本調査地点で土坑と判断した遺構は16基である。これらは東側平場を除いた北側、及び南西平場で確認された他、ＳＸ０２土塁下部からも発見されている。このうち大型の土坑はＳＸ０２土塁下部に多く位置することから土取坑であった可能性も考慮できるが、前述のＳＸ０３～０８とは形状・規模とも明らかに異なるため、本節で詳述する。なお、ＳＫ１０は壁面や覆土の観察から炉のように機能していた可能性が高い。

ＳＫ０３土坑（第30図）

北側平場最北部に位置する。ＳＸ０２及び整地層下からの検出である。調査区外へ展開するため平面形状は不明であるが、規模は短軸2.64mを測る。掘り込み面からの深さは約35cmであり、断面形状はやや緩やかな逆台形を呈する。堆積土は灰黄褐色シルトを主体として３層に分層でき、全て人為的埋土である。いずれの層にも炭化物がやや多く含まれる。

遺物は出土していない。

ＳＫ０４土坑（第30図）

北側平場東部に位置する。整地層下のＳＸ０４内からの検出である。調査区外へ展開するため平面形状は不明であるが、規模は短軸76cmを測る。掘り込み面からの深さは約16cmであり、断面形状は浅い皿状を呈する。堆積土はオリーブ褐色シルトであり、人為的埋土である。

遺物は出土していない。

ＳＫ０５土坑（第30図）

北側平場最北部に位置する。整地層下のＳＸ０４内からの検出である。平面形状は不定長円形であり、規模は長軸180cm、短軸90mを測る。掘り込み面からの深さは約30cmであり、断面形状は浅い皿状を呈する。堆積土は明褐・灰褐色シルトの２層に分層でき、全て人為的埋土である。いずれの層にも炭化物がやや多く含まれる。

遺物は出土していない。

ＳＫ０６土坑（第31図）

Ｅ－２グリッドに位置する。ＳＸ０２下部からの検出である。平面形状楕円形であり、規模は長軸754cm、短軸356cmを測る。掘り込み面からの深さは約150cmであり、断面形状はやや緩やかな逆台形を呈する。堆積土は黒褐・褐・灰黄褐色シルトなどを主体として11層に分層でき、４～11層は自然堆積であり、１～３層は人為的埋土である。なお、５層には蔵王山噴

火に起因すると考えられる火山灰が、最下層の11層には炭化物が多く含まれている。本址はＳＫ０８と規模的に共通し、またⅢ期土塁構築土が上面で貼り増しを行なっていることから、Ⅰ期土塁構築時に伴う土取坑と考えられる。

遺物は出土していない。

ＳＫ０７土坑（第31図）

Ｅ－２グリッドに位置する。ＳＸ０２下部からの検出である。ＳＫ０６に切られるため平面形状・規模とも不明な点が多い。確認面からの深さは約18cmであり、断面形状は浅い皿状を呈する。堆積土は褐・灰黄褐色シルトなどを主体として３層に分層でき、全て自然堆積でである。本址の上面でもＳＫ０６と同様にⅢ期土塁構築土が上面で貼り増しを行なっていることから、Ⅰ期土塁構築時に伴う土取坑と考えられる。

遺物は出土していない。

ＳＫ０８土坑（第31図）

Ｅ－２グリッドに位置する。ＳＸ０２下部からの検出である。ＳＫ０６に切られるため平面形状・規模とも不明な点が多いが、短軸306mを測る。掘り込み面からの深さは約170cmであり、断面形状はやや緩やかな逆台形を呈する。堆積土は褐・灰黄褐色シルトの２層に分層でき、全て自然堆積である。本址はＳＫ０６と同様にⅠ期土塁東側裾部を埋め立てて小規模な平場を形成するＳＸ０６ｂにも先行することから、Ⅰ期土塁構築時に伴う土取坑と考えられる。

遺物は出土していない。

ＳＫ０９土坑（第29図）

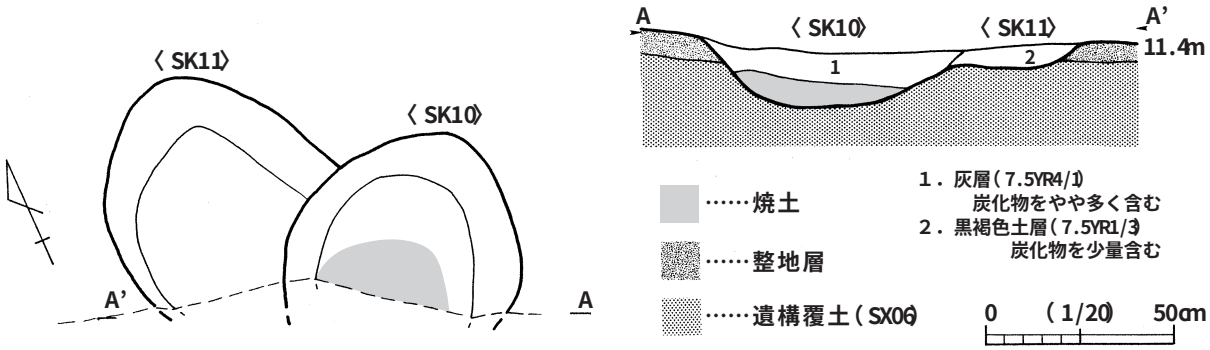
Ｆ－３グリッドに位置する。ＳＸ０２下部からの検出である。平面形状は長円形であり、規模は長軸206cm、短軸148mを測る。掘り込み面からの深さは約132cmであり、断面形状はＵ字状を呈する。堆積土は黒褐色シルトを主体として４層に分層でき、全て自然堆積である。いずれの層でも褐色土をブロック状にやや多く含む。

遺物は出土していない。

ＳＫ１０土坑（第35図）

Ｅ－２グリッドに位置する焼成遺構である。ＳＸ０２下部に存在するＳＸ０６ｂ上面からの検出である。ＳＫ１１と重複関係にあり、本址の方が新しい。土塁土層確認のために設定した確認トレンチ２によって本址はその南半部を失うため、平面形状・規模については不明な点があるが、短軸60mを測る。掘り込み面からの深さは約20cmであり、断面形状は浅い皿状を呈する。堆積土は灰層と焼土層の２層に分層であり、壁面ではやや弱く、底面では強く赤変していた。

遺物は出土していない。



第35図　SK10・11

ＳＫ１１土坑（第35図）

Ｅ－２グリッドに位置する。ＳＸ０２下部に存在するＳＸ０６ｂ上面からの検出である。ＳＫ１０と重複関係にあり、本址の方が古い。ＳＫ１０同様に確認トレンチ２によって本址はその南半部を失うため、平面形状・規模については不明な点があるが、短軸56cmを測る。掘り込み面からの深さは約16cmであり、断面形状は浅い皿状を呈する。堆積土は炭化物がやや多く含まれる黒褐色シルトによって構成される。

遺物は出土していない。

ＳＫ１２土坑（第29図）

Ｅ－２グリッドに位置する。ＳＸ０２下部に存在するＳＸ０６ｂ上面からの検出である。平面形状は不定長円形であり、規模は長軸126cm、短軸66cmを測る。掘り込み面からの深さは約55cmであり、断面形状は浅い皿状を呈する。堆積土は明褐・灰褐色シルトの２層に分層でき、全て人為的埋土である。いずれの層にも泥岩粒がやや多く、炭化物が少量含まれる。

遺物は出土していない。

ＳＫ１３土坑（第33図）

南西平場のＥ－４グリッドに存在する高まりの南裾部に位置する。ＳＫ１４と重複関係にあり、本址の方が新しい。平面形状は長円形であり、規模は長軸92cm、短軸76cmを測る。掘り込み面からの深さは約14～20cmであり、断面形状は東側がやや下がる不定形を呈する。堆積土は褐・黄褐色シルトなどの３層に分層でき、全て人為的埋土である。１・３層では炭化物を微量含む。

遺物は出土していない。

ＳＫ１４土坑（第33図）

南西平場のＥ－４グリッドに存在する高まりの南裾部に位置する。ＳＫ１３・１５と重複関係にあり、前者より古く、後者より新しい。平面形状は不定長円形であり、規模は長軸180cm、短軸144cmを測る。掘り込み面からの深さは約28cmであり、断面形状は浅い皿状を呈する。堆積土は暗褐・灰褐色シルトの２層に分層でき、全て自然堆積である。２層では泥岩粒をやや

多く含む。

遺物は出土していない。

ＳＫ１５土坑（第 33図）

南西平場のＥ－４グリッドに存在する高まりの南裾部に位置する。ＳＫ１４と重複関係にあり、本址の方が古い。南半部をＳＫ１４に切られるため平面形状・規模とも不明な点が多いが、掘り込み面からの深さは約 25cmである。堆積土は褐色シルトを主体とする２層に分層でき、全て自然堆積である。４層は泥岩粒を微量含む。

遺物は出土していない。

ＳＫ１６土坑（第 33図）

南西平場のＥ－４グリッドに存在する高まりの南裾部に位置する。平面形状は楕円形であり、規模は長軸 116cm、短軸 110cmを測る。掘り込み面からの深さは約 18cmであり、断面形状は浅い皿状を呈する。堆積土は暗褐シルトを主体とする２層に分層でき、全て自然堆積である。

遺物は第 36図４の瓦質土器の擂鉢が１点出土している。

遺構外出土遺物（中世～近世）（第 36図）

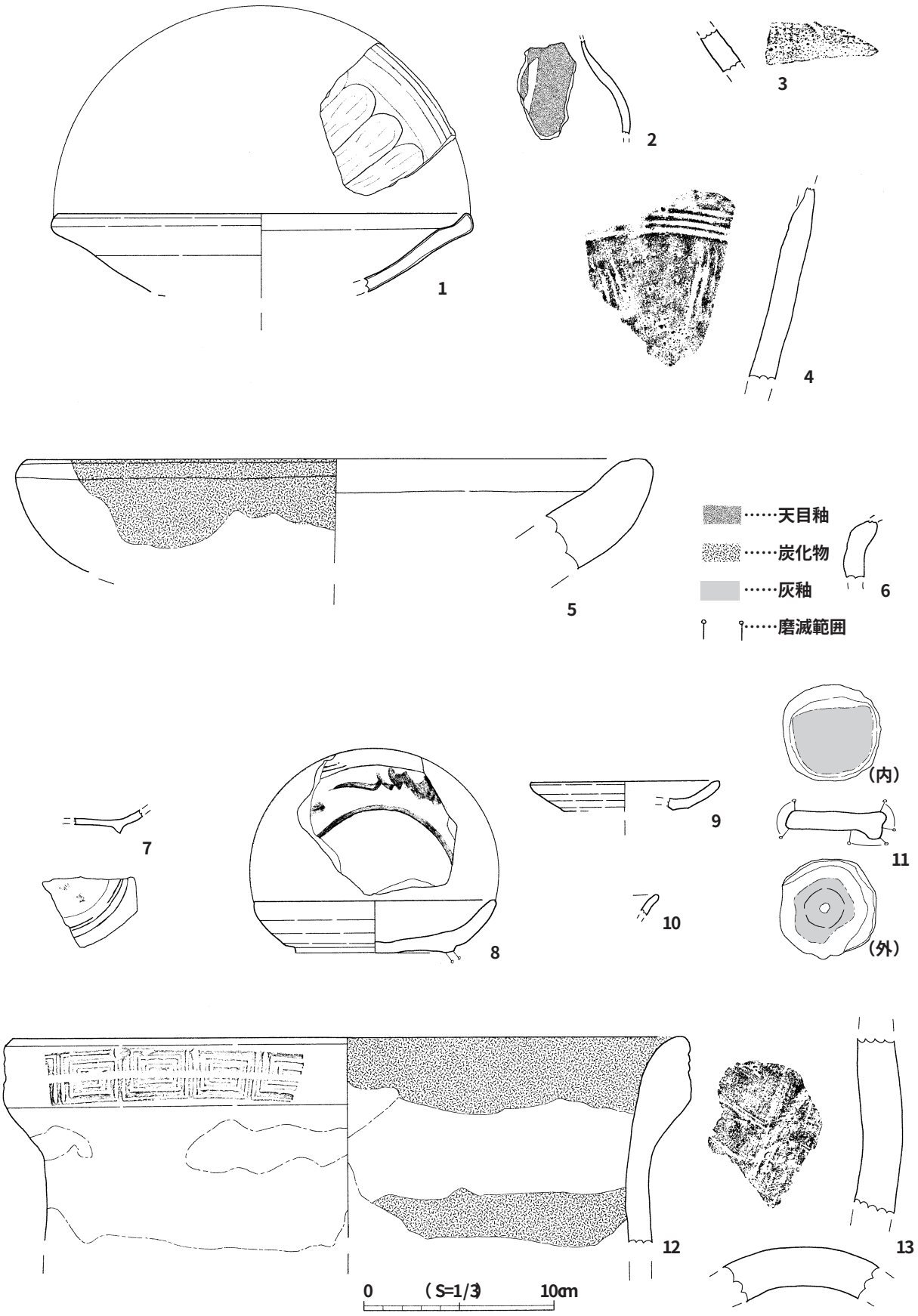
中世～近世にかけての遺構外出土遺物（第 36図５を除く）は、陶器４点、磁器１点、瓦質土器１点、瓦１点、石製品１点の８点であり、全ての図化に努めた。

遺構外遺物の出土位置としては東側平場に存在する谷地形を埋め立てた地点で最も多く出土している。ここでは胎土の特徴から 13～ 15世紀代の年代観が考慮される３の常滑産甕片も出土しているが、概ね 17世紀半ば～ 19世紀初頭頃の年代観が与えられる遺物が多く見られることから、江戸時代後期に埋め立てを行なったものと考えられる。なお、９の美濃産碗底部片では高台部を含めた全面で研磨の痕跡が看取でき、２次利用がなされている。

北側平場で確認された整地層上面からは８の志野の鉄絵丸皿が出土している。このほか北側平場では 13の内面に布目痕を有する軒平瓦が表土掘削時に出土している。

土塁構築土中からは年代観が判断できる資料ではないものの５の石鉢と６の不明土製品が出土している。このうち６はクビレ部での復元径が 38cmと大型のものであり、埴輪の可能性も指摘されているが断定には至っていない。

12は東側平場表土掘削時に出土した瓦質土器の焜炉である。口縁帯外面には雷文を施す。内面では２段に煤が付着している。



第36図　中世・近世の出土遺物

第Ⅳ章　考察

１．遺物について

－縄文時代・土器－

本地点で発見された縄文土器はＳＸ０１遺物包含層を中心として出土したものであるため、一括性には乏しいものであることについては前述した通りであるが、これらの土器群にはいくつかの共通あるいは相反した特徴が見受けられる。以下に胎土、文様構成を基に出土資料の分類を行ない、土器編年上に位置付けたい。

〔胎土〕

出土土器における最大の特徴としては、胎土に繊維を混入している土器が極めて高い割合を占めていることが挙げられよう。この繊維混入土器は、今回図示しなかった小片も含めた場合でも、出土した縄文土器の総数で実に約 96%を占めている。ところがこれらの繊維混入土器を含めた土器群の胎土観察では数種類に分類することが可能である。以下に詳述する。

第Ⅰ群

第Ⅰ群としたものは第 11図 1・2・4、第 12図 40・41・42・43、第 13図 74・75・78・79・80・81、第 15図 136・138・139、第 16図 189・192・194である。これらの土器は繊維の混入は後述する他の土器群と比べた場合、いずれも顕著に混入が確認できるものではない。胎土には雲母を多く含み、色調は橙色のもの（ａ類）、淡赤褐色のもの（ｂ類）の２者がある。器肉はともに薄い。

第Ⅱ群

第Ⅱ群としたものは第 11図 6、第 12図 32・33、第 13図 68・69・70・82・83、第 15図 137、第 16図 161、第 18図 236・241・247である。これらの土器は全てで繊維の混入が明瞭に確認できる。このほか胎土には石英、雲母をやや多く、白色粒子を多量に含むことを大きな特徴とする。色調は全て赤褐色を呈し、器肉は厚手である。

第Ⅲ群

第Ⅲ群としたものは第 11図 5・7～ 20第 12図 21・22・24～ 32・35～ 39・44・47～ 51、第 13図 52・53・55～ 67・72・76・77・84・86～ 88、第 14図 89～ 107、第 15図 108～ 114・117～ 135・137・140～ 150、第 16図 151～ 160・162・163・165・167・168・170～ 188・190・191・193・195～ 198、第 17図 199～ 206・208～ 227、第 18図 228～ 235・240～ 244・246である。これらの土器は全てで繊維の混入が明瞭に確認できる。胎土では雲母はやや多く、石英は少ない。Ⅱ群でみられた白色粒子は極微量である。色調は淡橙色を呈し、器肉はやや厚めである。なお、第 12図 46は繊維の混入は同様であるものの、白色粒子を多量に含むなど異なる様相を呈するが、１点のみであることから本群に含めて考える。

第Ⅳ群

第Ⅳ群としたものは第 12図 34・45、第 13図 71・85、第 15図 115・116、第 16図 169、第 18図 238・239である。これらの土器も全てで繊維の混入が明瞭に確認できる。胎土では雲母

はやや多く、石英は見られない。Ⅱ群でみられた白色粒子は少量である。色調は淡橙色を呈し、器肉はやや薄めである。

第Ⅴ群

第Ⅴ群としたものは第12図23、第13図54、第16図166、第18図237である。これらの土器も全てで繊維の混入が明瞭に確認できる。胎土では石英はやや多く、雲母は少量である。Ⅱ群でみられた白色粒子はほとんど認められない。色調は淡橙色を呈し、器肉はやや薄めである。

第Ⅵ群

第Ⅵ群としたものは第16図164・172、第17図207、第18図245である。これらの土器も全てで繊維の混入が明瞭に確認できる。胎土では雲母はやや多く、石英は少量である。Ⅱ群でみられた白色粒子は極少量が含まれる。色調は淡橙色を呈し、器肉はやや薄めである。

以上のように、本遺跡地より出土した縄文土器は胎土観察から大別すると６タイプに分類可能であった。次に大別したこれらの土器の施文・整形技法を見ていく。

〔施文・整形技法〕

第Ⅰ群

第Ⅰ群は色調からａ・ｂ類の２者が存在する。まず第Ⅰ群ａ類では以下の施文・整形技法が見られた。

①外面はナデ調整、内面は横位条痕文後ナデ調整を施すもの。

②外面はナデ調整、内面は横位条痕文を施すもの。

①としたものは第11図1、第12図40・41、第13図78・79・80・81、第15図136、138・139、②としたものは第11図2・4、第12図43、第13図74・75、第16図189・194である。

このように施文・整形技法でみると第Ⅰ群ａ類とした土器は２タイプに分類することが可能である。しかしながら、小片が大勢を占めるため、器形の復元には全く至らず、また個々の接合関係は無いものの、おそらくは同一個体である可能性が考慮されることから、これらは同一個体での異なった部位における器面調整の粗密が現れたものと考えられ、本来の整形技法としては内面では条痕文を施した後にナデ調整を行なうものと判断するのが妥当であろう。

次に第Ⅰ群ｂ類では以下の施文・整形技法が見られた。

①外面はナデ調整、内面は横位条痕文を施すもの。

②内外面ともにナデ調整を施すもの。

①としたものは第12図42、②としたものは第16図192である。ただし第Ⅰ群ｂ類も前述の第Ⅰ群ａ類と同様に同一個体である可能性が考慮されることから、本来の整形技法としては内面では条痕文を施した後にナデ調整を行なうものと判断するのが妥当であろう。

第Ⅱ群

第Ⅱ群では以下の施文・整形技法が見られた。

①外面は沈線（連続刺突を含む）による三角文と、その結節点に円形刺突文を配し、内面は横位条痕文を施すもの。口唇部外角にはごく浅いキザミを有する。部分的に隆帯を有する。

②内外面ともに横位条痕文を施すもの。

③外面は横位条痕文、内面はナデ調整を施すもの。

④内外面ともにナデ調整を施すもの。

①としたものは第11図6、第12図33、第13図68～70、第18図236、②としたものは第12図32、第16図161、③としたものは第13図77、④としたものは第12図44、第13図82、第15図137、第18図241である。このように施文・整形技法でみると第Ⅱ群とした土器は4タイプに分類することが可能である。しかしながら、これら特徴的な胎土及び施文・整形技法を有する破片数は少なく、個々の接合関係は無いものの、おそらくは同一個体である可能性が高く、第Ⅰ群土器同様にこれらは同一個体での異なった部位における器面調整の粗密が現れたものと考えられる。そのような場合、個々の器肉の厚さから推測すると施文がある部位は上位に、条痕文・及びナデ調整が施されている部位は下位を構成していたと考えられる。なお、第13図83は底部片であるが、上記と同様の胎土を有しており、第Ⅱ群とした土器の底部形状は平底であったと判断できる。

第Ⅲ群

第Ⅲ群としたものは、本遺跡地で出土した縄文土器の約8割強に相当する。ここでは以下の施文・整形技法が見られた。

①外面は口縁部で横位条痕文を施した後に縦位・斜位の押圧縄文を施文、胴部には地文縄文を施し、内面は条痕文とナデ調整を施すもの。口唇部にはキザミを有する。

②外面ナデ調整、内面は条痕文を施すもの。

③内外面ともにナデ調整を施すもの。

④内外面ともに条痕文を施すもの。

①としたものは第11図3・5・7～20、第12図21・22・24～32・35～39・47～51、第13図52・53・55～67・72・73・76・77・84・86～88、第14図89～107、第15図108～114・117～133・140～150、第16図151～160・162・163・165・167～188・195～198、第17図199～206・208～213・215～227、第18図228～235・240・242～244・246・247、②としたものは第13図83、第15図134・135、第16図190・191、③としたものは第16図193、第17図214、第18図241、④としたものは第12図46である。このように施文・整形技法でみると第Ⅲ群とした土器は4タイプに分類することが可能である。しかしながら、この第Ⅲ群とした土器についても、胎土の特徴は近似しているものが多く見受けられ、同一個体ではないにしても個体数としてはおそらくは5個体程度が想定できるにすぎず、部位における器面調整の粗密が現れたものと考えられる。そのような場合、個々の器肉の厚さから推測すると口縁部外面～胴部上半では①が、胴部下半は②・③・④によって構成していたと考えられる。なお、第11図10は底部片であり、第Ⅲ群とした土器の底部形状は尖底であったと判断できる。

第Ⅳ群

第Ⅳ群としたものは口縁部外面に半載竹管状工具を用いて山形状を呈する波状口縁に平行する集合沈線が施され、内面は条痕文を有するものである。これらには第12図34・45、第13図85、第15図115・116、第16図169、第18図238が相当する。この第Ⅳ群とした土器についても、胎土の特徴は近似しているものが多く見受けられ、同一個体ではないにしても個体数としてはおそらくは2～3個体程度ほどが想定できるものであるが、このうち胎土の異なる第12図45、第13図85はともに口縁部資料であり、第Ⅳ群とした土器の口縁部形状は山形状口縁を呈するものと判断できる。

第Ⅴ群

第Ⅴ群としたものは角張った口唇部を持ち、口唇部及び口縁部内面に押圧縄文を施し、外面は地文縄文を有するものである。これらには第12図23、第13図54、第16図166、第18図237が相当する。これらの内面は一様に剥離しやすくなっているが、僅かに調整痕跡を留める資料では条痕文とナデ調整が行なわれている。この特徴的な胎土及び施文技法を有する破片数は少なく、個々の接合関係は無いものの、おそらくは同一個体である可能性が考慮される。

第Ⅵ群

第Ⅵ群としたものは外面で地文縄文とナデ調整の両者が認められるものとした。これらには第16図164・172、第17図207、第18図245が相当する。これらの内面は条痕文とナデ調整がみられる。破片数は少なく、個々の接合関係は無いが、おそらくは同一個体である可能性が考慮される。

以上のように胎土観察から分類した土器群が施文・調整技法では異なった様相を呈していることを概観してきた。次に本遺跡地で発見されたこれらの土器群が、土器編年上のどの型式と類似するのか検討していきたい。

まず第Ⅱ群とした土器群については胎土に繊維を混入する土器であり、また条痕文を有すること、及び沈線による三角文を構成しその結節点に円形刺突文を配するという特徴から鵜ヶ島台式に比定されると考えられる。この土器群は宮城県南部地域では柴田町槻木貝塚第1次調査出土資料と白石市蔵王開拓A遺跡で出土事例が過去に報告されている（相原1990）。

第Ⅲ群とした土器群についても胎土に繊維の混入が明確に確認できる土器である。この土器群は既述の通り今回発見された縄文土器の約8割強を占めており、本遺跡地及び近隣での縄文文化の大きな指標となり得るものである。施文・整形技法をみると、口縁部は内外面ともに横位の条痕文が施され、外面ではさらに縦位・斜位の押圧縄文が配されている。この口縁帯下の外面では地文縄文が施されるが、下半に至るにつれ疎らになっていく。底部の形状は尖底状を呈する。この土器群は宮城県南部地域では七ヶ宿町小梁川遺跡原尻地区（宮城県教委1987）での出土例のほか、川崎町下窪遺跡（後藤・吉岡・相原2005）でも確認されており、梨木畑式に比定されている（註3）。

これら以外の土器群としたⅠ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ群は、いずれも資料的に少なく、全体の形状を判断できるような資料に乏しい。しかしながら第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ群は胎土に繊維を含むこと、条痕文を有することからみていずれも第Ⅱ群、第Ⅲ群同様に縄文時代早期後葉頃に帰属するものと考えてい

る。但し、第Ⅰ群土器については胎土に明確な繊維混入の痕跡は見出せず、胎土や調整・整形面からみても他の土器群と比べた場合、明らかに特異性を認めることができる。出土層位も下層部分での出土が他の土器群に比して多いことから、本地点で集中して確認された第Ⅱ群・第Ⅲ群等より若干先行する時期の所産であると考えている。なお、小片であるため特定は困難であるが、槻木貝塚下層においては繊維の混和されない薄手の条痕文土器が検出（註４）されており、本地点での状況はこれと矛盾しない。

－縄文時代・石器－

石器の出土量は極めて少ないが、その中では石鏃が比較的多い傾向である。石鏃は全て基部が凹型を呈するものであり、有茎のものは未出土であった。形状は縦長のものと幅広のものがある。使用石材は黒曜石、頁岩がある。不定形石器の使用石材は頁岩、安山岩、玉髄であり、本地点では比較的頁岩が使用石材として多い傾向であった。なお、東側谷地形より出土した石器（第21図）は、本地点では明確に旧石器時代に属する遺構・遺物が未発見であることから縄文時代の所産であると考えた。しかしながら、無遺物層からの出土であること、また白色化が進行した水和層の観察では旧石器時代の所産である可能性も考慮される。今後の資料の増加を待って再考することを課題としたい。

－弥生時代・土器－

本地点で発見された弥生土器はＳＸ０１遺物包含層第１層を中心として出土したものである。これらには櫛状もしくは半載竹管状工具を用いて描かれた２本１単位の平行沈線によって施文されるもの（第24図1～4）、縄文が施文されるもの（第24図5～7）の２者がある。器種は壺形土器・鉢形土器・高坏の３者であり、鉢形土器（第24図1・2）の口縁部は若干外傾するものの、ほぼ直立する。なお、平行沈線による施文は全て連弧文であると考えられる。これらの土器は十三塚式に比定され（註５）、本地点で弥生時代に生活が営まれた時期としては弥生時代中期後葉頃と考えられる。

－弥生時代・石器－

弥生時代に帰属すると考えられる石器はＳＩ０１住居跡出土の石鏃（第23図１）とＳＸ０２土塁構築土除去中に出土した石包丁（第24図８）のみである。石鏃は既述した理由により弥生時代中期後葉頃の年代観を考えている。黒曜石製であり、有茎のものである。石包丁の石材は福島県に存在する阿武隈山系粘板岩であり、紐孔部は回転穿孔によるものでる。この粘板岩使用時における紐孔部回転穿孔技法は東北地方宮城県中南部以南の太平洋側の地域では多く見られ（須藤1999）、その時期は弥生時代中期後葉頃と考えられており（荒井2003）、本地点より発見された土器の年代観と一致する。

－中～近世・磁器・陶器・瓦質土器－

中～近世の遺物は磁器、陶器、瓦質土器、瓦、石製品があるが、出土量は概して少ない。磁器

は貿易陶磁である青磁・盤（第36図1）、染付・碗（第36図5）があり、青磁は龍泉窯系の製品で内面に蓮弁文を施す。15世紀前半頃の年代観が与えられる。染付は肥前系の製品であり、高台内には「宣明…」の銘款があることから17世紀前半頃の年代観が与えられる。陶器は小壺・（第36図2）、甕（第36図3）、皿（第36図7・8）、碗（第36図9・10）があり、2は天目釉を施釉した瀬戸製品、3は常滑産の製品、7・8・10は瀬戸・美濃窯址群の製品、9は大堀相馬産の製品である。これらの年代観については2が15世紀代の年代観が与えられ、3は胎土の特徴から13世紀～15世紀頃と考えられる。7・8は大窯期のものであり、7は16世紀後半、8は16世紀末～17世紀前半頃の年代観が与えられている。このうち8の製品は現在までのところ仙台城三ノ丸（仙台市教委1985）、及び仙台市南小泉遺跡（宮城県教委1983）で出土しているが、管見に触れる限りではこの両者のみである。稀少な出土例を示したいずれもが伊達氏の影響力が強い地点であることは興味深い。9は小片のため年代推定は難しいが、おそらくは18世紀末～19世紀初頭頃の年代観が与えられるものと捉えている。10は全体が2次的に利用されているが、18世紀代に位置付けられるものと考えている。瓦質土器は擂鉢（第36図4）、焜炉（第36図11）があり、4は県内では仙台城二ノ丸（東北大学）・三ノ丸（仙台市市教委、前掲）、仙台市中田南遺跡（仙台市教委1994）、仙台市養種園遺跡（仙台市教委1997）、仙台市中野高柳遺跡（宮城県教委2005）、丸森町大古町遺跡（丸森町教委2004）などで出土事例が報告されている。本地点出土資料は共伴遺物も無く、口縁部を欠くために年代決定は困難であるが、養種園遺跡では器肉の厚みを時期差として捉えており（註6）、本地点出土資料はこのうちの薄手製品と理解できることから16世紀代に位置付けられると思われる。なお、11は19世紀代に位置付けられる製品であるが、現時点では県内を概観してもこれに類似する資料は仙台城二ノ丸跡や仙台市松木遺跡（仙台市教委1986）でしか見当たらない。これまでに全く出土例が無いということは他の製品の該期における流通活動、及び他県での状況を見ると考えにくい。今後はこのような近世資料についても積極的に図示する姿勢を講じる必要性があるのではないだろうか。

2．遺構について

本地点では縄文時代、弥生時代、中～近世の遺構が確認されている。ここでは前章では触れなかった弥生時代と考えられる住居跡、土塁とその周辺の遺構変遷について考察したい。

－竪穴住居跡について－

本地点で確認された竪穴住居跡は調査区西部の丘陵頂部から谷へと移行する緩斜面に存在する。形状は後世の掘削のため大半が失われるが、ほぼ円形に近いものと推測している。ここで発見された竪穴住居跡の特徴としてはこの立地場所とその構造である。

該期における住居跡は現在までのところ宮城県南部域では非常に確認事例が少なく、管見に触れた限りでは名取市泉遺跡（名取市教委1998）のみである。泉遺跡では10号住居跡と11号住居跡の2軒が確認されており、10号住居跡が円形、11号住居跡が楕円形と平面形状は異なるものの、両者に共通する項目としては規則性のある柱穴がないこと、床面で炉跡が無いことがある。これ

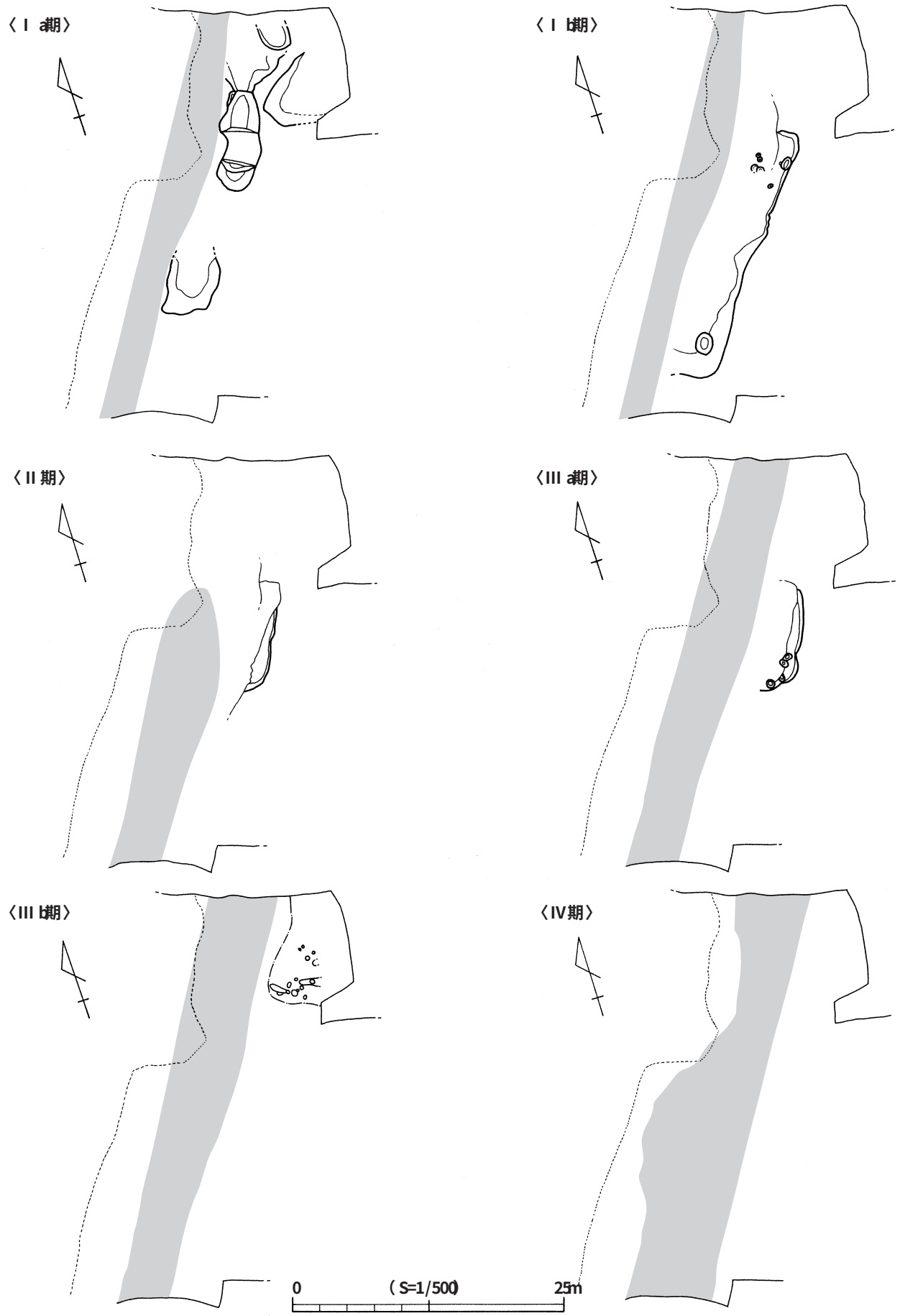
らの住居跡の時期は２軒ともに弥生時代中期末～後期にかけての所産であると考えられている。この泉遺跡の２軒の住居跡と本地点の住居跡を比べた場合、炉跡が存在する点で大きく異なる。また、住居跡壁面についても泉遺跡の２軒では床面からほぼ垂直気味に立ち上がるようであるが、本地点では緩やかな立上りを呈している。このような施設・構造状の相違は時期差に起因するものなのかは資料の少ない現時点では判断できず、今後の資料の増加を期すところである。

次に集落の立地している環境に目を転ずると、丘陵頂部というよりはむしろ緩やかな斜面地を占地している。前述の泉遺跡は比較的に安定した平坦面が確保される丘陵頂部で集落が形成されたと考えられることに対して、やや異質な観は否めない。本地点で確認された住居跡と立地面で共通すると考えられるものには福島県原町市長瀞遺跡（福島県教委 1992）がある。ここでは弥生時代中期後葉である桜井式期の住居跡が確認されているが、そこでの集落形成の場は「沢部に近い部分に存在する緩斜面上」と報告されている。この長瀞遺跡と本地点は共に既述した粘板岩製石包丁の流通圏として把握できることから、物質の移動のみならず人の移動・交流が盛んに行なわれた可能性は極めて高い。未だに発見事例の稀少な時期の所産であり、いずれにしても今後の資料増加を待って再検討すべきであるが、本地点でのこのような立地条件下で集落が形成された背景には、この福島県浜通り地方との文化交流の結果を考慮したい。

－土塁周辺の遺構群について－

本地点で調査前に存在が確認された土塁（ＳＸ０２）は、残存長で 37m、高さ 2m、基底部幅 9.3m を測るものであった。この土塁は調査の結果城割りの痕跡は無く、４時期の変遷が明らかとなった。ただし、土塁の全面（東側）では大型土坑群や土坑、整地層などが確認でき、これらを詳細にみていくと、土塁と土塁の画期以上にこれらの遺構群は変遷を遂げていたことが判断できた。以下に土塁の画期とそれに付設あるいは併行関係にあると考えられる遺構群の整理を試みる。

Ｉ期土塁に伴う遺構群としてはＳＸ０３・０４・０５・０６ａ・０６ｂ、ＳＫ０３・０６・０７・０８・０９・１０・１１・１２が挙げられる。このうちＳＸ０６ｂ、ＳＫ０９・１０・１１・１２は、土層観察から明確にＩ期土塁構築時に掘削された他の遺構群とは時間差が認められる。Ｉ期土塁構築時に機能した遺構群をＩａ期、それ以外でⅡ期土塁に先行する遺構群をＩｂ期とする。土塁は丘陵西側縁辺で構築されているが、Ｉ期土塁構築時におそらくは多少の凹凸があったこの部分を大規模に削平したと考えられ（ＳＸ０６ａ）、その後に土塁が構築されたと考えられる。この時、土塁頂部と東側平場では約 90cm ほど平場側が高く、土塁と平場の間には幅 2.5m ほどで、東側平場との比高差は 1.5m を測る堀状の遺構が存在していたことになる。なお、この堀状遺構内にはＳＫ０３・０６・０７・０８が存在するが、これらはいずれも覆土が自然堆積であることから長期間開口していたと考えられ、この堀状遺構の通路的な利用は想定しにくい。このＩａ期遺構群が埋没後に褐色シルトや泥岩塊を用いて一旦整地を行ない、土塁東側中央部に平坦面（ＳＸ０６ｂ）を作り出したのがＩｂ期である。この平坦面を形成するため、Ｉ期土塁の裾部は約 40cm ほど埋め戻され、土塁頂部との比高差は僅か 90cm ほどとなる。この平坦面ではＳＫ１０の炉穴と



第37図　土塁走方向変遷模式図

考えられる遺構が存在することから、明らかに小期を設定することが可能である。なお、火山灰に近似する灰白色シルトはこの整地層上面で約２・３ cmの層厚をもって堆積し、ＳＫ１０を除く全ての土坑、特にＳＫ１２では上記の灰白色シルトを含んだ自然堆積が顕著に認められることから平坦面が廃絶した後も、Ｉｂ期の遺構群についても長期間の開口が考えられる。

Ⅱ期土塁に伴う遺構としてはＳＸ０７が挙げられる。Ⅱ期土塁はＩｂ期に土塁東側中央部で周辺より一段下に作られた平坦面を若干埋め立てて構築するが、ＳＸ０７はＩｂ期に存在した平坦面を踏襲する形で東側を若干拡張して形成している。なお、このⅡ期土塁は南側から中央付近までは破砕泥岩を用いて構築されるが、北側へ緩やかに下る斜面部から北側平場にかけてはＩ期土塁の改修は認められないことから、部分的な改修に留まっていた可能性も考慮できる。

Ⅲ期は土塁の状況からⅢ期土塁構築時及び機能時の遺構群をⅢａ期、崩落後のⅣ期土塁構築時までの遺構群をⅢｂ期とする。まずⅢａ期土塁に伴う遺構群としてはＳＸ０８及びその底面で検出された小土坑がある。Ⅱ期での土塁は破砕泥岩塊を用いて構築されたことに対し、ここでの土塁は赤褐色・黒褐色シルトを用いて構築されている。また、Ⅱ期土塁は中央部から南側でのみ改修が行なわれたことに対し、Ⅲ期土塁では全面に渡って前記の土壌を用いて改修を行っている。この時期に伴うＳＸ０８は、Ｉｂ期以降から続く中央部東側で周囲より一段下に平坦面を形成した流れを踏襲して作られたものと考えられるが、現時点では土塁に付設するこのような施設の存在を筆者は知らず、この平坦面の考察については今後の課題としたい。なお、南西部平場に存在するＳＢ０９の覆土はこのⅢ期土塁に近似していることから南西平場はこの時期に機能していたと考えられる。北側平場ではⅢ期土塁構築土の崩落土を被覆する形で整地層が形成される。この整地層上面のＳＤ０３・０４などの遺構群をⅢｂ期とする。

Ⅳ期土塁は前述のⅢｂ期に造成された北側平場の上面より構築される。またⅢａ期の遺構であるＳＸ０８の土層観察ではこれを人為的に埋め戻した後に被覆していることが確認されている。今回の調査ではこのⅣ期土塁に併行する時期の遺構の存在は把握できていない。

以上に土塁の画期を基準に遺構の変遷を見てきた。既述の通り、土塁内からは画期の年代決定の基となる資料の出土は皆無であるが、周辺遺構含めて概観すると若干量ではあるが画期の年代観を想像し得る遺物が出土している。以下にこれらの資料をもとにそれぞれの画期の年代推定を試みたい。まず、年代決定が比較的容易な資料は第36図７・８の瀬戸・美濃窯皿である。これらは北側平場整地層の上面・下面の出土であり、下面から出土した７がⅢａ期に属すると考えられ、上面より出土した８がⅢｂ期の年代観を示すものと考えられる。そうするとⅢａ期が16世紀後半、Ⅲｂ期が16世紀末～17世紀前半頃と推定でき、必然的にⅣ期は17世紀前半以降の時期に位置付けることが可能となる。Ⅱ期はⅢａ期の年代観を基に考えると瓦質土器・擂鉢に与えられる年代観である16世紀代（16世紀前半～中頃？）と想定することができるが、若干の疑問が残る。Ⅰ期の年代推定の根拠として本来最も雄弁な資料となる火山灰に近似した灰白色シルトについては、諸般の事情から今回炭素年代測定を行えず、また中世段階での噴火記録が現時点では見当たらないためここでは使用できない。この資料の分析結果によっては今後大きく年代観が変更される可能性が高いが、

敢えて出土資料の年代観と、Ⅰａ～Ⅰｂ期、Ⅰｂ期～Ⅱ期のそれぞれで自然堆積がやや厚く包含されていることを併せ考えてみると、Ⅰｂ期が第36図１・２の年代観である15世紀代に、Ⅰａ期が第36図３の年代観である13・14世紀代の所産であると現段階では位置付けたい。なお、本地点で確認された大型土坑を伴うなどといった土塁の構築技術についての検討、及び土塁修築に関する申請文などの検索は時間的制約から本報告では行ない得なかった。資料の増加を待って今後の再検討することを課題としたい。

註

1　河北新報記事1962

2　カラー図版に示してある調査地点の矢印は推定であるが、付近で見られる道路や昭和24年撮影の航空写真から検討しても妥当であると思われる。なお、調査地点の推定に関しては安達訓仁氏(栗原市教委)の御教示を頂いた。

3　この他に今回は管見に触れていないが、村田町賀篭沢遺跡からも出土しているという情報を相原淳一氏より御教示頂いた。

4　相原淳一氏(宮城県教育委員会)の御教示による。

5　相沢清利氏(多賀城市埋蔵文化財センター)の御教示による。

6　佐藤洋氏(仙台市博物館)の御教示による。

引用・参考文献

相沢清利　2002「東北地方における弥生後期の土器様相－太平洋側を中心として－」『古代文化』第54巻第10号

相原淳一　1990「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年－仙台湾周辺の分層発掘資料を中心に－」『考古學雑誌』第76巻第１号　日本考古學會

赤澤靖章　2000「出土土器の概要」『高田Ｂ遺跡・第２分冊』　仙台市文化財調査報告書第242集

荒井格　2003「東北地方出土石包丁の製作工程と石材選択」『日本考古学』第15号　日本考古学協会

石黒伸一朗　1997「村田町の石碑－菅生地区－」　村田町文化財調査報告書第13集

井上喜久男　2002「近世の瀬戸・美濃」『東洋陶磁史－その研究の現在－』　東洋陶磁学会

岩沼市　1984「岩沼市史」　岩沼市市史編纂委員会

岩沼市　1992「岩沼市土地分類調査(細部調査)報告書・現況調査編」

岩沼市教育委員会　2000「引込横穴墓群発掘調査報告書」　岩沼市文化財調査報告書第１集

岩沼市教育委員会　2004a　「下野郷館跡」　岩沼市文化財調査報告書第２集

岩沼市教育委員会　2004b　「鵜ヶ崎城跡・第２地点」　岩沼市文化財調査報告書第３集

岩沼市教育委員会　2004c　「鵜ヶ崎城跡・第３地点」　岩沼市文化財調査報告書第４集

岩沼市教育委員会　2005「長徳寺前遺跡」　岩沼市文化財調査報告書第５集

小川望　2001「Ⅶ.江戸の遺物　３.土器　厨房具１焜炉」『江戸考古学研究事典』　江戸遺跡研究会

太田秀春　2004「仙台藩の藩体制と支城」『近世城郭を見直す』　第21回全国城郭研究者セミナー資料

九州近世陶磁学会　2000「九州陶磁の編年」　九州近世陶磁学会10周年記念号

後藤勝彦・吉岡恭平・相原淳一　2005「宮城県柴田郡川崎町下窪遺跡第６類土器の再検討－微隆起線文土器の編年的位置付けに関して－」『宮城考古学』・第７号　宮城県考古学会

須藤隆　1999「第３章第３節３　石包丁の発達」『仙台市史通史編１原始』仙台市史編纂室

関根達人　1998「相馬藩における近世窯業生産の展開」『東北大学埋蔵文化財調査年報10』　東北大学埋蔵文化財調査研究センター

仙台市教育委員会　1985「仙台城三ノ丸発掘調査報告書」　仙台市文化財調査報告書第76集

仙台市教育委員会　1986「柳生－土地区画整理事業に伴う柳生地区の遺跡分布調査と、松木遺跡の発掘調査報告書－」　仙台市文化財調査報告書第93集

仙台市教育委員会　1994「中田南遺跡」　仙台市文化財調査報告書第182集
仙台市教育委員会　1996「中在家南遺跡他発掘調査報告書」　仙台市文化財調査報告書第213集
仙台市教育委員会　1997「養種園遺跡発掘調査報告書」　仙台市文化財調査報告書第214集
高　桑　弘　美　2003「５.瓦質土器」『中世奥羽の土器・陶磁器』　東北中世考古学会
千　葉　宗　久　1985「江戸時代名取郡南方小川村絵図」『地図で見る岩沼の歴史』
千　葉　宗　久　1988「いわぬま歴史散歩・７」　河北新報岩沼専売所
千　葉　宗　久　1989「いわぬま歴史散歩・８」　河北新報岩沼専売所
東北福祉大学　2002「鵜ヶ崎城跡(岩沼要害)・第１次発掘調査概報」
東北福祉大学　2003「鵜ヶ崎城跡(岩沼要害)・第２次発掘調査概報」
東北福祉大学　2004「鵜ヶ崎城跡(岩沼要害)・第３次発掘調査概報」
東北福祉大学　2005「鵜ヶ崎城跡(岩沼要害)・第４次発掘調査概報」
東北歴史博物館　2005「特別展古代の旅～人とものの通るみち～展示図録」
名取市教育委員会　1975「宮下遺跡」　名取市文化財調査報告書第１集
名取市教育委員会　1986「愛島東部丘陵遺跡群遺跡詳細分布調査Ⅱ」　名取市文化財調査報告書第16集
名取市教育委員会　1987「愛島東部丘陵遺跡群遺跡詳細分布調査Ⅲ」　名取市文化財調査報告書第18集
名取市教育委員会　1994「鶴巻前遺跡」『仙台東道路関係遺跡調査報告書』　名取市文化財調査報告書第33集
名取市教育委員会　1998「泉遺跡－宮城県警察学校建設関係発掘調査報告書－」　名取市文化財調査報告書第39集
名取市教育委員会　2002「野田山遺跡－宮城県立がんセンター緩和ケア病棟建設関係発掘調査報告書」　名取市文化財調査報告書第47集
福島県教育委員会　1992「長瀞遺跡－第２次調査－」『原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅲ』　福島県文化財調査報告書第281集
藤　沢　良　祐　2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『研究紀要第10輯』（財)瀬戸市埋蔵文化財センター
丸森町教育委員会　2004「大古町遺跡」　丸森町文化財調査報告書第18集
宮城県教育委員会　1974「西野田遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ』　宮城県文化財調査報告書第35集
宮城県教育委員会　1977「(３)長谷寺横穴古墳群」『宮城県文化財発掘調査略報(昭和51年分)』　宮城県文化財調査報告書第48集
宮城県教育委員会　1983「南小泉遺跡」　宮城県文化財調査報告書第94集
宮城県教育委員会　1987「小梁川遺跡」『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ』　宮城県文化財調査報告書第122集
宮城県教育委員会　1992「野田山遺跡」　宮城県文化財調査報告書第145集
宮城県教育委員会　1993「北原遺跡」　宮城県文化財調査報告書第159集
宮城県教育委員会　2005「中野高柳遺跡Ⅲ」　宮城県文化財調査報告書第201集
森　田　勉　他　1978「大宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集・４集』　九州歴史資料館
八重樫忠郎　2003「奥羽における輸入陶磁器の受容」『中世奥羽の土器・陶磁器』　東北中世考古学会編

鵜ヶ崎城跡第４地点出土遺物観察表

第10表　３ｃ層出土遺物観察表

図番号	層位・区	器形・部位	文　様　の　特　徴　等	胎　土	図版
10-1	３ｃ層・３区	深鉢？・口縁部	外；ナデ　内；　条痕文後ナデ		6
10-2	３ｃ層・３区	深鉢？・口縁部	外；ナデ　内；　条痕文		6
10-3	３ｃ層・３区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	6
10-4	３ｃ層・３区	深鉢・胴部	外；ナデ　内；　条痕文		6

第11表　３ｂ層出土遺物観察表

図番号	層位・区	器形・部位	文　様　の　特　徴　等	胎　土	図版
10-5	３ｂ層・６区	深鉢・口縁部	外；横位押圧縄文（ＲＬ）・地文縄文（ＲＬ）　内；条痕文	繊維混入	6
10-6	３ｂ層・３区	深鉢・口縁部	外；沈線による三角文・結節点に円形竹管文　内；条痕文	繊維混入	6
10-7	３ｂ層・６区	深鉢・口縁部	外；条痕文、口唇部にキザミ　内；条痕文	繊維混入	6
10-8	３ｂ層・３区	深鉢・口縁部	外；摩滅により不明、口唇部にキザミ　内；条痕文	繊維混入	6
10-9	３ｂ層・４区	深鉢・口縁部	外；横位条痕後斜位押圧縄文（ＬＲ）、口唇部にキザミ　内；条痕文	繊維混入	6
10-10	３ｂ層・６区	深鉢・底部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文・ナデ	繊維混入	6
10-11	３ｂ層・３区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	6
10-12	３ｂ層・６区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；条痕文・ナデ	繊維混入	6
10-13	３ｂ層・３区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	6
10-14	３ｂ層・３区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文・ナデ	繊維混入	6
10-15	３ｂ層・２区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	6
10-16	３ｂ層・６区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	6
10-17	３ｂ層・３区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文・ナデ	繊維混入	6
10-18	３ｂ層・４区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；条痕文	繊維混入	6
10-19	３ｂ層・６区	深鉢・胴部下	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	6
10-20	３ｂ層・６区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文・ナデ	繊維混入	6
11-21	３ｂ層・３区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	6
11-22	３ｂ層・３区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	6
11-23	３ｂ層・３区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；ナデ	繊維混入	6
11-24	３ｂ層・４区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）、沈線　内；条痕文	繊維混入	6
11-25	３ｂ層・３区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	6
11-26	２ｂ層・６区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；条痕文後ナデ	繊維混入	6
11-27	３ｂ層・４区	深鉢・胴部下	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	6
11-28	３ｂ層・６区	深鉢・口縁下	外；横位条痕後縦位・斜位押圧縄文（ＲＬ）・地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文・ナデ	繊維混入	6
11-29	３ｂ層・６区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文・ナデ	繊維混入	6
11-30	３ｂ層・６区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文・ナデ	繊維混入	6
11-31	３ｂ層・４区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；ナデ	繊維混入	6
11-32	３ｂ層・３区	深鉢・胴部	外；条痕文　内；条痕文	繊維混入	6
11-33	３ｂ層・３区	深鉢・胴部	外；連続刺突による沈線・円形竹管文　内；条痕文	繊維混入	6
11-34	３ｂ層・３区	深鉢・胴部	外；斜位沈線　内；条痕文・ナデ	繊維混入	6
11-35	３ｂ層・３区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；ナデ	繊維混入	6
11-36	３ｂ層・６区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；ナデ	繊維混入	6
11-37	３ｂ層・６区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；ナデ	繊維混入	6
11-38	３ｂ層・３区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；ナデ	繊維混入	6
11-39	３ｂ層・６区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	6
11-40	３ｂ層・１区	深鉢？・胴部	外；縦位条痕文後ナデ　内；　条痕文・ナデ		6
11-41	３ｂ層・１区	深鉢？・胴部	外；ナデ　内；条痕文後ナデ		6
11-42	３ｂ層・６区	深鉢？・胴部	外；ナデ　内；条痕文	繊維混入	6
11-43	３ｂ層・２区	深鉢？・胴部	外；ナデ　内；条痕文		6
11-44	３ｂ層・３区	深鉢・胴部下	外；ナデ　内；ナデ	繊維混入	6

第12表　３ａ層出土遺物観察表

図番号	層位・区	器形・部位	文　様　の　特　徴　等	胎　土	図版
11-45	３ａ層・３区	深鉢・口縁部	外；山形沈線文　内；条痕文	繊維混入	6
11-46	３ａ層・５区	深鉢・胴部	外；条痕文・地文縄文（ＲＬ）　内；条痕文	繊維混入	6
11-47	３ａ層・３区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；条痕文後ナデ	繊維混入	6
11-48	３ａ層・３区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；条痕文・ナデ	繊維混入	7
11-49	３ａ層・６区	深鉢・口縁下	外；横位条痕後縦位・斜位押圧縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	7
11-50	３ａ層・３区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ、ＲＬ）　内；条痕文	繊維混入	7
11-51	３ａ層・６区	深鉢・口縁部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	7
12-52	３ａ層・５区	深鉢・口縁下	外；沈線、斜位押圧縄文（ＲＬ）、地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文後ナデ	繊維混入	7
12-53	３ａ層・５区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；条痕文・ナデ	繊維混入	7
12-54	３ａ層・５区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；ナデ	繊維混入	7
12-55	３ａ層・３区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文後ナデ	繊維混入	7
12-56	３ａ層・３区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；ナデ	繊維混入	7
12-57	３ａ層・３区	深鉢・胴部	外；横位押圧縄文（ＲＬ）　内；条痕文後ナデ	繊維混入	7
12-58	３ａ層・６区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬＲ）　内；ナデ	繊維混入	7
12-59	３ａ層・５区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；条痕文・ナデ	繊維混入	7

12-60	３ａ層・３区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；条痕文	繊維混入	7
12-61	３ａ層・３区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文・ナデ	繊維混入	7
12-62	３ａ層・１区	深鉢・口縁部	外；地文縄文（ＲＬ）、口唇部にキザミ　内；条痕文	繊維混入	7
12-63	３ａ層・６区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文・ナデ	繊維混入	7
12-64	３ａ層・６区	深鉢・口縁下	外；横位条痕後斜位押圧縄文（ＬＲ）、平行沈線、口唇部にキザミ　内；条痕文	繊維混入	7
12-65	３ａ層・３区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	7
12-66	３ａ層・３区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；条痕文・ナデ	繊維混入	7
12-67	３ａ層・５区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	7
12-68	３ａ層・５区	深鉢・胴部	外；連続刺突沈線による三角文・円形竹管文　内；条痕文・ナデ	繊維混入	7
12-69	３ａ層・６区	深鉢・口縁下？	外；連続刺突沈線による三角文・結節点に円形竹管文　内；条痕文	繊維混入	7
12-70	３ａ層・６区	深鉢・胴部	外；連続刺突による沈線・隆帯　内；条痕文	繊維混入	7
12-71	３ａ層・５区	深鉢・胴部	外；横位沈線　内；条痕文	繊維混入	7
12-72	３ａ層・５区	深鉢・口縁下	外；横位押圧縄文（ＲＬ）　内；剥離のため不明	繊維混入	7
12-73	３ａ層・６区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；ナデ	繊維混入	7
12-74	３ａ層・４区	深鉢？・胴部	外；縦位条痕文後ナデ　内；　条痕文		7
12-75	３ａ層・３区	深鉢？・胴部	外；縦位条痕文後ナデ　内；　条痕文		7
12-76	３ａ層・６区	深鉢・胴部	外；条痕文・地文縄文（ＬＲ）　内；ナデ	繊維混入	7
12-77	３ａ層・６区	深鉢・胴部下	外；条痕文？　内；ナデ	繊維混入	7
12-78	３ａ層・１区	深鉢？・口縁部	外；ナデ　内；　条痕文後ナデ		7
12-79	３ａ層・５区	深鉢？・胴部	外；縦位の条痕文後ナデ　内；条痕文後ナデ		7
12-80	３ａ層・３区	深鉢？・胴部	外；ナデ　内；ナデ		7
12-81	３ａ層・２区	深鉢？・胴部	外；ナデ　内；ナデ		7
12-82	３ａ層・５区	深鉢・胴部	外；ナデ　内；ナデ		7
12-83	３ａ層・６区	深鉢・底部	外；条痕文？　内；　条痕文後ナデ	繊維混入	7

第 13表　２ｂ層出土遺物観察表

図番号	層位・区	器形・部位	文　様　の　特　徴　等	胎　土	図版
12-84	２ｂ層・４区	深鉢・口縁部	外；横位条痕後斜位押圧縄文（ＲＬ）、口唇部にキザミ　内；条痕文	繊維混入	7
12-85	２ｂ層・３区	深鉢・口縁部	波状口縁。外；山形沈線文　内；条痕文	繊維混入	7
12-86	２ｂ層・５区	深鉢・口縁部	外；横位条痕後斜位押圧縄文（ＲＬ）、口唇部にキザミ　内；条痕文	繊維混入	7
12-87	２ｂ層・４区	深鉢・口縁部	外；地文縄文（ＲＬ、ＬＲ）　内；ナデ	繊維混入	7
12-88	２ｂ層・２区	深鉢・口縁部	外；条痕文、口唇部にキザミ　内；条痕文	繊維混入	7
13-89	２ｂ層・５区	深鉢･口縁下～胴部	外；横位平行沈線後縦位・斜位押圧縄文（ＬＲ）・地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	8
13-90	２ｂ層・１区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ、ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	7
13-91	２ｂ層・６区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	7
13-92	２ｂ層・１区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	7
13-93	２ｂ層・６区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	7
13-94	２ｂ層・４区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	7
13-95	２ｂ層・３区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；条痕文・ナデ	繊維混入	7
13-96	２ｂ層・６区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；条痕文	繊維混入	7
13-97	２ｂ層・１区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文・ナデ	繊維混入	8
13-98	２ｂ層・４区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	7
13-99	２ｂ層・５区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；条痕文	繊維混入	8
13-100	２ｂ層・１区	深鉢・胴部下	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	7
13-101	２ｂ層・４区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	8
13-102	２ｂ層・１区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文・ナデ	繊維混入	8
13-103	２ｂ層・２区	深鉢・口縁下	外；条痕文・地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文・ナデ	繊維混入	8
13-104	２ｂ層・４区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；条痕文・ナデ	繊維混入	8
13-105	２ｂ層・４区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；ナデ	繊維混入	8
13-106	２ｂ層・３区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	8
13-107	２ｂ層・５区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；条痕文	繊維混入	8
14-108	２ｂ層・４区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文・ナデ	繊維混入	8
14-109	２ｂ層・１区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	8
14-110	２ｂ層・４区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；条痕文	繊維混入	8
14-111	２ｂ層・４区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；条痕文	繊維混入	8
14-112	２ｂ層・１区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；条痕文	繊維混入	8
14-113	２ｂ層・１区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；条痕文	繊維混入	8
14-114	２ｂ層・６区	深鉢・口縁下	外；横位条痕後押圧縄文（ＲＬ）　内；条痕文	繊維混入	8
14-115	２ｂ層・４区	深鉢・口縁下	外；沈線　内；条痕文	繊維混入	8
14-116	２ｂ層・４区	深鉢・口縁下	外；沈線　内；条痕文	繊維混入	8
14-117	２ｂ層・１区	深鉢・口縁下	外；沈線　内；条痕文	繊維混入	8
14-118	２ｂ層・６区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	8
14-119	２ｂ層・５区	深鉢・口縁下	外；条痕文　内；条痕文	繊維混入	8
14-120	２ｂ層・６区	深鉢・口縁下	外；押圧縄文（ＲＬ）　内；ナデ	繊維混入	8
14-121	２ｂ層・１区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；条痕文	繊維混入	8
14-122	２ｂ層・２区	深鉢・胴部下	外；地文縄文（ＲＬ）　内；ナデ	繊維混入	8
14-123	２ｂ層・５区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；ナデ	繊維混入	8
14-124	２ｂ層・１区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	8
14-125	２ｂ層・６区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；ナデ	繊維混入	8
14-126	２ｂ層・６区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；ナデ	繊維混入	8

14-127	２b層・４区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ） 内；ナデ	繊維混入	8
14-128	２b層・４区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ） 内；ナデ	繊維混入	8
14-129	２b層・１区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ） 内；ナデ	繊維混入	8
14-130	２b層・３区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ） 内；ナデ	繊維混入	8
14-131	２b層・５区	深鉢？・胴部	外；地文縄文（ＲＬ） 内；条痕文	繊維混入	8
14-132	２b層・１区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ） 内；ナデ	繊維混入	8
14-133	２b層・６区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ） 内；ナデ	繊維混入	8
14-134	２b層・６区	深鉢・胴部	外；ナデ 内；条痕文	繊維混入	8
14-135	２b層・２区	深鉢・胴部	外；ナデ 内；条痕文	繊維混入	8
14-136	２b層・１区	深鉢・口縁部	外；ナデ 内；条痕文・ナデ		8
14-137	２b層・５区	深鉢・胴部	外；ナデ 内；ナデ	繊維混入	8
14-138	２b層・２区	深鉢・胴部	外；ナデ 内；ナデ		8
14-139	２b層・５区	深鉢？・胴部	外；ナデ 内；ナデ		8

第 14表　２ａ層出土遺物観察表

図番号	層位・区	器形・部位	文 様 の 特 徴 等	胎 土	図版
14-140	２ａ層・６区	深鉢・口縁～胴部	外；横位条痕後斜位押圧縄文（ＲＬ、ＬＲ）・地文縄文（ＬＲ） 内；条痕文	繊維混入	8
14-141	２ａ層・５区	深鉢・口縁部	外；横位条痕後斜位押圧縄文（ＬＲ） 内；条痕文	繊維混入	8
14-142	２ａ層・４区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ） 内；条痕文	繊維混入	8
14-143	２ａ層・４区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ） 内；条痕文	繊維混入	8
14-144	２ａ層・６区	深鉢・胴部下	外；地文縄文（ＬＲ） 内；条痕文	繊維混入	8
14-145	２ａ層・３区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ） 内；条痕文	繊維混入	9
14-146	２ａ層・３区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）？ 内；ナデ	繊維混入	8
14-147	２ａ層・５区	深鉢・胴部下	外；地文縄文（ＲＬ） 内；条痕文・ナデ	繊維混入	9
14-148	２ａ層・３区	深鉢・胴部下	外；地文縄文（ＬＲ）・ナデ 内；条痕文	繊維混入	9
14-149	２ａ層・５区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ） 内；ナデ	繊維混入	9
14-150	２ａ層・４区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ） 内；ナデ	繊維混入	9
15-151	２ａ層・５区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ） 内；ナデ	繊維混入	9
15-152	２ａ層・１区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ） 内；条痕文	繊維混入	9
15-153	２ａ層・１区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ） 内；条痕文	繊維混入	9
15-154	２ａ層・５区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ） 内；条痕文	繊維混入	9
15-155	２ａ層・３区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ） 内；条痕文	繊維混入	9
15-156	２ａ層・２区	深鉢・胴部下	外；地文縄文（ＲＬ） 内；条痕文	繊維混入	9
15-157	２ａ層・３区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ） 内；条痕文	繊維混入	9
15-158	２ａ層・４区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ） 内；条痕文	繊維混入	9
15-159	２ａ層・５区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ） 内；条痕文	繊維混入	9
15-160	２ａ層・５区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ） 内；条痕文	繊維混入	9
15-161	２ａ層・５区	深鉢・胴部	外；条痕文 内；条痕文・ナデ		9
15-162	２ａ層・５区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ） 内；条痕文	繊維混入	9
15-163	２ａ層・６区	深鉢・口縁下	外；横位条痕後斜位押圧縄文（ＲＬ） 内；条痕文	繊維混入	9
15-164	２ａ層・５区	深鉢？・胴部	外；条痕後地文縄文（ＲＬ） 内；条痕文	繊維混入	9
15-165	２ａ層・５区	深鉢・口縁下	外；横位条痕後縦位（ＬＲ、ＲＬ）・斜位押圧縄文（ＬＲ） 内；条痕文	繊維混入	9
15-166	２ａ層・１区	深鉢・口縁部	外；押圧縄文（ＬＲ） 内；ナデ	繊維混入	9
15-167	２ａ層・３区	深鉢・口縁下	外；斜位押圧縄文（ＲＬ） 内；口唇部に押圧、口縁上に押圧・ナデ	繊維混入	9
15-168	２ａ層・４区	深鉢・胴部	外；沈線 内；条痕文	繊維混入	9
15-169	２ａ層・４区	深鉢・胴部	外；沈線 内；条痕文	繊維混入	9
15-170	２ａ層・５区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ） 内；ナデ	繊維混入	9
15-171	２ａ層・６区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ） 内；ナデ	繊維混入	9
15-172	２ａ層・４区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ、ＲＬ） 内；ナデ		9
15-173	２ａ層・３区	深鉢・胴部下	外；地文縄文（ＬＲ、ＲＬ） 内；ナデ	繊維混入	9
15-174	２ａ層・６区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ） 内；ナデ	繊維混入	9
15-175	２ａ層・２区	深鉢・胴部下	外；地文縄文（ＲＬ） 内；ナデ	繊維混入	9
15-176	２ａ層・２区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬＲ） 内；ナデ	繊維混入	9
15-177	２ａ層・６区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ） 内；ナデ	繊維混入	9
15-178	２ａ層・６区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ） 内；ナデ	繊維混入	9
15-179	２ａ層・５区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ） 内；条痕文	繊維混入	9
15-180	２ａ層・４区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ） 内；ナデ	繊維混入	9
15-181	２ａ層・１区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ） 内；ナデ	繊維混入	9
15-182	２ａ層・３区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ） 内；ナデ	繊維混入	9
15-183	２ａ層・３区	深鉢？・胴部	外；地文縄文（ＬＲ） 内；ナデ	繊維混入	9
15-184	２ａ層・６区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ） 内；ナデ	繊維混入	9
15-185	２ａ層・６区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ） 内；ナデ	繊維混入	9
15-186	２ａ層・５区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ） 内；ナデ	繊維混入	9
15-187	２ａ層・６区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ） 内；ナデ	繊維混入	9
15-188	２ａ層・５区	深鉢？・胴部	外；地文縄文（ＲＬ） 内；ナデ	繊維混入	9
15-189	２ａ層・１区	鉢？・口縁部	外；縦位ナデ 内； 条痕文		9
15-190	２ａ層・４区	深鉢・胴部	外；ナデ 内； 条痕文	繊維混入	9
15-191	２ａ層・３区	深鉢？・胴部	外；ナデ 内； 条痕文	繊維混入	9
15-192	２ａ層・２区	深鉢？・胴部	外；縦位ナデ 内；ナデ		9
15-193	２ａ層・５区	深鉢・胴部	外；ナデ 内；ナデ	繊維混入	9

15-194	２ａ層・１区	深鉢？・口縁下？	外；縦位ナデ　内；　条痕文		9

第15表　１ｂ層出土遺物観察表

図番号	層位・区	器形・部位	文　様　の　特　徴　等	胎　土	図版
15-195	１ｂ層・２区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文・ナデ	繊維混入	9
15-196	１ｂ層・１区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；ナデ	繊維混入	9
15-197	１ｂ層・２区	深鉢？・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；ナデ	繊維混入	9
15-198	１ｂ層・２区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ、ＬＲ）　内；ナデ	繊維混入	9

第16表　１ａ層出土遺物観察表

図番号	層位・区	器形・部位	文　様　の　特　徴　等	胎　土	図版
16-199	１ａ層・６区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文・ナデ	繊維混入	9
16-200	１ａ層・６区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	9
16-201	１ａ層・４区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；条痕文・ナデ	繊維混入	9
16-202	１ａ層・３区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	9
16-203	１ａ層・４区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	9
16-204	１ａ層・６区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文・ナデ	繊維混入	9
16-205	１ａ層・３区	深鉢・口縁下	外；横位条痕後斜位押圧縄文（ＲＬ、ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	9
16-206	１ａ層・５区	深鉢・胴部下	外；横位押圧縄文（ＲＬ）　内；ナデ	繊維混入	9
16-207	１ａ層・５区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；ナデ	繊維混入	9
16-208	１ａ層・５区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；ナデ	繊維混入	9
16-209	１ａ層・５区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；ナデ	繊維混入	9
16-210	１ａ層・４区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ、ＬＲ）　内；ナデ	繊維混入	9
16-211	１ａ層・４区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；ナデ	繊維混入	9
16-212	１ａ層・５区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；ナデ	繊維混入	9
16-213	１ａ層・３区	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；ナデ	繊維混入	9
16-214	１ａ層・４区	深鉢・胴部	外；ナデ　内；ナデ	繊維混入	9

第17表　遺構外出土遺物観察表

図番号	層位・区	器形・部位	文　様　の　特　徴　等	胎　土	図版
16-215	遺構精査時	深鉢・口縁部	外；横位条痕後縦位・斜位押圧縄文（ＲＬ）、口唇部にキザミ　内；条痕文	繊維混入	10
16-216	遺構精査時	深鉢・口縁下	外；横位条痕後押圧縄文（ＲＬ）・地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	10
16-217	土墓１トレンチ	深鉢・口縁下	外；横位条痕後縦位・斜位押圧縄文（ＬＲ）　内；条痕文後ナデ	繊維混入	10
16-218	遺構精査時	深鉢・口縁下	外；横位条痕後押圧縄文（ＲＬ）・地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	10
16-219	遺構精査時	深鉢・口縁下	外；横位条痕後押圧縄文（ＲＬ）　内；条痕文	繊維混入	10
16-220	遺構精査時	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	10
16-221	遺構精査時	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	10
16-222	遺構精査時	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	10
16-223	遺構精査時	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	10
16-224	土墓１トレンチ	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬＲ）　内；条痕文・ナデ	繊維混入	10
16-225	土墓１トレンチ	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ、ＲＬ）　内；条痕文	繊維混入	10
16-226	土墓１トレンチ	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	10
16-227	土墓１トレンチ	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；条痕文・ナデ	繊維混入	10
17-228	遺構精査時	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	10
17-229	遺構精査時	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；ナデ		10
17-230	土墓１トレンチ	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；ナデ	繊維混入	10
17-231	土墓１トレンチ	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	10
17-232	土墓１トレンチ	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；ナデ	繊維混入	10
17-233	土墓中	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文	繊維混入	10
17-234	土墓１トレンチ	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；条痕文・ナデ	繊維混入	10
17-235	遺構精査時	深鉢・口縁部	外；押圧縄文（ＬＲ）、口唇部にキザミ　内；条痕文	繊維混入	10
17-236	遺構精査時	深鉢・口縁部	外；連続刺突による沈線・円形竹管文、口唇部にキザミ　内；条痕文		10
17-237	土墓１トレンチ	深鉢・口縁部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；口縁部縄文（ＬＲ）・ナデ	繊維混入	10
17-238	土墓１トレンチ	深鉢・口縁下	外；山形沈線文　内；条痕文	繊維混入	10
17-239	遺構精査時	深鉢・胴部	外；山形沈線文　内；条痕文	繊維混入	10
17-240	遺構精査時	深鉢・胴部下	外；地文縄文（ＲＬ）　内；ナデ	繊維混入	10
17-241	遺構精査時	深鉢・胴部	外；ナデ　内；ナデ	繊維混入	10
17-242	土墓１トレンチ	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬＲ）　内；ナデ	繊維混入	10
17-243	土墓１トレンチ	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；ナデ	繊維混入	10
17-244	土墓１トレンチ	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；ナデ	繊維混入	10
17-245	土墓１トレンチ	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）・ナデ　内；ナデ	繊維混入	10
17-246	土墓１トレンチ	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；条痕文	繊維混入	10
17-247	遺構精査時	深鉢・胴部	外；押圧縄文（ＲＬ）　内；ナデ	繊維混入	10

第18表　ＳＸ０１出土石器観察表

図番号	層位・区	器　種	石　　材	長	幅	厚	重	遺　存　度	備　　考	図版
17-248	３ｂ層・４区	石鏃		2.1	1.8	0.3	2.0	先端欠損		10
17-249	３ｂ層・２区	石鏃		2.3	0.9	2.5	1.0	右側欠損		10

17-250	１b層・３区	石鏃		2.3	1.1	0.3	2.2	先端欠損		10
18-251	２a層・２区	不定形剥片	安山岩	4.3	4.6	1.2	26			10
18-252	１b層・５区	不定形剥片		3.6	3.6	1.8	20			10
18-253	３b層・４区	不定形剥片		4.4	4.3	1.3	16			10

第 19表　ピット群出土遺物観察表

図番号	出土遺構	器形・部位	文　様　の　特　徴　等	胎　土	図版
21-1	Ｐ－12	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；ナデ	繊維混入	
21-2	Ｐ－12	深鉢・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；条痕文	繊維混入	

第 20表　ＳＩ０１出土石器観察表

図番号	層位・区	器　種	石　材	長	幅	厚	重	遺　存　度	備　　考	図版
23-1	ＳＩ０１	石鏃	黒曜石	2.8	1.0	0.5	2.1	完形	側縁部に微細剥離痕	11

第 21表　ＳＸ０１出土弥生土器観察表

図番号	層位・区	器形・部位	文　様　の　特　徴　等	時　　期	図版
24-1	ピット４	高坏？・口縁部	外；２本 1単位の櫛状工具沈線による連弧文　内；ミガキ・ナデ	弥生中期後葉	11
24-2	１a層・５区	高坏？・口縁部	外；２本 1単位の櫛状工具沈線による連弧文　内；ナデ	弥生中期後葉	11
24-3	１a層・５区	高坏？・体部	外；１本１単位の串状工具による沈線　内；ミガキ・ナデ	弥生中期後葉	11
24-4	１a層・５区	壺・頸部	外；２本 1単位の櫛状工具沈線による連弧文　内；ナデ	弥生中期後葉	11
24-5	１b層・３区	甕・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；ナデ	弥生中期後葉	11
24-6	１a層・５区	甕・胴部	外；地文縄文（ＲＬ）　内；ナデ	弥生中期後葉	11
24-7	１a層・６区	甕・胴部	外；地文縄文（ＬＲ）　内；ナデ	弥生中期後葉	11

第 22表　遺構外出土石器観察表

図番号	層位・区	器　種	石　材	長	幅	厚	重	遺　存　度	備　　考	図版
24-8	土塁構築土	石包丁	粘板岩	5.3	5.8	0.7	40	両端部欠損	刃部に微細剥離痕、紐孔部回転穿孔、両面ともに使用時の擦痕顕著、破損面の一部に再利用による摩滅	11

第 23表　中・近世遺物観察表

図番号	出土位置	種　別	器種・部位	口　径	底　径	器　高	遺　存　度	特　　徴	時期	図版
36-1	ＳＤ０５	磁器	盤・口縁部	22.2	－	－	１／４	青磁、内面に連弁文、龍泉窯系	15C 前	11
36-2	ＳＤ０５	陶器	壺・肩部	－	－	－	－	瀬戸、天目釉外面に施釉、内面の一部に釉垂れ	15C 代	11
36-3	東側平場 谷地形埋土	陶器	甕・肩部	－	－	－	－	常滑、外面に押印	13C 以降	11
36-4	ＳＫ１６	瓦質土器	擂鉢・胴部	－	－	－	－	縦位・横位に４本１単位の櫛状工具による卸目	15～16 C代	11
36-5	土塁構築土	石製品	鉢・口縁部	33.5	－	－	１／６	内面は使用による摩滅が顕著 石材；安山岩	不明	11
36-6	土塁構築土	土製品	不明・胴部	－	－	－	－	内・外面ナデ、外面復元径は38cm	不明	11
36-7	東側平場 谷地形埋土	磁器	碗・底部	－	－	－	１／６	肥前系染付、高台内に「宣明」の銘款	17半～ 後	11
36-8	北側平場 整地層上面	陶器	皿・口～底部	12.7	8.3	2.7	１／４	志野、鉄絵、全面的に貫入顕著、高台部畳付は意図的に研磨	16末～ 17C 初	11
36-9	ＳＸ０４	陶器	皿・口縁部	10.0	－	－	１／８	美濃、内外面も鉄釉塗布	16C 後	11
36-10	東側平場 谷地形埋土	陶器	碗・口縁部	－	－	－	－	大堀相馬、釉調はオリーブ灰色の灰釉	18末～ 19C 初	11
36-11	東側平場 谷地形埋土	陶器	碗・底部	－	5.4	－	１／６	瀬戸、転用品、断面全体及び高台部畳付を研磨。釉調は淡黄色の灰釉	18C 代	11
36-12	東側平場 表土掘削時	瓦質土器	焜炉・口縁部	36.0	－	－	１／４	口縁部外面に雷文、胴部外面は被熱により剥離、内面は煤が２段に付着	19C 代	11
36-13	北側平場 表土掘削時	瓦	軒平瓦	－	－	－	１／６	内面に布目痕、外面はナデ ミガキ	不明	11

岩沼市鵜ヶ崎城跡にみられる「テフラ層」について

東北大学理学部地球物質科学科
大　場　　司

１．テフラ層に関する一般事項

火山噴火の際には短期間に広域にテフラが降り積もり、地層中に噴火時の確実な時間を記録する。地史学や考古学ではテフラ年代学の有用性が認識され、遺跡など様々な対象の年代決定に活用されている。基準となる広域テフラ層の年代は、層序と放射年代測定を併せて決定されている。日本においてはテフラ層序研究者の多大な努力により、数多くのテフラ年代とその分布範囲がこれまでに明らかにされている。町田・新井（2003）はそれらの成果の総括を「新編火山灰アトラス -日本列島とその周辺（東大出版会）」に著している。彼らが同書第１章で記したとおり、火山噴火の様式は多様であり、それに応じて運搬堆積、分布特性も多様である。テフラを利用して年代決定を行う場合には、火山ガラス・鉱物の同定のみならず、噴火様式と運搬堆積様式、分布特性を理解しておくことが望ましい。

火山噴火には様々な様式がある。テフラは噴煙柱を生じる爆発的噴火により生み出されるが、そのような爆発的噴火の中にも多様性がある。爆発的噴火は爆発発生原因によりマグマ噴火、マグマ水蒸気噴火、水蒸気噴火に大別される。マグマ噴火はマグマに溶け込んでいる揮発成分が分離発泡して生じる噴火である。マグマ水蒸気噴火は、マグマと地下水などの水が接触して爆発する噴火である。水蒸気噴火は、地下水が深所のマグマに熱せられるなどして沸騰・爆発して生じる噴火である。マグマ噴火は更にハワイ式、ストロンボリ式、サブプリニー式、プリニー式、ウルトラプリニー式噴火に細分され、順に噴煙柱高度が高くなる。マグマ水蒸気噴火はスルツェイ式、水蒸気プリニー式に分けられ、後者のほうが噴煙柱が高い。これらとは別に、やや特殊な噴火様式のブルカノ式噴火もある。噴煙柱が高い噴火では、火山灰が広域に広がる。従って、層序・年代学に用いられる広域テフラを生じる噴火の多くは、噴煙柱高度の大きいプリニー式、ウルトラプリニー式、水蒸気プリニー式噴火である。とはいえ、飛散分布範囲が狭いテフラも、しばしば火山近隣地域での様々な年代決定に利用されている。たとえば岩手山山麓にて年代決定が行われているテフラは、サブプリニー式、ストロンボリ式、ブルカノ式噴火などによるものである。

２．岩沼市付近のテフラ

岩沼市付近には、姶良Tnなどの日本全土を覆う広域テフラ、東北南部を広く覆う榛名二ツ岳伊香保、十和田aなどの広域テフラが分布する。これらは噴煙柱高度の高いプリニー式－ウルトラプリニー式噴火によるテフラである。この付近には、岩沼市の西に位置する蔵王山由来蔵王川崎スコリアも分布する。蔵王川崎スコリアは、プリニー式噴火よりも噴煙柱高度のやや低い

サブプリニー式噴火のテフラであり、宮城県南部に局所的に分布する。日本には多数の活火山が存在し頻繁に噴火活動をしているが、サブプリニー式より規模の大きい噴火の頻度はそれほど高くはない。岩沼市周辺では、数千年に一度程度の低頻度で広域テフラが堆積している。岩沼周辺に分布する広域テフラは数千年前より古いのものが多く、最も新しいものでも約1000年前である。約1000年前の十和田a以降の広域テフラの産出は、岩沼付近では期待できない。

これらとは別に、噴煙柱高度の低い噴火によるテフラが岩沼市周辺に堆積している可能性がある。岩沼市の西方には、活火山である蔵王山が位置する。蔵王山は、東北地方の火山の中ではこの1000年間にもっとも高頻度で噴火している火山である。村山(1973)による蔵王火山620の噴火記録は、西暦773年、1183年、1230年、1333年、1350年、1620年、1622年、1630年、1641年、1669年、1670年、1694年、1794年、1796年、1804年、1809年、1830年、1831年、1833年、1867年、1873年、1894年、1895年、1940年とされている。この記録は古文書の解析によるものであり、蔵王火山の歴史時代の噴火をすべて正しく記録している保証はない。文書に信憑性がない、あるいは文書解析に誤りがある等の場合には、発生していないのに噴火があったとされることもある。逆に、噴火が発生したにもかかわらず、記録が欠落している例はさらに多い。文書が未発見であったり、そもそも記録が残されていない場合があるためである。このことは蔵王に限ったことではない。国内において中世の火山噴火記録は他の時代と比べて少ないが、これは火山活動が不活発だったためではなく、六国史による噴火記録が途絶えた後、近世に至るまで噴火を記録した文書が激減したためとされている。蔵王山も、現在知られていない年代に噴火した可能性はある。

最近の蔵王山の噴火活動としては、1895年9月27日の噴火があり、川崎町青根から小野・支倉にかけて帯状に降灰があった(巨智部, 1896)。蔵王山噴火の際に科学的調査が行われたのはこの噴火が初めてであり、それより前の噴火については降灰分布、噴火規模、噴出物の特性などは不明である。1895年の噴火では主に川崎町方向に降灰があったが、降灰の方向はその時の風向きで変化する。岩沼と蔵王山と距離は近いので、風向きと噴火の規模によっては十分にテフラが堆積してもおかしくない。しかし、歴史時代に蔵王山のテフラが岩沼周辺に堆積したかは未だ調査が行われていない。伴他(2004)は地質学的アプローチにより蔵王火山からのテフラの年代決定を行い、蔵王山頂付近のテフラ層群より約180年～1000年という炭素14年代を得ている。しかし、数多くの噴火記録と各テフラ層との対比は困難であり、また、これら各テフラの分布範囲も不明である。このため、文書記録による噴火年代との対比には至っていない。しかしながら、年代も降灰分布も不明であるものの、歴史時代に蔵王山からのテフラが岩沼市付近に堆積した可能性は高い。

蔵王火山からのテフラは、噴火様式と構成物から次の二つに分けられる。

(1)安山岩質黒色火山ガラスに富むブルカノ式噴火のテフラ

(2)火山ガラスに乏しく、白色粘土岩片に富む水蒸気またはマグマ水蒸気噴火のテフラ

(1)は、伴ほか(2004)が1000年より若いとしたテフラ層の多くが該当する。(2)は1895

年９月のテフラがこれにあたる。他の層序にも（2）のテフラが認められるが、その年代は不明である。（2）には、Huangiteと呼ばれる希鉱物が多量に含まれており（Ohba and Kitade, 2005）、テフラ同定の鍵となる。岩沼など蔵王山から近い地域にて、上記二種のテフラのいずれかが発見された場合には、蔵王山からのテフラと考えてよいであろう。

３．鵜ヶ崎城跡のテフラ層の調査結果

鵜ヶ崎城の年代および蔵王山との地理的関係より、鵜ヶ崎城跡中のテフラ層は、他火山からの広域テフラではなく蔵王火山からのテフラと考えるのが自然である。そのような観点で調査を行った。上記の通り、構成物の調査により、蔵王火山からの火山灰か否かの判定が可能なので、顕微鏡およびＸ線による物質同定を行った。

a．検鏡結果

水洗と篩にて0.1～2mm径の粒子を抽出し、実体顕微鏡による観察を行った（図１）。鏡下では、主成分として石英、角閃石、および白色の粘土質物質が認められた。石英はマグマ水蒸気噴火／水蒸気噴火テフラ中に一般的に認められる瑪瑙質石英ではなく、清澄な石英であり火成岩由来と考えられる。しかしながら、石英はすべて破断形状を示し、結晶本来の形状をなすものはない。角閃石は黒色柱状を呈する。白色粘土物質を構成する鉱物については、鏡下での鉱物同定が不可能なのでＸ線回折により同定を行った。また、火山ガラスは認められなかった。

b．Ｘ線回折結果

採集試料を瑪瑙乳鉢を用いて粉末化し、東北大学理学部地球物質科学科の理学社製Ｘ線回折装置GEIGERFLEXを用いてＸ線回折を行った。CuKαを用い、40kV15mAの条件で測定を行った。Ｘ線回折では数多くの明瞭なピークが得られたので、手動によるピーク解析により鉱物同定を行った（図２）。その結果、含有鉱物として石英、角閃石、カオリン、緑泥石が認められた。このうち、石英と角閃石は顕微鏡でも認められる大型の結晶である。白色粘土岩片を構成するのは、カオリンや緑泥石である。

4．蔵王のテフラとの比較

今回採集された試料は、鉱物同定の結果により蔵王山起源テフラと対比することはできなかった。鵜ヶ崎城の試料中には火山ガラスが認められず、黒色火山ガラスに富むブルカノ式噴火のテフラとは異なることがわかった。また、蔵王山のマグマ水蒸気噴火／水蒸気噴火によるテフラで特徴的に認められるHuangiteも認められなかった。鵜ヶ崎城の試料には清澄な大型の石英が含まれるが、蔵王山のいずれのテフラ中にも石英はほとんど認められない。石英を含む場合も、半透明の瑪瑙質石英であり、全く異なる産状を示す。

5. 結論

今回の分析では、鵜ヶ崎城で認められたテフラ層と蔵王山起源のテフラ層は異なるという知見

が得られた。他の火山からのテフラ層の可能性があるが、これまでに記載されている広域テフラで、本試料に類似するものは知られていない。よっておそらく未記載層である。今回の調査ではテフラ層であるとの確証も得られなかったので、テフラ層であることを証明する必要があるだろう。そのためには周辺地域における堆積分布を詳細に調査する必要がある。

文献

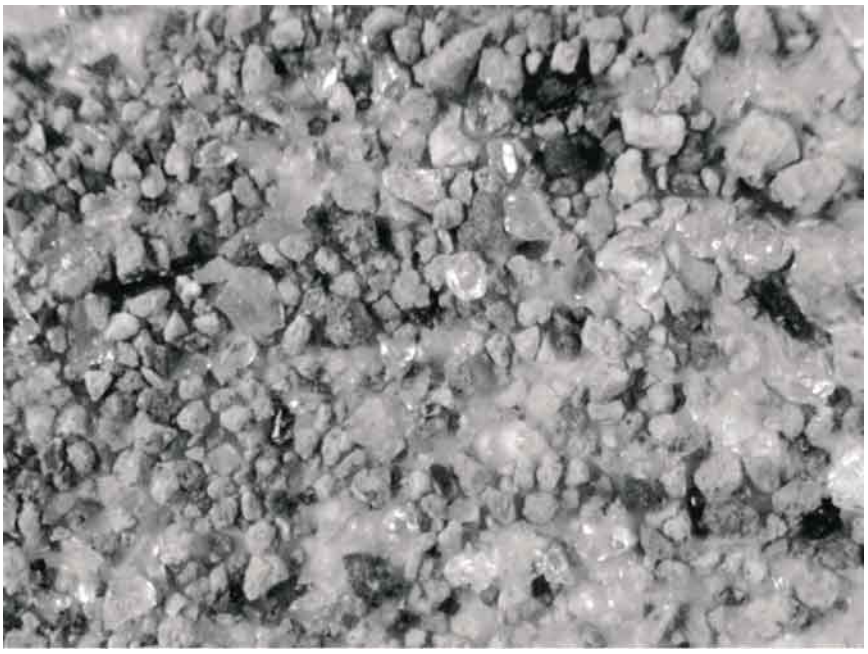
伴　雅雄・佐川　日和・三浦光太郎・田中　雄三（2004）蔵王火山の最近約３万年間の層序と噴出物の岩石学的特徴の時間変化. 科研記補助金特定領域研究火山爆発のダイナミクスA03班 2003年度報告書

町田 洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス－日本列島とその周辺. 336p 東京大学出版会.

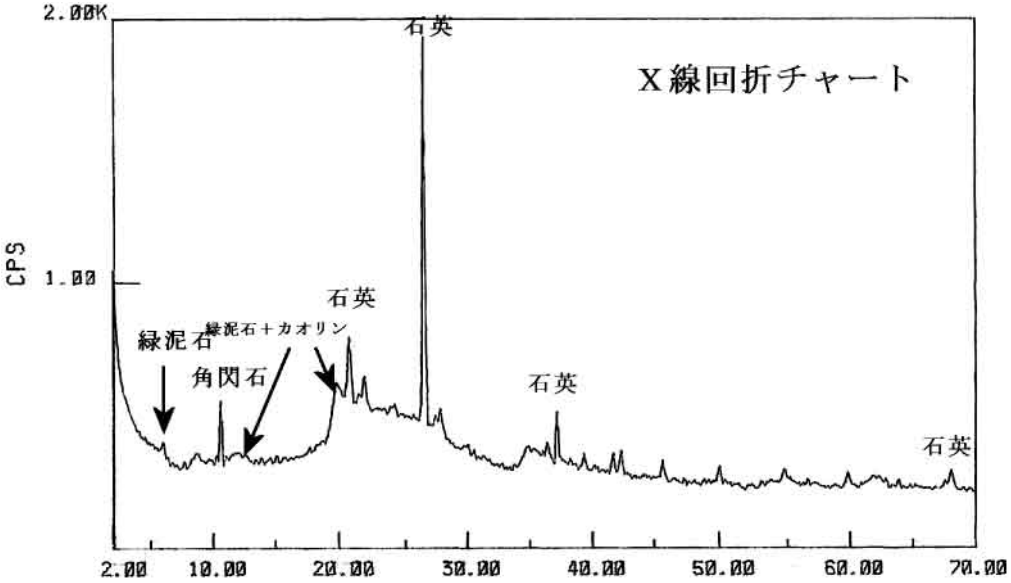
村山磐（1973）火山の活動と地形. 大明堂

巨智部忠承（1896）蔵王山爆裂調査概報 地学雑誌 84 p.190-195

Ohba, T., Kitade, Y. (2005) Subvolcanic hydrothermal systems: implications from hydrothermal minerals in hydrovolcanic ash. Journal of Volcanology and Geothermal Research Vol 145/3-4 pp 249-262



第１図　鵜ヶ崎城に産する「テフラ層」粗粒部の写真。透明な粒子は石英、黒色柱状の粒子は角閃石、灰色は粘土質粒子。



第２図　X線回折チャート。石英、角閃石のシャープなピークと、粘土鉱物（緑泥石、カオリン）のブロードピークが得られた。

写　真　図　版

1. 東側平場・全景(西から)

2. 東側平場・谷地形(西から)

3. 谷地形確認トレンチ土層断面(西から)

4. SB07掘立柱建物跡(南から)

5. 南西平場・全景(東から)

6. 南西平場全景(西から)

7. SB09掘立柱建物跡(西から)

8. SK14・15土杭(東から)

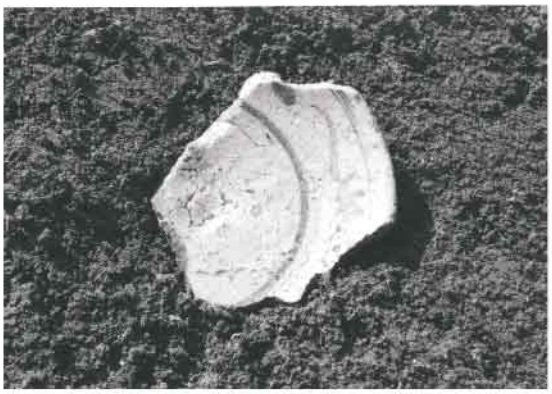
図版２

1. 南西平場・北東部の高まり(西から)

2. 同断面(西から)

3. 青磁・盤 出土状況(南西平場)

4. 瓦質擂鉢 出土状況(南西平場)



5. 志野・絵付皿 出土状況(北側平場)

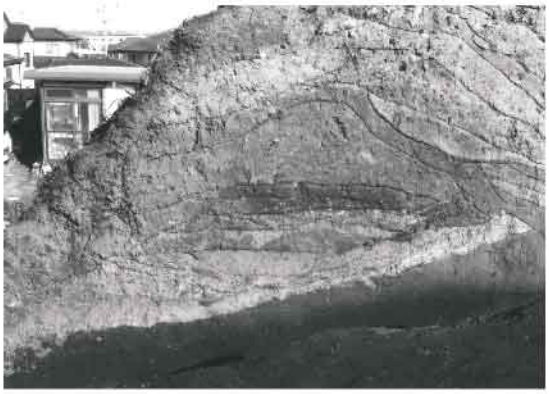
6. 瓦 出土状況(北側平場)

7. SX02土塁断面・4Tr(南東から)

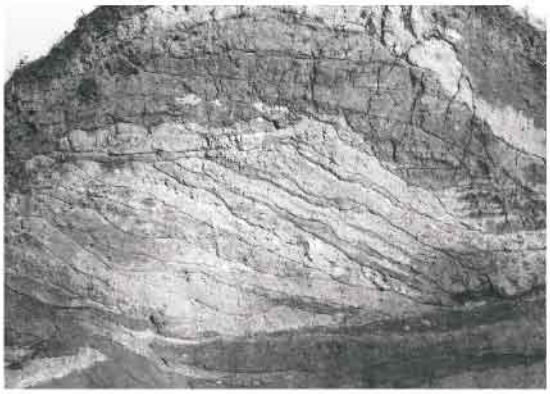
8. SX02土塁断面・4Tr(南西から)

1. SX02土塁断面・1Tr(南東から)

2. 同断面・1Tr(南から)



3. SX02土塁断面(Ⅰ期)



4. 同断面(Ⅱ・Ⅲ期)

5. SX02土塁断面・5Tr(北から)

6. SK09土坑断面(北から)

7. 北側平場・全景(南から)

8. SX02土塁確認　3Tr(南から)

図版４

1. SX06・SK08断面（北東から）

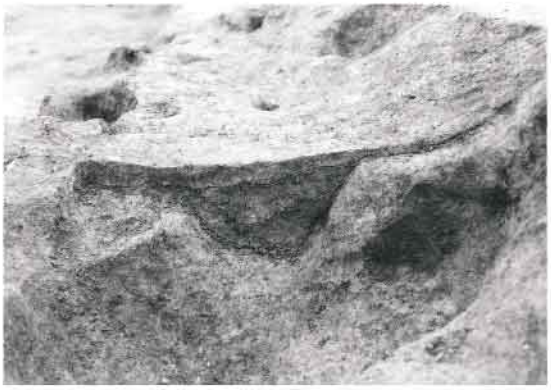
2. SX06・07・08断面（南西から）

3. SI 01住居跡・土層堆積状況（北から）

4. SI 01住居跡（南から）

5. SI 01住居跡・炉跡断面（南から）

6. SI 01住居跡・炉跡完掘状況（南から）



7. SI 01住居跡・床下土坑（南から）

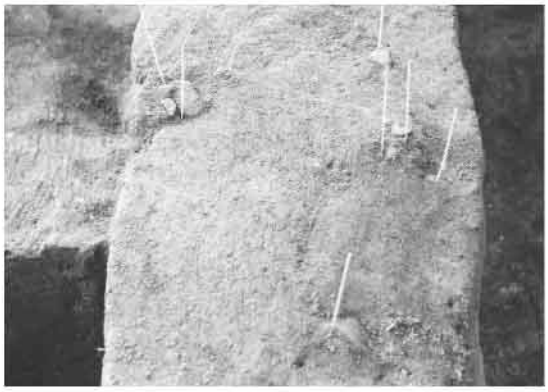
8. SI 01住居跡・掘り方（南から）

1. SX01遺物包含層（南から）

2. 同左（北から）

3. SX01・東西トレンチ②(南から）

4. SX01・遺物出土状況①



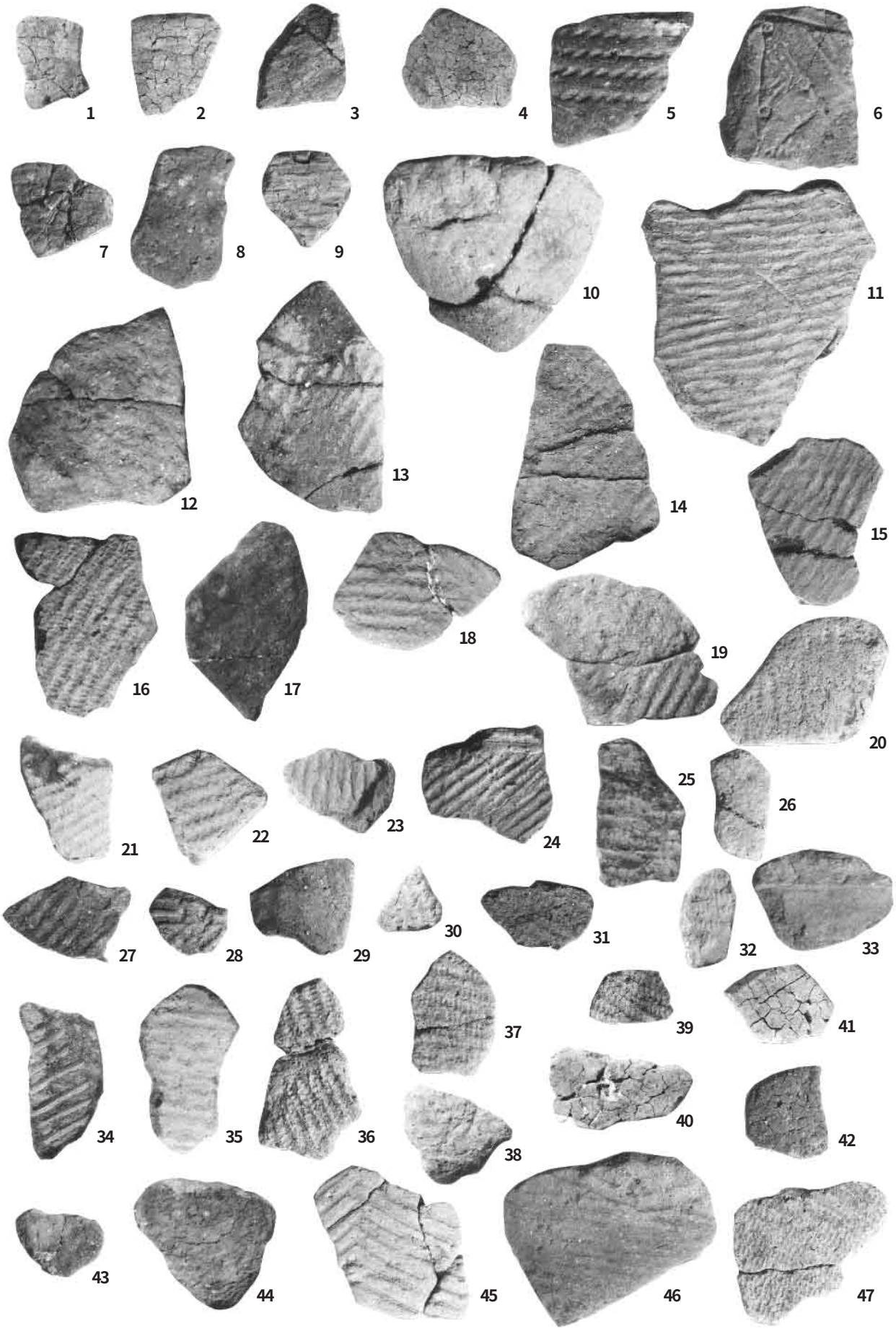
5. SX01・遺物出土状況②

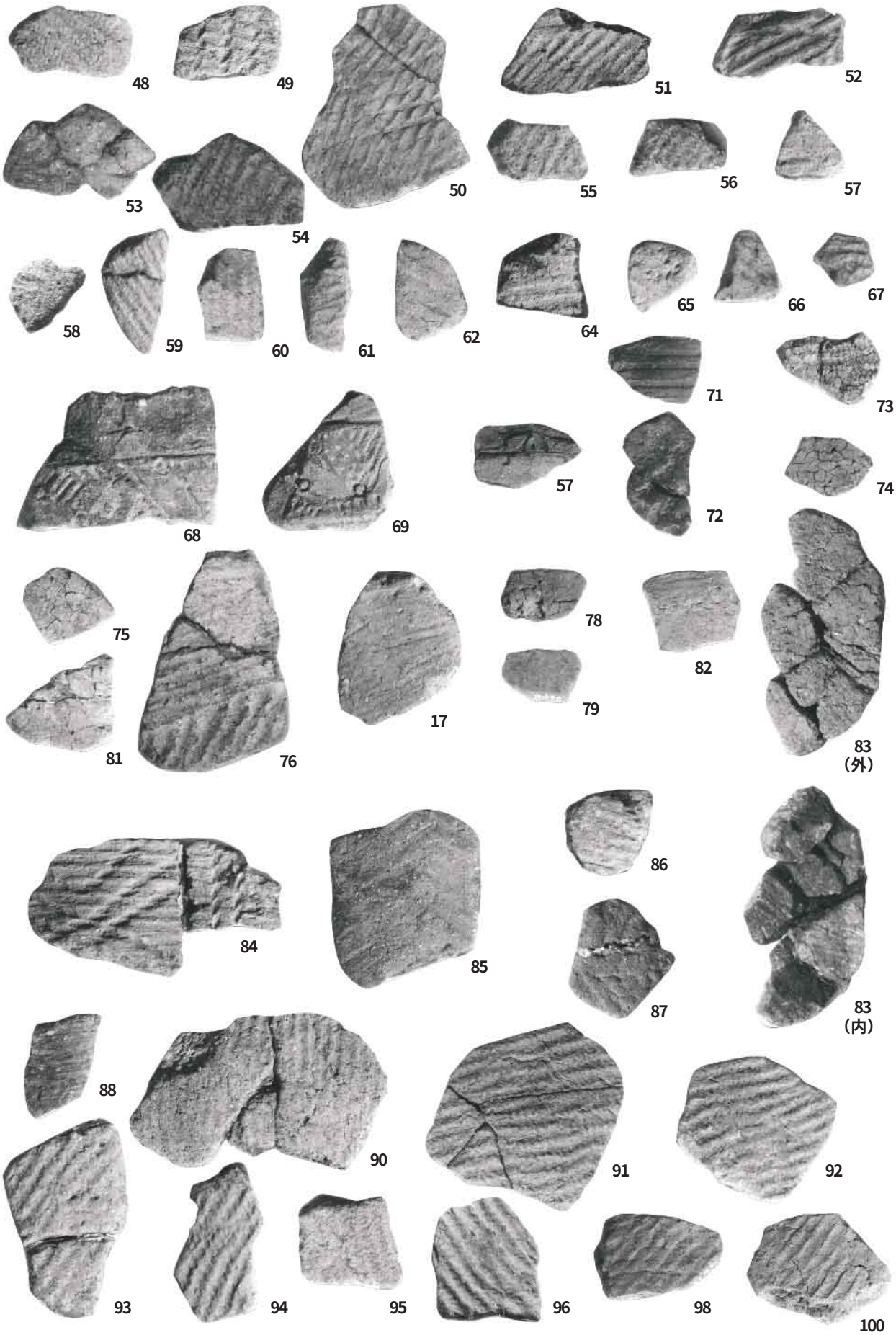
6. SX01・遺物出土状況③

7. SX02土塁下部の遺構群（北から）

8. 同左（南から）

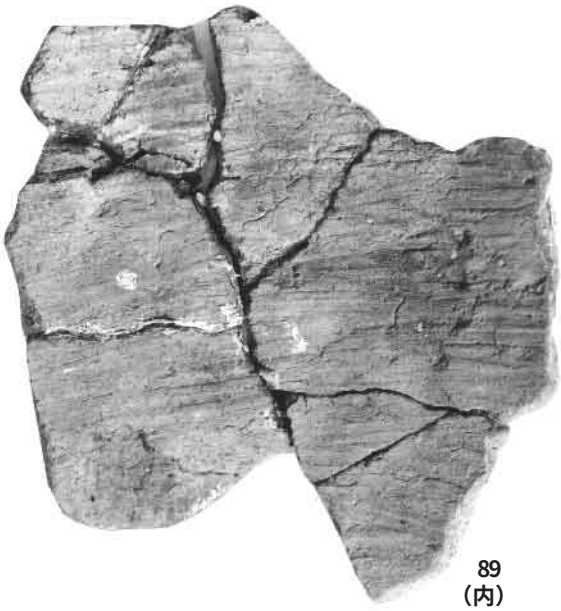
図版 6


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47


48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
64
65
66
67
68
69
71
73
57
72
74
75
76
17
78
79
82
81
83
(外)
84
85
86
87
83
(内)
88
90
91
92
93
94
95
96
98
100

図版８

89
（外）



89
（内）

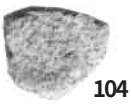
97

99

101

102

103



104

105

106

107

108

109

110

111

112

113

114

115

116

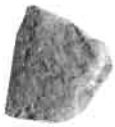
117

118

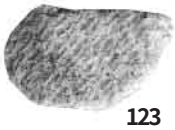
119

120

121



122



123

124

125

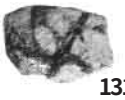
126

127

128

129

130



131

132

133

134

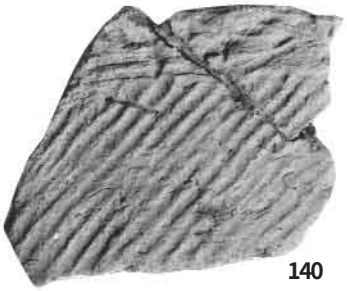
135

136

137

138

139



140

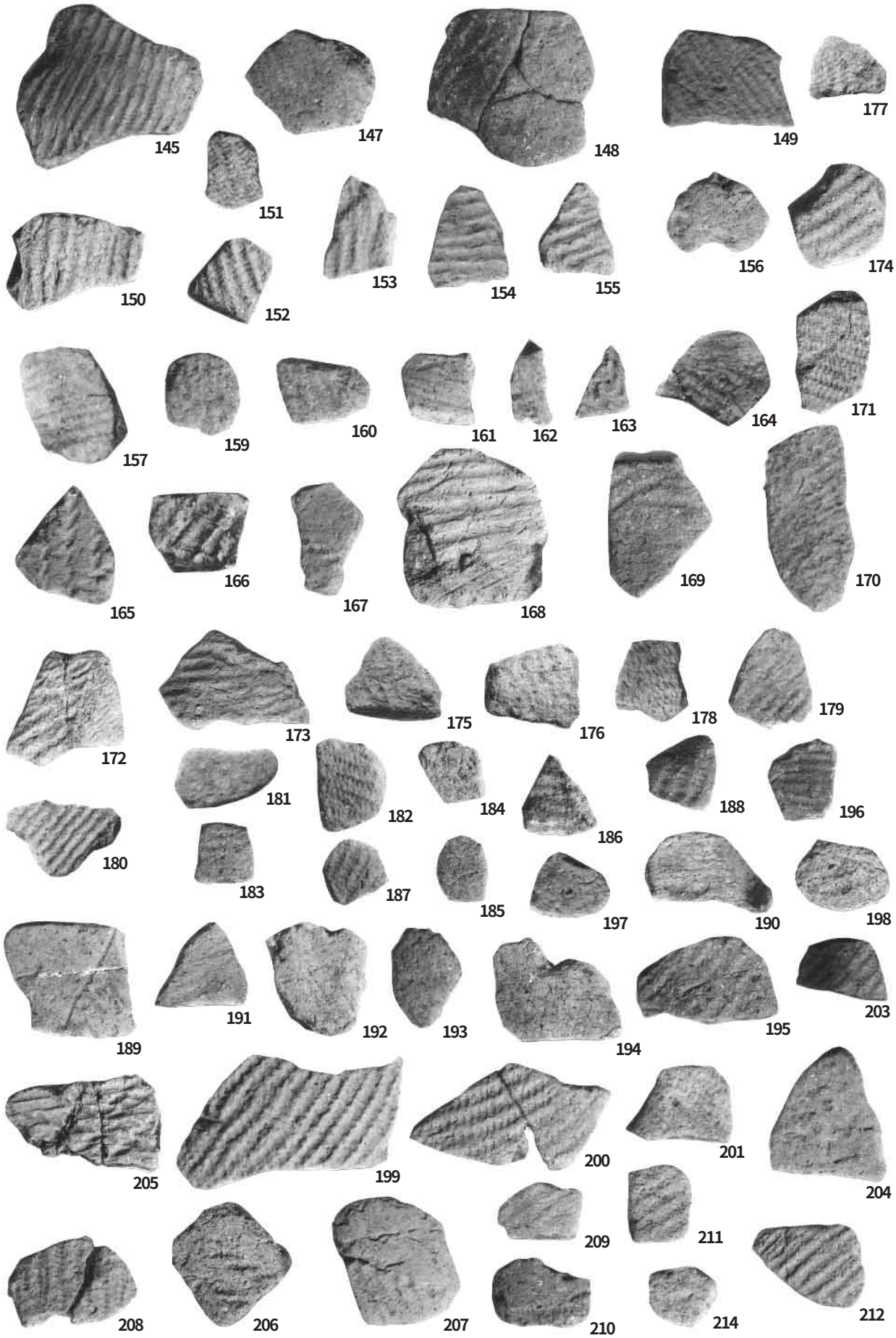
141

142

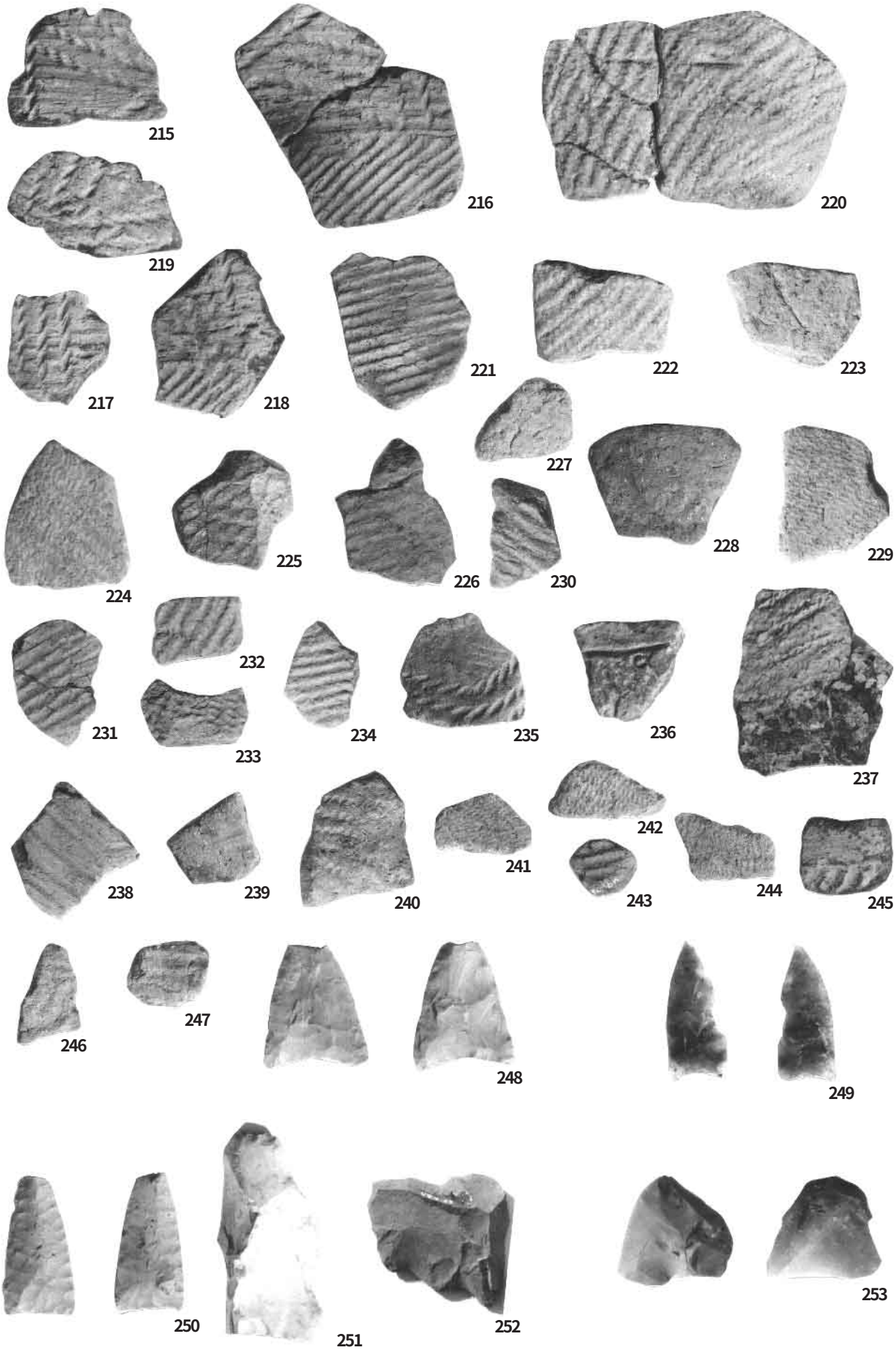
143

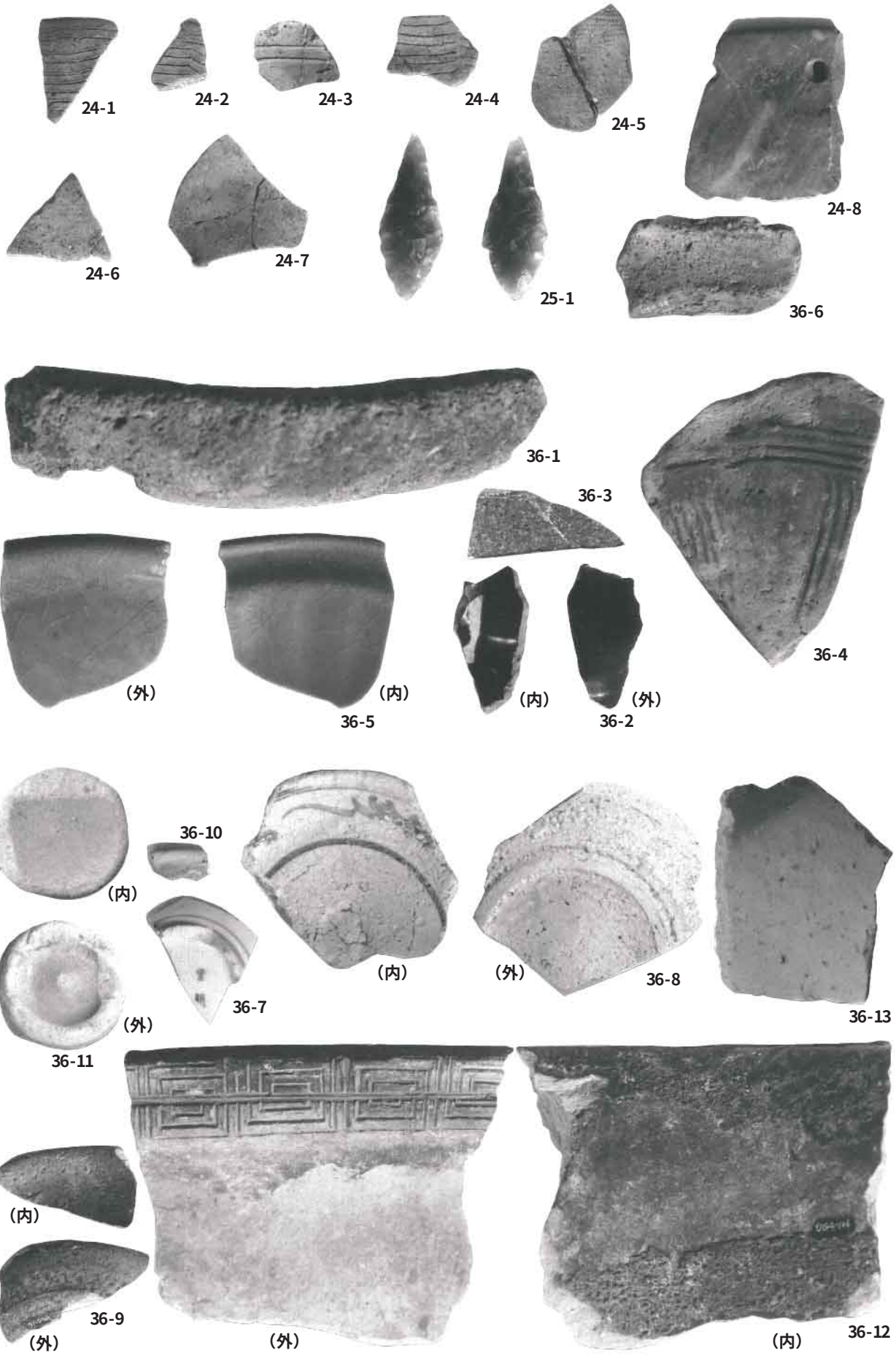
144

146


145
147
148
149
177
151
150
152
153
154
155
156
174
157
159
160
161
162
163
164
171
165
166
167
168
169
170
172
173
175
176
178
179
181
182
184
186
188
196
180
183
187
185
197
190
198
189
191
192
193
194
195
203
205
199
200
201
204
208
206
207
209
211
210
214
212

図版 10


215
216
220
219
217
218
221
222
223
227
224
225
226
230
228
229
232
231
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253


24-1
24-2
24-3
24-4
24-5
24-8
24-6
24-7
25-1
36-6
36-1
36-3
36-4
(外)
(内)
36-5
(内)
(外)
36-2
36-10
(内)
(内)
(外)
36-8
36-13
(外)
36-7
36-11
(内)
36-9
(外)
(外)
(内)
36-12

報告書抄録

ふりがな	うがさきじょうあと
書　　名	鵜ヶ崎城跡
副 書 名	宅地造成工事に伴う第４地点埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	岩沼市文化財調査報告書
シリーズ番号	第６集
編集者名	川又隆央
編集機関	岩沼市教育委員会
所 在 地	〒989-2480 宮城県岩沼市桜１丁目６－20　TEL(0223)－22－1111
発行年月日	西暦 2005年８月31日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	市町村コード 市町村	市町村コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
鵜ヶ崎城跡（うがさきじょうあと）	宮城県岩沼市栄町１丁目（みやぎけんいわぬまし さかえちょう）	042111	15023	38° 7′ 10″	140° 54′ 10″	20041012 ～ 20041224	1,254㎡	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鵜ヶ崎城跡	遺物包含層	縄文時代	遺物包含層 ピット	縄文土器 石器	当市域では初の発掘調査による縄文時代遺構・遺物を確認。縄文時代早期後葉。
	集落跡	弥生時代	竪穴住居跡 ピット	弥生土器 石器	弥生時代中期後葉と考えられる竪穴住居跡を検出。
	城館跡	中・近世	土塁 掘立柱建物跡 柱列 整地層 大型土坑 溝跡 土坑 ピット	貿易陶磁（青磁） 中世陶器 国内産陶磁器 瓦質土器 石製品 土製品	地表顕在遺構として存在していた土塁が４時期の補・改修をしていたことを確認。土塁構築にあたっては大規模な地形改変を行っていたことが判明。

岩沼市文化財調査報告書第６集

鵜ヶ崎城跡

―宅地造成工事に伴う第４地点発掘調査報告書―

平成17年８月

発行　岩沼市教育委員会

岩沼市桜１丁目６番20号

生涯学習課　TEL0223(23)1111　内線 573

印刷　株式会社ペナント企画印刷

名取市愛島小豆島字末無窪７番地の３

TEL022(384)4547